文法附註

徒然草要義

全

特116
360

始

逸見仲三郎
神崎一作 編述

文法附註

徒然草要義

櫻園書院發行

ま116
360

○徒然草と兼好法師

國語學、國文學の必要を喋々すると同時に、此の學の範圍に屬する新作の書籍、續々世上に顯出するもの、實に數多なる事枚舉すべからず。就中此の徒然草の如きは、其の註釋文法等を云へるもの、甚夥多なり。然して此の文章は、全く兼好法師が作れるものに疑おきも、書名及び綴卷等に至りては、大に疑問の存する處なきにあらず。是蓋し他人の手に成れるが上に、寫傳の久しき自然誤謬を生せしによれる歟。今一二の徵證を得たれば、左に論述して江湖の識者に正質し併せて世上に布流せる諸書の裨補となさむとす。かくて起筆の順序なれば、普通の說より擧げむ。

壽命院鈔に云ふ。發端のことばをもて、題號とする也。おかも此の草紙一部の心也。草は、かこち草わらひ草などいふ類也。つれ〴〵のもてあつかひ草おり。」野槌に云ふ。草は草紙の義おるべし。又淸書せざる前を、草案とも草藁ともいふ也。」また逍遊軒云ふ。此つれ〴〵草と號する事、兼好法師が大かた浮世の隙をあけて、心にうかぶよしごとを書つけられければ、此題號、一部の心に

15. 3. 9
内交

通ぜる歟。」北村季吟は云はく。此草紙に寺院の號、さらぬ萬の物にも名をつくる事、昔の人は少も求めず、ありのまゝにやすく付けゝる也。此頃はふかく案じ、才覺をあらはさんとしたるやうに聞ゆる、いとむづかしと、兼好みづからいへり。只發端の詞をもて、つれ〴〵草とつけたりと、いふ說を用ひ侍るべし」と、また土肥經平は春湊浪話に、つれ〴〵草上卷に、冷泉萬里小路の內裡を、今の內裡と書たり。此の內裡は、建武三年正月に燒亡せしかば、此の上卷は、建武三年より以前に書きたる事明かり。又下卷に、藤公明卿を大納言といふ。是は、建武三年五月に、大納言に補任有りし人なれば、此下卷は、建武三年の夏より後に書きしことも又明かり。」又國文全書、日本文學全書等の類の說、いづれも前記の書どもに因循せり。故に兼好法師が、自ら綴卷して二冊とし、自らつれ〴〵草と號せりと、認めたりしものに外ならず。乞ふ次に論陳するを見て、其の如何を明知せられよ。

國太曆十八卷（觀應元年二月の條）に、伊賀國田井庄國見岡の草庵に於ける、兼好法師が死後の遺物どもを詳記せり。云はく。古筆の法華經一部、自筆の老子經、源氏物

語須磨明石卷、頓阿自筆の幻の卷、神代卷二冊、反古手習の書捨二包、黑衣二襲、平生の宿衣衾、食椀等斗也」と、茲に自筆の老子經は見えながら、世に有名なるつれ〴〵草なし。故に之を疑ふ事久しかりき。然るに此の頃、靜幽堂叢書を閱するに、安永二年癸巳閏三月十五日、伊勢平藏貞丈が記せる、兼好墓所圖の追書に云ふ。三光院殿御作の崑玉集に云。兼好法師のつれ〴〵草は、其世にハまるものなかりしを、わらはの命松丸、今川了俊のもとにつかへてありしに、兼好もしや歌など殘れるか。作の物語やあるとときれしに、書捨てられし藻鹽草、あるは歌のすゞろごと葉も、げにやおほくハ庵の壁にはられて候。とゝにもおはしませども、みづからが重寶にも形見にもと、たくはへ候と語りければ、それ探ねさせよとて、吉田の威神院へ、は命松丸を遣し、伊賀の草庵へハ、從者伊豫太郎光貞といふ者、歌の志ありとて遣されしが、歌の集は伊賀の草庵にて、五十枚ばかり集め、つれ〴〵草は吉田にて多く壁にはられ、あるハ經卷おどを寫せる裏書にてありしを、取り來りぬ。これを、了俊、命松丸などゝ取り揃へ、命松丸がもとにありしをも、亦二條の侍從の方に、讀みつかハされしをもとひ蒐

め、歌の集二冊とし、又草子をも二冊とせし也。つれ〳〵なるまゝにと書きいたせし語意の、面白く哀深きになぞらへて、つれ〳〵草といふ題號は附られたり」とあり。爰に於て予輩が年來の疑端氷解せり矣。

又、大日本史の兼好傳を按ずるに、其侍童有命松麿者。傳兼好業。善和歌。後薙髮依今川貞世。居鎭西とあり。其註書には、文祿清談曰。命松丸薙髮著書、引和歌記時事。今按、松翁著吉野拾遺。而清談所引全與拾遺合。拾遺曰、余與兼好有舊好。則松翁蓋命松丸也と見ゆ。又、末のいとなみといふ書には、妙松丸と自記せる由、平田貴德も云へれば、三樣共に同人あるべしと雖、其の姓氏不分明なるは遺憾あり。されど斯の如き著作あるに因て按ふに、兼好が遺趣を繼續せる當時の學者たりし事は、疑ふべからざる事實ならむ。然れば現時も世人が文範となして、珍重措かざる徒然草は、此の命松麿と、今川貞世との手に成りし物にして、兩氏は即之が編纂者たり。兼好法師は即之が原文者なりといふべし。嗚呼其れ本書の文法を論評し、本篇の註釋を完全せむとするに於ては、須らく玆に着眼するを最も至要とすべきを、文運の盛時なる今日に當ても、なほ

因循之を觀破するの眼識なくして、之が法格を議し、之が講義をなす。故に古記を再曝するに過ぎざるの感あり。本書に對する新思想起らざるも亦宜なる哉。

さて又近頃、世上に生出でたる、即國文叢書とも云ふべきものに、本書をも列載して解題めて文を添へたり。其の文に云ふ。此の書は、兼好法師のかけるものなり。兼好は吉田兼顯の子なり。後宇多院の北面の臣にて、左兵衛の佐なりしが、帝の崩御の後、やがて遁世して兼好法師とよべり。兼好は天台の學に達し、かつ儒經を學び、殊に老莊の道を好めりとか。歌よむ事極めてめでたく、頓阿、淨辨、慶運、兼好とて、此頃の四天王といはれしあり。觀應元年四月八日、六十八歳にてうせぬ。此書は隨筆のたぐひなり。文の妙なるはさらなり。世俗を憤りておのが志を陳べたるなど、其意いと深し云々。兼好が東行は、資朝卿と心を合せて、北條家を窺はむとなり云々、南朝より召されは、使廳へも訟へずして走昇り、北朝よりすれば、いなびて賜を受ざるなど、雄々しともをゝし」といへり。按ずるに本文は、野槌、文段抄、春湊浪話などの說を本據として記され

けむ。故に兼好が官職及卒年の月日等、誤を以て誤を傳へたりといふべし。北畠具元が寛保四年の記に、水戸家所藏の兼好傳中に仕後宇多帝、任左兵衛尉。常曰燈下讀書、尙友古人。樂莫過焉云々とあるを引き、越智頼文が水戸の史官、依田喜左衛門某より請求めたる由を記し、次に頼文の説として擧げて云ふ。凡兼好傳に於て、天下の書悉く左兵衛佐と記す。剩、印本大系圖等には、右兵衛佐と記せり。抑、兼好出仕の始め、瀧口に補せられ、利運して六位藏人、及左兵衛尉に任ぜられ、終に中年出家したり。是故に中々左兵衛佐に任ぜらるといふは、羽林家名家の人々の列として、其外五位の殿上人たる中可然輩の任なり。兼好の及びなき事歟」と宜なる哉。大日本史に左兵衛尉とせられし事、又、都の住人山本春正の門弟原安適（享保の初、七十三にて死せり）翁云ふとして、古老傳に兼好觀應元年六十八歳にて卒すと、然れば九十代後宇多院の弘安七甲申年頃の生れなり。後宇多帝に仕ふとあるを以て、彼帝御在位中に仕へたりと心得るは、甚辟事なり。卒年分明なる上は、兼好、當時僅に十歳を過ぎざる小兒也。弘安十三年御位を退かせ給ひ、凡五帝を歴て、御子後醍醐帝の正中初年崩御なれば、伏見院

後伏見院の間、先禁中の瀧口に參り、後二條院、花園院に至るまでに、六位藏人に及び、左兵衛尉、尉にも任ぜられたりしが、其頃、後宇多の仙洞にて渡らせ給ふ御所へも、北面として參りたるものと知るべし」と記せり。以て法師が經歴はほゞ知らるべきも、なほ左に其の詳細の樣を陳述し、當時に於ける史學上の、一大材料にも供すべし。

園太曆八卷に云ふ。荻の戸の隅に怪鳥二羽居庭上。兼好朝臣、自取胡籙村重藤梓弓射落。一羽似鴨有黑毛。一羽似鷹其身赤。醫儒其外視之、不辨其名とあり。是花園天皇の延慶二年六月十四日の事にして、兼好廿六七歳の時なり。また同書十八卷に云ふ、觀應元年二月三日頃、兼好病惱之由有其聞。發心僧尤可惜之由、依上皇勅、典藥頭和氣清元赴彼地。且米穀三十石を給ふ。同七日自成忠奏云。兼好彌病難治といへども、典藥頭の藥用を嫌ひて、生死無常の急は、桑門の喜ぶ所也とて、振頭不用之。依之典藥頭返登之由奏之。件米穀を近村之土民に充行之。同七日二條良基公稱急病、籠居越伊賀。兼好年來の友たり。終に二月十五日兼好卒。自伊賀注進。上皇主上諸院后惱宸襟龍袂を濡さる。云々。廿

五日米五十石鳥目貳千貫を賜ひ、田井ノ庄に墓を築て、遍昭寺を召て此事を被命。伊賀國分寺より役勤葬事。廿七日贈賜權僧都とあり。茲より所謂上皇は光明天皇、主上は崇光天皇として、即兼好の死は、後村上天皇の正平五庚寅年なれば、北朝の所謂崇光天皇の觀應元年庚寅にて、後醍醐天皇崩御の建武四年を去る事、十二年の後に當れり。

又春湊浪話に、太平記に所謂高師直が希望に應し、艶書を書きたりといふを、兼好の南朝へ志をよせし故に、足利家の内間を亂さむ端緒ともなりおむと、悅びて書きたりし由を陳べて「誠にも師直が所行、かゝる不義重りしより事起り、將軍家大に亂れて、將軍も已に自害あらむとせし程の事になりて、終に師直兄弟其外高の氏族皆殺されけり。是にて思へば、兼好折々伊賀より都に登り、内間せし事有しおるべし。されども、其の身をたくみはせし故（中略）一生悲なく、觀應元年二月十八日に、伊賀の國見山の麓奈保村の庵に寂す。」また其の註書に云ふ。「兼好法師の終をとりし年月、爰に記すは、園太暦によれり。奈保村にある古墓には觀應元年二月十五日とありといふ。古き墓おれば、八の字を五と見誤りたるにや。又高野山西光院に位牌あり。是には觀應元年四月八日、六十八歳卒と記せりといふ。考るに二月十八日に寂して、四月八日は大概七々日にあたる日にて、其日に位牌を西光院に建て、直に其日を書付たるにぞあるべき」と云へり。而して茲に法師が終焉の年月、園太暦によれりとあれど、畢竟園太暦は、中園内大臣公方卿の作にして、卷紙凡百卷許おりしを、朝廷に係る事況のみを、拔萃して三十二卷とせる趣にて、寫傳の久しき誤謬なきにしもあらぜ。且摸寫數本異同のある有れば、土肥經平は二月十八日寂と記せる一本によられしおるべし。結�録に云ふ。兼好の墓は、伊賀の國見山の麓、田奈保邑にあり。高き地より頂に至るまで五尺三寸、上横の亘二尺なり」とて其の圖を擧げたり。其の圖中の文に「兼好法師墓、觀應元年二月十五日」とあり。由て按ずるに、二月十五日を卒日となすを正しとすべきか。若しくは又二月十八日なりとするも、園太暦の本文に差支はなきも、高野山西光院の位牌に、四月八日六十八歳卒とせるによらば、二月廿五日葬儀を營み、同廿七日權僧都を贈り賜ふの文に合はざるを如何せむ。然れば、明治以前に係る、註釋本などの、其の傳記を誤るもの、

僅々此の兩三年間に出でたるものにも、之を辨明せられざりしは上に甚國文の意深切なりとするも、史學上に甚疎洩なりとの評は、免るべからざるものといふべし。まして國文全書中なる校正補注徒然草文段抄に、墓は雙岡にあるべし。家集に、雙岡に無常所まうけて、傍に櫻をうゑさせて云々」とあるを、其の儘に擧げて打捨てられしは、校正補注の甲斐やはある。

さて兼好が南朝に志を寄せて始終一途なりし事は、前引の春蔭漫話を始め、文段抄、大國隆正が兼好法師傳記考證、また近來出版の諸書にも見えたれば、茲に敢て贅太せず。而して園太曆に因るに、醫藥を下し賜へる、米穀及鳥目を賜へる、葬儀を營ませらるゝ、權僧都を贈らるゝ等、皆北朝の恩賜に係る。加之、崇光天皇も、光明上皇も、また諸院后も、兼好が卒去を聞召され、御袂を濡させ給へる由あれば、げに御寵愛の深かりし事、推察しまつらるゝに併せて、聊か法師が心中に、疑念をおかるゝの點なきに非ずと雖、なほ案ずるに、兼好は素より桑門の身、塵世に意なきは即本領なれば、歌會、講會、佛事等には、時々召に應じて參朝せりし事もありて、北朝よりかく重疊の恩賜ありしおくむ。其の意を吉野

に寄せたりし事は、病惱の最後に望みても、生死無常の急は桑門の喜ぶ所也とて、北朝の醫藥を服せざりし一事にても、思ひ半に過ぎむ噫。

かゝれば、徒然草を講習せむとするに於けるや、まづ之が文案者たる、兼好の意を意と成すべきは勿論なれども、其の題號及び上下二册の綴卷は、今川貞世と命松麿との二人なる事を主眼として、文章の次第、聯卷の如何を研究せば、玉石混同美惡一貫なりや否やを、巨細に刈別し得て、遺洩なきに至らむ歟。予輩は素より、本書に對する所感居多ありと雖、事茲に亘るに至らば、即一訣說にして盡すべきにあらず、以て一部の著作たらざれば飽かざるなり。故に今は其の開題を略述する迄に留めぬ。讀者それ之を諒せよ。

卜部家系圖

尊卑分脈、諸家大系圖、諸家系圖纂と本據として、祭主系圖、吉田系圖、平野社傳、知譜拙記等に參照し、其の他の諸書にも合せて作れり。然して前載の論說中に、兼好と左兵衛尉とせるは、最も信據すべき說ぞと覺ゆれば、今は大日本史の校定する所に從ひて改めたり。見む人それこれと諒せよ。

∴大織冠鎌足——國子　大連——國足——意美麻呂——

清麻呂（景雲三年勅賜東宮傳大中臣朝臣姓　神祇伯　右大臣　從二位）

- 今麿……
- 諸魚（卜部吉田元祖　神祇伯　參議大膳　左近大將　正四位上）——智治麿（神祇伯　從四位上　右中辨　近江權守）

平麻呂（神祇伯　從五位上）

- 豐宗（平野社預）——好眞（長上　平野社預）
- 正棟（僧侶法名實演　云熱實和尚）
- 兼國（卜部吉田祖　神祇大副）……

兼延（一條院被殺後　筆被下兼一字　長上　平野社預）

- 兼忠（神祇伯長上　從五位下）——兼親（神祇伯長上　從五位上侍從　吉田社預）——

- 兼政（神祇伯長上 從四位下侍從 上北面）
  - 兼俊（神祇大副 長上侍從）
    - 兼康（神祇權大副長上 從四位上侍從）
- 兼貞（神・權大副 長上侍從）
  - 兼茂（神祇大副 長上侍從）
    - 兼名（從四位下 右京大夫）
- 兼顯（從五位下 治部少輔）
  - 慈遍（依南朝勅 爲大僧正）
  - 兼雄（從五位上 民部大輔）
  - 兼好（左兵衛尉 以俗稱爲法名）

本圖は、兼好法師の事を主としたれば、清麿諸魚兼名等、兄弟多のりしのぞも、茲には略せり。のくて諸魚の弟、大判事從五位下今麿の統は、ろの六世大中臣能宣朝臣以後、世々神宮祭主にして、子孫繼續し來れり。又豊宗の弟兼國以下數世は、卜部吉田等の家系を承傳せり。故に……と附して之を分ちぬ。

凡例

一　此の徒然草は、元來胸中に浮び出づる事どもを、何くれとなく書流したる隨筆にして、文体を調へむと搆へたるものにあらねば、後世の文範とあさむあぞは、筆者は素より、編者等も、夢想にさへ思知らざる所ならむも、今し時文と書出でむとする、資料たらむ事は、世の許す所なるべくなむ。これ此の要義を編して、文法を附註せし所以なり。

一　此の要義の本文は、左に掲ぐる註釋書に就きて校合し、就中其の正鵠なるものを採れり。故に何本を本據とせりと云ふにあらず、編者が公平なる觀察上より、諸書の精粹を撰擇して編せるなり。

一　徒然草抄　一名壽命院抄　二卷　立安法師著
一　野槌　十三卷　林道春著
一　鉄槌　四卷　青木宗胡著
一　同增補　六卷　山岡元隣著
一　金槌　十二卷　西道智著
一　慰草　八卷　松永貞德著

一 長頭丸抄　二卷　同　人著
一 古今大意　二卷　作者不詳
一 古今抄　八卷　大和田氣求著
一 徒然草抄　十三卷　加藤盤齋著
一 句解　七卷　高階揚順著
一 文段抄　八卷　北村季吟著
一 諺解　五卷　南部宗〻著
一 隱解　十七卷　井村信成著
一 徒然草大全　十三卷　高田宗賢著
一 徒然草新註　四卷　清水春流著
一 直解　十卷　岡西惟中著
一 參考　八卷　淨福寺惠空著
一 諸抄大成　二十卷　淺香山井著
一 看書　五卷　三木隱人著
一 集說　十五卷　隱者閑壽著
一 吟和抄　五卷　作者不詳

一 叔寞草貫旨　五卷　作者不詳
一 奥義抄　六卷　高屋近文著
一 要草　七卷　厭求上人著
一 片玉彙事　一卷　作者不詳
一 つれ〴〵の讃　八卷　東華坊文考著

此外續群書類從に載れる古本、猶其他とも參照しつれど、あまりに煩しければ、爰には略きぬ。

一 徒然草の段數は、諸書ふの〳〵少異ありて一定せず。例へば繪抄は二百四十七段、隱解は二百四十六段、文段抄及び大全は、二百四十四段、大成、參考、及び盤齋の徒然草抄は、二百四十三段とせるが如し。されどこは、兼好法師が意にあらざるは素よりにて、今川了俊等の意にてもあく、後人の所爲に出でたるものなめれば、今は多數なる方に從ひ、大成、參考等の段數に據れりき。

一 此の要義は、徒然草と讀まむ者として、其の語解と文格とを兩なから得て、よく其の義理に通せしめむと務めたれば、和漢雅俗混合の時文時語と以て解釋したり。されば其の用語の一定せざる所も

あらむ歟。讀者乞ふ其の意を得てよ。

一　此の要義の語解は、故人の註釋の中、最も正確に最も信據せらるる者を採り、又議論の區々にして一定せざるものは、何書に云々と書きて、其の據る所の說を示しぬ。

一　此の要義の文格は、文脈を知らするは勿論、發端、結尾、照應、對句、疊句、重語、含詞、句章、篇等を簡易に說明し、以て文法の梗概を會得せしめむことを務めたり。但し每條に重疊して說かむも煩しければ、所々に之を註し、餘は類推して知るべくゝのしぬ。

一　此の要義の本文の句讀を分つに、句には○印を附し、讀には丶印を附したるものは、國文句讀法の定むる所に據れるなり。

明治二十九年四月

編者識

文法附註

徒然草要義

逸見仲三郎
神崎一作　編述

つれ〴〵なるまゝに、日くらし硯にむかひて、心にうつりゆく、よしなしごとを、そこはかとなく、かきつくれば、あやしうこそ、ものぐるほしけれ。

〔語解〕　つれ〴〵。徒然の字とあつるあり、ものさびしく閒寂なるといふなり○まゝ。隨なり。徒然なるに隨ての意と解すべし。ろと閒の字と以てこれにあて、つれ〴〵なるあひだにと說くもあれど、こは鑿說に近し○日くらし。日と消すなり。これぞといふこともなさで、光陰を送るの義なり。「く」の字淸て讀むと常とすれど、にごりて讀む例もあり○硯にむかひて。むかひては對してあり。なほ机によりゐてといはんが如し○心にうつりゆく。見もし聞もしする物事の心にうつり來ることなり○よしなきごと。何の由緒もなきことの義なり。俗にムダゴトといふに當るべし。こは謙遜して書ける詞なり○ろことはのとなく。確とさし定めたることもなきなり。卽ち其處と當處もなく胸に浮んでくることと、紀律なく書附くとの意あり○あやしうこそ。奇怪なり。こそはのとなく書附たるろのことは、由緒もなきことゞもにて、我心ながら不可思議

に物狂しげに思はるゝとなりけれは上のころの結詞なり。

〔文格〕 つれ〴〵なるまゝにのには、下のおきつくればの詞へつゞく辭格にして、これと間接法聯續格と云ふあり。むのひてので、よしあしごとのでも同じ格なり。此の餘は直接法聯續格、すなはち語辭と隔てずして、たゞちに次の詞へつゞくものなり。

いでや、この世にうまれては、ねがはしかるべき事こそおほかゞめれ。みかどの御位はいとものかしてし。竹の園生の末葉まで、人間のたねならぬぞやんごとなき。一の人の御ありさまはさらなり。たゞ人も舍人なぞ給はるきはゝゆゆしと見ゆ。其子うまでまではふれにたれど、なほなまめかし。それよりおもつかたは、ほどにつけつゝ時にあひ、おたりがほなるも、みづからはいみじとおもふらめど、いとくちをし。

〔語解〕 いでや。發語の詞なり。つきづきの句章と呼び起すに用ふるなり○この世にうまれては。人間が、此世の中に生れ出でゝはなり○ねがはしかるべき事。人おの〳〵其分際に應じて、ねがはしくあるべきことの義あり○おほかめれ。おほかんめれと「ん」の字を添へて讀むべし。即ち多くあるめれの略語なり。こは、上の句の結語にて、人々の希望する所のもの、多くあるならむといふ義あり○みかどの御位。みかどは皇帝にて、すなはち天皇の御位なり○いとものし

こし。いとものは最字とあつるなり。このしこしは、可畏となり。恐れ多きの義にて、賢の義にはあらず○竹の園生。親王の謂なり。こは漢の文帝の子、梁の孝王、居宅を東苑に築きて、竹園と名づけたる故事に由れるなり○末葉。竹といふより緣ととりて、末葉とは云はれたるなり。實は親王方の御末孫といふ意なり○人間のたねならぬ。我國の皇族方は、おしこくも天照太神の御血統にして、普通人間の胤裔にてあらずとなり○やんごとなき。止む事なきより訛り來れる語にて、格段に尊しと云ふ義なり。「なき」は上の句の「ぞ」の結なり○一の人の。攝政關白のことなり。職原抄に執一柄必蒙二一座之宣旨一故稱二一人一と見ゆ○御ありさまはさらなり。御樣子は、殊更いふに及ばぬとなり○たゞ人も。こゝのたゞ人は、攝政關白に對していへる詞なり。されば位官のなき人といふ義にはあらで、攝政關白の外の、清華、羽林家、名家などの、近衛の舍人と御免の人々の事といふ○舍人。隨身なり。時の高官の人につく護衛兵なり。弘安禮節云、隨身、攝政關白十人府生二人、番長二人、近衛六人、大臣大將八人、納言參議六人、中將四人、少將二人、諸衛督四人、佐二人とあり。これ御免にてつけらるゝ隨身の數なり○きは。これ際の字にて、其分際といふ義なり○もゝし。甚しくの義にて、俗語の「タイツツ」といはんが如し○ろの子うまご。其子孫なり。うまごと常にまごといふは、略したるなり○はふれにたれ。はふれは零落と書きておちぶれたると訓ずるなり。「ふ」の字清てよむと、濁りてよむとの兩說あれど、まづは清む方よろしからむ。○にたれど。去有雖の義なり○なまめかし。やさしく上品の義なり○

ゑもつこのた。近衛の舎人給はらぬ人々にて、五位六位殿上人受領等の類なり○ほどにつけつつ。ろの人の身分の程度に就ての意なり○時にあひ。時、めぐ時機に遇へばとなり○したりがはなる。爲得有顔にて、卽ち誇りとる貌なり○みづから。自身なり○いみじ。今の俗語にて「タイソウ」又は「エライ」といはんが如し○おもふらめど。思ふであるあらんなれどもなり○いとくちをし。甚にが〳〵しきことにて、詞にのけて言ふも口を汚すのみなるが惜しきとなり。

〔文格〕この一章は、大方、短句法組織格と以て成文せり。故に直接法聯續格のみ多くして、間接法聯續格はいと稀なり。ろれより下つ方はのは、下のしたり顔なるへ詞と隔てゝ續くめり。されば、短句法組織格には、間接法聯續格は、甚少きことと知るべし。

法師ばかり、うらやましからぬものはあらじ。「人には木のはしのやうにおもはるゝよ」と、清少納言がかけるも、げにさることぞかし。いきほひまうにのゝしりたるにつけて、いみじとはみえぬ。增賀ひじりのいひけんやうに、名聞ぐるしく佛の御をしへにたがふらん」とぞおぼゆる。ひたぶるの世すて人は、中々、あらまほしきかたもありなん。

〔語解〕法師ばかり。法華科註云、法者軌則也、師者訓レ匠也、法雖レ可レ軌、体不自弘通レ之在レ人、故曰二法師一。僧侶の通稱なり。ばかりは、程といへる意に同じゝるべし。○うらやましの

らぬ。羨ましくあらぬものはあらじとなり○木のはし。木の切れ端屑なり。さまでものの用に足らぬ義なり○清少納言がこのける。清少納言は、肥後守清原元輔がむすめ、一條院の皇后定子の宮仕せし女房なり。さて其作なる枕草紙と云ふ書に、「思はん子と法師になしたらんこそ、心苦しけれ。さるは、いとたのもしきわざと、たゞ木のはしなどのやうに、おもへるころ、いと、いとほしけれ」など記せるといふなり○げにさることぞこのし。實にさはあることとなるぞとの義、このしは事と確むる辭にて、兼好慥に感せる事ありてならむ○いきほひまうに。威勢の猛盛なるといふなり。まうは猛なり。假名文にてもこのく字音のまゝによむ一種の風あり。源氏にこの詞多きと見て知るべし○のゝしり。がや〳〵騒ぎ立つると云ふなり。風晉の義にあらず○いみじとはみえず。エライ美事とは見えぬとなり○增賀ひじり。增賀聖僧なり。平安城の人、橘ノ恒平の子なり。十歳にして、叡山の座主、慈惠の徒弟となりしが、身心清淨にして少しも名利の心なく、後ち和州多武峰の住職となりぬ。委しき傳記は、宇治拾遺撰集抄、發心集、元亨釋書等の書にみゆ○名聞ぐるしく。出家としては、名聲の世に聞えんことを欲そるは、快このらず苦しと云ふ義なり。こは甞て叡山の座主慈惠、僧正に任ぜられ威勢たけくのゝしるさまと、增賀いたくこれを嫌ひて、「のくて名聞こそくるしのれ、乞食の身ころたのしのりけれ」とうたいたる詞より引けるなり○ひたぶる。こゝは一向の字義なれど、又は永の字を以てあつべき所もあり。世にいふ、ひたすらの義なり○世すて人。この俗世界をすてゝ、僧侶となりたる人なり○中々。

却てといふべき所に用ふる詞なり○あらまほしきこのた。ありたきものと思ふ所との義なり○ありなん。俗語の「アルデアラウ」「アルダラウ」などの意なり

(文格)此の一章も、直接法聯續格なり。名聞ぐるしくの語は、たがふらんへつゞきて、間接法聯續格多し。名聞ぐるしくの語は、たがふらんへつゞきて、間接法聯續格なり。因に云ふ。此の聯續格は、文脈と知るに最も必要なるものなれば、まづ初段じふきて、此の法格と示せるなり。然して此の間接法には、殊に注意とおくべき事なり。

人は、かたちありさまのすぐれたらんこそ、あらまほしかるべけれ。物うちいひたる、きゝにくからぬこそ、あかぬ、むかはまほしけれ。めでたしと見る人の、心おとりせらるゝ本性みえんこそ、くちをしかるべけれ。

〔語解〕このたちありさま。このたちは、容貌なり。ありさまは、人品と云ふなり○すぐれたらん。優れたるはなり○あらまほしこのるべけれ。俗語にてアリタイト思ウといふ詞に當るなり○物うちいひたる。「うち」は助勢辭にて添詞なり。たゞものと云ひたるはの義なり○きゝにくからず。慎みて物語するは、聞き惡くあらずとなり○愛敬。忠愛と恭敬とを縮めたる語なり。ろの意は、愛と敬とをあひ兼ねて過不及なく、言語にあらはすべきことなり○あかず。飽かずなり。倦み厭はれぬ義なり○むこのはまほしけれ。「むこのは」は對はむと思望さるゝなり。ろの人と長く對坐

して話してゐたしとなり○めでたしと見る人。めづべく見ゆる人との意なり。めづるは愛の義にて、容貌品位の優美なる人とさして云ふ○心おとり。思ひの外に見さげらるゝ心なり○本性みえんころ。本性は生れつきの氣性といふなり。「ころ」は第三段の係詞なり。さころの意は、本來の性質が人に知れるとなり○くちをしかるべけれ。意外なるより口惜しく殘念なるべしとなり。「けれ」は第三段の結詞にて、上の「ころ」の結びなり。

(文格)此の章は、直接法聯續格のみにて、他の法格と用ふる事なくして成文せり。故に事柄の繁重ゐることもなし。

品かたちこそ、生れつきたらめ。心はなどか賢より賢にもうつさばうつらざらむ。かたちこゝろざまよき人も、さえなく成ぬれば、志なくたり、顔にくさげなる人にもたちまじりて、かけぎけおさるゝこそ、ほいなきわざなれ。

〔語解〕品かたち。品位と容貌のことなり○生れつきたらめ。生れ付きにてあらんなり、こは、人の分限や、容貌などは、生れながら、其人ろの家に付きてあれば、願ひても致方なきことといふ義なり○心はなどか。心ばこのりはドチ云してかといふに同じ○賢より賢にもうつさばうつらざらむ。聖賢の道に率由して、才學と研磨させなば、よしや、其身、不肖なりとも、いかでか、賢者にも移り變らんことやあるべきとの心なり○このたちこゝろざま。人の容貌と意狀となり

○さえなく成りぬれば。才智るくるあり去ればあり○しなぐたり。其品位の人より下り落るといふなり○顔にくさげなる人。顔色の惡氣なる人あり。「さ」字は形容の助語あり。卽ち下賤の奴輩とさせる心なり○たちまじりて。「たち」は助勢詞なれば、たゞ交りての義と見るべし○おけず。掛け較ぶるに足らずの義あり○けおさるゝ。氣壓さるゝにて、人に押し斥けらるゝ義なり。柳田屯の勸學文に、學則庶人之子爲二公卿一。不レ學則公卿之子爲二庶人一。と云へるは、よくこゝの句意に適ふといふべし○はいなきわざなれ。本意るき事ぞと云ふ意なり。

(文格)心はるぞこのは、うつらざらむへ、かたち心ざまよき人もは、云なくだりへ、云なくだりは、たちまじはりへ、語と隔てゝつゞく文脈、すなはち間接法聯續格あり。

ありたき事は、まことしき文の道、作文、和歌、管絃の道、また有職に公事のかた、人の鏡ならむてそいみじかるべけれ。手なゞつたなからぞ、はしりかき、聲をかしくて拍子とり、いたましうする物から、げてならぬてそ、をのてはよけれ。

「語解」 ありたき事。人の身の上に、ありたきことはとあり○まことしき文の道。「まことしき」は誠實の義にて虛飾にあらぬ心なり。卽ち四書、六經の道あり○作文。文章を作ることのみの義なれども、中古は、詩と賦することも、作文中にこめて云へり○管絃。管は吹くものと言へば、笛の類なり。絃は撫でるものといへば、琴の類といふ○有職。故實に通じ、禮儀典型を知

るを云ふ○公事。禁中一切の行事をさすなり○人の鏡ならん。我身の行爲、人の摸範となるを云ふ。なほ、人の龜鑑と云はんが如し○手なゞつたなからず。手跡の拙劣ならざるを云ふ○はしりがき。草書など達者に書きちらす義なり○聲をかしくて拍子とり。聲面白く、いま樣、早歌など謠ひて、拍子とりつゝ囃すといふ。拍子を「ひやうし」とよむも苦しからねど、なほ「はうし」とよむぞ可なるべき○いたましうする物から。物からは、「ものながら」なり。さて、其意は、酒宴などの席にては、盃をすゝめられていたみ入る樣にするものながらとなり。こは酒は合歡の物なれば、只亂に及ばざるを度とすべし。必ず飲まざるをよしとするにあらざる事を言へるなり○下戸ならぬこそをのこはよけれ。「をのこ」は男子の通稱なり。男は下戸ならで、少量の酒を飲むもよしとの心なり。

(文格)此の一章は、すべて直接法をもて書きつゞけたるが中に、はしりがきの語、下に聯接すべき所なし。人の鏡ならむこそ云々の語、茲にもおくべき理なれど、前に讓りて略ける なり。あるものとして解くべし。こは文法にいはゆる省筆法なりけり。

いにしへの、ひしりの御代の政をもわすれ民の愁、國のそこなはるゝをもしらず、よろづにきよらをつくしていみしとおもひ、所せきさましたる人こそ、うたておもふところなく見ゆれ。

〔語解〕いにしへのひとりの御代云々。古の聖賢ある天皇の御時世といふなり。こは、和漢共に、聖主の御宇には、天子躬ゝら儉約と旨とせられ、國と愁ひ、民と憐み給ふと言ふなり○民の愁。人民の疲弊の境に在りて、愁歎せらるゝといふなり○國のろこなはるゝ。國家の損害せらるといふ○よろづにきよきとつくして。萬事に華美と盡くしてなり○いみしとおもひ。いみしは甚の文字と以てあつ。こゝにては甚よしと思ふとなり○所せきさましたる云々。所せきは所狹し書て所の狹隘なる義なり。宮殿樓閣など、場所せばきまで造り建て、壯大なる有樣と好める人ころとなり○うたて。この詞に兩義あり、轉の字とあてゝ、あまりにと」いふ心に解くと、又滿情の字とあてゝうたてしきと云へるもあり。されどこゝにては、あまりにと云ふ意に見るべし○おもふところなく見ゆれ。思ふ所なくは、何の思慮する所もあしとの義にてすこしの思案遠慮もなき躰に見ゆとなり。

(文格)民のうれへ、國のろこなはるゝ」は疊語法の精格なり。忘れ知らず等の語は、淸らとつくしてへ係る文脈にて、間接法聯續格なり。然して知らずのずの下に、しての含語あれば、ずしての意に解くべし。

「衣冠より馬、車にいたるまで、あるにおたがひてもちひよ。美麗をもとむる事なかれ」とぞ、九條殿の遺誡にも侍る。順德院の禁中の事どもかゝせ給へるに

も、おほやけの奉り物は、おろそかなるをもてよしとすとてそ侍れ。

〔語解〕衣冠。衣服と冠なり○馬、車。馬車にあらず馬と車となり○あるにしたがひてもちひよ。在來のものと用ゐて徒に新奇と需むる勿れとなり○九條殿の遺誡に侍る。この衣冠云々の句は、九條殿の、其子孫のために誡しめられし、遺書中にありとなり。九條殿とは、右丞相師輔公なり。九條殿遺誡に云はく。始自衣冠及于馬車隨有用之勿求美麗不量己力好美物則必招嗜欲之謗○順德院 後鳥羽院第二の皇子にまし〳〵て、八十四代の天皇なり○禁中の事どもかゝせ給へる。順德天皇の、御手づから書このせ給へる禁秘抄に、天位御物以疎爲美とあるといへるなり。禁中とは宮中のことなり。猥りに人の出入することと禁ずるにより、このくは言へるなり○おほやけは公の家にあたる義にて、禁中のことをさす。奉り物は供御の御調度なり。されど、こゝは主として御服の事といへり○おろそか。疎末の義なり

(文格)とぞは、九條殿の遺誡にもの語と隔てゝ、侍るへこのゝる文脈なり。又、このゝせ給へるにもは、結文の侍れこのゝれり。云こして侍るは係結格の第二格、侍れはろの第三格なり。

よろづにいみしくとも、色このみざらん男は、いとさう〳〵しく、玉の巵の當なきてゝちぞすべき。

〔語解〕 よろづにいみしくとも。萬の才藝に優れたりと雖もなり○色このまざらん男は。色は美なり。美を好まぬ男はとなり○いとさうぐしく。いとは甚なり。さうぐしくは寂寞の字をあつれば、さびしく物たらぬ義なり○玉の巵の當なき云々。是れ三都賦序より來れる語なり。賦序に云く。夫玉巵無當雖寶非用と。その意は、如何に立派なる玉盃と雖ども、底なきときは、其用をなさゞるが如くに、人も美を好み愛する意志なくば、何となく、物足らぬ心持すとなり。然るをこゝちぞすべきと、語を確に强めてかけるなり。

(文格)よろづにいみじくともは、語を隔てゝいとさうぐしくへ係り、このさうぐしくの下には、しての含辭ありてそこなきへ係る文脈なり。

露霜にしほたれて、所さだめず、まどひありき、親のいさめ、世のそしりをつゝむに、心のいとまなく、あふさきるさに思ひみだれ、さるはひとりねがちに、まとろむ夜なきこそをかしけれ。

〔語解〕 露霜にしほたれて。露や霜などに濡れショボたれてなり○所さだめず。其處と當處もなきなり○まどひありき。逍遙なり。西へ行き、東に赴き、其處と行方を定めず歩行するをいふなり○親のいさめ。親の誡にて、俗に異見と云はんが如し○世のそしり。世間の譏謗なり○つゝむにいとまなく。包むに隙なくと書く。謹み憚る暇なしとの義なり○あふさきるさに。從來の字とあつめり。このなた、こるたあちこちなどの心に通ふべし。故に又、左右の文字ともあふさくるさと古來よませたり○さるは。さやうにあるこのらにといふさまなり○まどろむ夜なき。睡眠する夜ゐきとなり。まどろむは、俗語に「トロットチムル」と云ふに當るべし○をかしけれ。可笑けれの義なり。

(文格)親のいさめ、世のそしりは對語法の精格なり。しほれてはまどひありきへ係り、いとまなくは思ひみだれ係る文脈なり。ひとりねがちにの下にしての含辭あり。

さりとて、ひたすら、たはれたるかたにはあらで、女にたやすからぬ思はれんてそ、あらまほしかるべきわざなれ。

〔語解〕 さりとて。然可笑くはありとてといふ義にて、上の句とうけたり○ひたすら。一向又は只管と書く。ひと筋にの義なり○たはれたるこのたにはあらで。たはれたるはたはけたるなどいふ心に通ふべし。このたは方の文字とあつ。向の義なり。こは北村季吟の文段抄に、愛におぼれて、このの親のいさめともおろれず、世のろしりともへりみぬほどなれば、女も其愛に乘じて男とたやすく思ふ物ゐれば、さやうにあらぬほどに、色ごのみともせまほしきの心なりと說けり○たやすからず。容易く有らずなり。俗にヤスッポクナイと云ふに當るべし○あらまほしるべきわざなれ。あらまは將有といふに同じく、「ほし」は欲する字の心にて、有りたく欲望

する意、「わざ」は事の義なり。

（文格）さりとてはたやすからず思はれんへ係る文脈にて、間接法聯續格、あらではあらずして

にて、上と同語へ係る同格なり。

後の世の事、心にわすれぞ、佛の道うとからぬ、こゝろにくし。

〔語解〕　後の世の事。未來の世の事、卽ち來世の事なり○佛の道うとからぬ。佛道に疎遠なら

ず、之と只管に修行すると云ふ○こゝろにくし。愛にては、奥ゆかしき義に見るべし

（文格）わすれずの下にして と含み、うとからぬの下にものはと含める文勢なり。是等の格所々

にあり。應用して意得べし。

不幸に愁にしづめる人の、かしらおろしなど、ふつゝかに思ひとりたるにはあ

らで、あるかなきかに門さしこめて、待つこともなく、あかしくらしたる、さる

かたにあらまほし。顯基中納言のいひけん。配所の月、罪なくて見んこと、さも

おぼえぬべし。

〔語解〕　不幸に愁にしづめる人。不幸は、さいはいなき義なり。愁にしづめるは、大成に云く、

主に別れ、親に離れ、子と先き立て、妻と失ふ類、みな愁にしづむなりと○かしらおろし。剃

髮する事なり○ふつゝに思ひとりたるにはあらで。浮世とまゝならぬと思ひ定めたるにあら

ずとなり○あるかなきかにに門さしこめて。此家に人が在るこの、なきこの外人に思はるゝ程に閑

靜にしての意なり○待つこともなく。世間にもとむることなきなり○さるかたの云々。去

のある方にありたしとなり、兼好自身が好める方より云へるなり○顯基中納言。大納言俊賢卿の

男なり○配所。流罪人の在所と云ふ。○さもおぼえぬべし。左樣にいさぎよき事にも思はるゝ

あらんとなり。

（文格）かしらおろしなどの下にして、あのしくらしたるの下さまはの合語あり。これ卽省筆法

にして、其のまゝと文章上にあらはしたらむには、語勢くだけて優美には聞えぬものなり。

我身のやんごとなからんにも、まして數ならざらんにも、子といふものなくて

ありなん。前中書王、九條太政大臣、花園左大臣、みなぞうたえんことを願ひ給

へり。染殿大臣も、子孫おはせぬぞよく侍る。末のおくれ給へるはわろき事な

りとぞ、世繼の翁の物語にいへる。聖德太子の御墓を、かねてつかせ給ひける

時も、てゝをきれ、かしこをたて、子孫あらせじと、思ふなりと侍りけるとかや。

〔語解〕　やんごとなからんに。身分の貴きにもあり○數あらざらんにも。人の數にも入らぬ、

あはれはこのなき、貧賤の者にてもなり○子といふものなくてありなん。子といふものなくてあ

れこのしと希ふなり。さればありなんは今の俗語にて、アリタイと云ふに當るべし○前中書王。

中書は中務卿の唐名なり。こゝの中務卿は、兼明親王の事なり○九條太政大臣。藤原伊通公の事なり○花園左大臣。後三條院第四の王子にして、輔仁親王の長男、有仁公の事なり○ぞうたえん。ぞうは曾の字又は宗の字と書く、血脉または子孫の事なり。血統の子孫の絶えんことなり○染殿大臣。染殿は所の名にて、太政大臣良房公の事なり○世繼の翁の物語。文德天皇より後一條院まで十四代百七十五年の間の帝王、攝關大臣等の來歷とかけるもの、に世繼物語といへり。又は大鏡ともいふなり。藤原爲業、法名、寂念が書けりと文段抄に見えたり○こゝときれのしことたて。此所と切りのけ彼所とたちきれの義なり。

(文格)やんごとなからむにも。數なからむにもの二つは、なくてありなむへ係る文脈なり。またわろき事なりとぞもいへるへ係り、つのせ給ひける時もは思ふありへ係るなり。さて又とのやは、との聞き侍るよといふべき略語なり。

あだし野の露、きゆる時なく、鳥部山の煙、立ちさらでのみ、住はつるならひならば、いかに物の哀もなからん。世は定めなきこそ、いみじけれ。命あるものを見るに、人ばかりひさしきはなし。かげろふのゆふべをまち、夏のせみの春秋を知らぬものぞかし。つく〳〵と一とせをくらすほどだにも、こよなうのどけしや。あかぬをしと思はゞ、千年を過すとも、一夜の夢のこゝちこそせめ。住

み果てぬ世に、見にくきすがたをまちえて、何かはせん。いのちながければ恥おほし。ながくとも、四十にたらぬほどにて、ちなんこそめやすかるべけれ。其ほど過ぬれは、かたちを耻づる心もなく、人にいでまじはらんことをおもひ、夕べの日に子孫を愛して、さかゆくすゑを見んまでの命をあらまし、ひたすら世をむさぼる心のみふかく、物の哀もをちらぬなり行くなん、あさましき。

〔語解〕 あだし野の露。あだし野は、火葬地にて、山城の嵯峨野邊にあり。歌ゐどには、あだなる心ゐよみて、人の命の露のごとく、はゐなく消ゆることにも用ひたり。○鳥部山の烟。これも火葬所ある山なればゐく云へり。顯昭が拾遺抄に、鳥部山は阿彌陀が峰にありと見へたり○ゐのげろふ。朝秀と書く。朝生暮死の虫なり。淮南子には、水上に生じ蠶蛾に似たりとあり。又た蜉蝣と書くとも云ふ說あり○こよなうのどけしや。こよなうは。これに越えるものゐき義なり。のどけしやは長閑の字に當り、ゆるやゐなる心なり○あゐずとしと思はゞ。世と厭ゐずす惜しと思はゞゐり○住み果てぬ世に。とても死ぬる習ひの世にとなり○命ながければ耻ゐほし。莊子天地篇に壽則多レ辱といふ詞と引きて云へるゐり○夕べの日。夕ゐたの日の、西山に春ゐんとする時に臨みてゐり○さゐのゆくすゑ。桑之行く末ゐり○ひたすら。一向又は只管の文字と書く。一筋にの義ゐり○ゐらまほし。命の長くゐらんことと欲する義なり。

（文格）あだし野の露きゆる時ゐく、鳥部山の烟立ちさらで」は對句法の精格ゐり。このげろふの云々、夏の蟬の云々は、疊句法の粗格なり。

世の人の心まことはすてと、色欲にはおかぞ。人のこゝろは、おろかなるものかな。にほひなどは、かりの物なるに、おばらく衣裳にたきものすとおりながら、えならぬにほひには、かならぞ心ときめきするものなり。久米の仙人の、ものあらふ女の、脛のおろきを見て、通をうしなひけんは、まことに手あしはだへなどの、きよらに肥えあぶらづきたらんは、外の色ならば、さもあらんかし。

〔語解〕色欲には衣このず。禮記禮運云。飲ー食男ー女人之大欲存焉。又た伊川曰淫ー聲美ー色易レ惑レ人。○にほひ。匂ゐり、香なり○衣裳にたきものすと。白氏文集に、君が爲に衣裳と薰ずと云ふが如し。蓋し古は男女ともに、衣裳に香と焚きしめたる風ありしと云ふならん。衣は上衣なり。裳は下衣なり。○えなひぬにほひに。えもいはれぬ匂になり○心ときめきするものなり。心動きうつると云ふ義ゐり○久米の仙人云々。久米仙人は大和葛上郡の人なり。深山に入りて仙術を學び、一旦空に昇り、故郷を過ぎたりしが、會々婦人の足を以て、衣を蹈み洗ふ其脛の甚白きを見て、恍惚となり、遂に通力を失ひて、墮落せりとなり。其詳細は元亨釋書第十八にあり。就て見るべし○外の色ならば。假粧にあらぬ眞の色と云ふゐり○さもあらんかし。左樣にまよ

ふ事あらむとなり。かしは事を確める助体辭なり。

女は髪のめでたからんこそ、人のめだつべかめれ。人のほど心ばへおぞは、もの、うちいひたるけはひにこそ、ものでしにもおらるれ。ことにふれて、うちあるさまにも、人の心をまどはし、すべて女のうちとけたる、いもねぞ、身をもしるとおもひたらぞ、たふべくもあらぬわざにも、よくたへおのぶは、たゞ色を思ふが故なり。

〔語解〕髪のめでたからん。髪のいみしくて愛すべきはとゐり○人のほど。人品の義なり○心ばへ。氣質なり○けはひ。景狀の文字と書く。俗に樣子の義に通ずべし。○うちあるさま。うちは助勢詞なり。あるさまはある樣子なり○うちとけたるいもねず。打ち解けたると樣子ゐて、よくく寢もせぬと云ふ義ゐり○身ととしともかもひたらず。身命などは、惜むべしとも、さらさら思はざるとゐり○たふべくもあらぬわざにも。堪へ忍ぶべくもあらぬ事にも忍耐するとなり○たゞ色と思ふが故ゐり。たゝ男に戀ひ慕はれんと思ひつめるが故となり。

（文格）いも寢ず。身と惜しとも思ひたらずは、共に其の下にしての含語とと加へて心得べし。このずと斷止格と見むは甚非なり。

まことに、愛着の道、其根ふかく、源とはし。六塵の樂欲おほしといへども、みな

厭離しつべし。其の中に、たゞ彼のまどひのひとつやめがたきのみぞ、老たるも、若きも、智あるも、愚なるも、かはる所なしとぞ見ゆる。されば、女のかみすぢをよれる綱には、大象もよくつながれ。女のはけるあしだにてつくれる笛には、秋の鹿かならずよるとぞ、いひ傳へ侍る。みづからいましめて、おそるべくつゝしむべきは、此まどひなり。

〔語解〕 愛着の道。恩愛熱着の道なりと野槌に見へたり。○六塵の樂欲。野槌に云く、眼。耳。鼻。舌。身。意と六根とし。色。聲。香。味。觸。法。と六塵とす。この六塵の心とけがすこと。塵の物とけがすがごとくあれは。のくは名稱したりとぞ。○厭離　いとひ離るゝ義なり○彼まどひのひとつ。色欲とさすなり。○されば。上の詞とうけたる詞なり。然の字と書く。○女のかみすぢとよれる綱には。女の髮筋と集めてよりたる綱なり。大威德陀羅尼經第十九に云く、一切女人爲レ不レ除レ欲乃一至以二女人髮一爲レ作レ綱一羅二香象能繫況丈夫輩。

〔文格〕 其の根ふかく源とはしは、疊語法の精格あり。老いたるも若きも智あると對語法の一格なり。此の三のもと、やめがたきのみぞは、皆このはる所なしへ係る文脉あり女のかみすぢとよれる綱には云々、女のはけるあしだにて作れる笛には云々は、疊句法の粗格あり。

家居の、つきづきしくあらまほしきてそ、かりのやどりとは思へど、興あるものなれ。よき人ののどやかに住みなしたる所は、さし入たる月の色も、ひときはしみじみと見ゆぞかし。いまめかしくきらゝかならねど、木立ものふりて、わざとならぬ庭の草も、心あるさまに、すのこ、すいがいのたよりをかしく、うちある調度も、むかしおぼえて、やすらかなるこそ、心にくしと見ゆれ。おほくのたくみの心をつくして、みがきたて、唐の大和のめづらしく、えならぬ調度どもならべおき、前栽の草木まで、心のまゝならず、つくりなせるは、見るめもくるしく、いとわびし。さてもやはながらへ住むべき。又時のまの烟ともなりなんとぞ、うち見るよりもおもはるゝ。おほかたは、家居にこそ、ことざまはおしはからるれ。後德大寺大臣の寢殿に、蔦るさせじとて、繩をはられたりけるを、西行が見て、蔦のゐたらん何かはくるしかるべき。此殿の御心さばかりにてそとて、其の後はまゐらざりけるとき〻侍るに。綾小路宮のおはします、小坂どの〻棟に、いつぞや、繩をひかれたりしかば、かのためし思ひ出られ侍りしに、まことや、烏のむれゐて、池の蛙をとりければ、御覽じかなしませ給ひてなんと、人のかたりしてそ、さてはいみしくてそとおぼえしか。德大寺にも、い

かなるゆゑか侍りけん。

〔語解〕つき〴〵しく。つき〴〵と順序のよき意に通ふべし。○かりのやどりはと思へど。この世と假のやどりと思へどもなり。莊子が吾生逆旅耳と云ふに同じ。○ひときはしみ〴〵と見ゆるぞのし。「ひときは」は、一段又は一層と云ふ義なり、しみ〴〵は、身に染みてなり。○いまめのしく。當世流に華美ゐると云ふなり。○きら〻のならねど。こは猶は珠玉の光輝と放つが如くならねと云はんが如し。○木立ものふりて。とりつくろはず自然のていなり。○わざとならぬ。態と造りしにはあらぬなり。○すのこ。簀子なり、樣のことなり。○すいがい。透垣なり、透き見ゆる垣根と云ふゐり、○うちある調度。常住の諸道具なり。○むのしおばえてやすらのなる。古風に單簡にこしらへたると云ふゐり。○おほくのたくみ。多くの大工と云ふ義なり。○みがきたて。家と立派に造作したると云ふなり。○前栽の草木まで云々。庭前の草木の枝とため、葉とすのせる類と云ふ義ゐり。○さてもやはゐがらへ住べき。家居とのく美麗に造り、庭内の草木に手と入れ、いつまてもながらへ住んとの意なり。○おほのた。大方ゐり。○ことざまはおしはのらるれ。家宅の摸樣にて。其主人の心事は大方推量せらるゝなり。○後德大寺大臣。正二位左大臣實定公の事なり。○西行。佐藤兵衛憲清なり。○さばりにころ。俗に「ソレ程」にころと云ふに同し。○綾小路宮。紹運圖に曰く、綾小路の宮は。妙法院門跡、性惠院、龜山院第二の御子、後宇多院の弟ゐり。○小坂どの。殿の名稱なり。○彼〻ためし。西

行が後德大寺殿とみのぎりし例なり。○むれゐて。群居してなり。○けん。過去と思ひやる助詞なり。

〔文格〕西行が見てはまゐらざりけるへ係る文脈なり。御覽じてなむの下に繩とばはられけるの含語あり。

神無月の頃、栗柄野といふ所を過て、ある山里にたづね入る事侍りしに、はるかなる苔のほそ道をふみわけて、心ぼそくすみなしたる菴あり。木の葉にうづもるゝ、筧のおづくならでは、露おとなふものなし。あかだなに菊紅葉など折ちらしたる、さすがに住む人のあればなるべし。かくてもあられけるよと、あはれに見るほどに、かあたの庭に、おほきなる柑子の木の、枝もたわゝになりたるが、まはりをきびしくかこひたりしてそ、すてしてとさめて、此の木なからましかばと、おぼえしか。

〔語解〕神無月。十月の事なり○栗栖野。山城國醍醐の邊にありとのや。○ふみわけ。道のなき處と始めて行くと云ふ。○心ぼろくすみなしたる菴あり。心ぼろくは誰人もおとづるゝなくものさびしき義なり。○露おとなふものなし。誰も訪問するものあらずとの義なり。○あかだな。閼伽棚の字と書く、梵語にては水のことと、閼伽といふ、故に閼伽棚は、佛に供ふる水

桶、又は花皿などこしらへる棚あり。○さすがにすむ人のあればなるべし。このやうにもの淋しき處に住む人のあらざらんと思ひさや、さそがに住めばすまれて住む人あるなりとあり。○このなた。彼方あり。○柑子。密柑の類なり。○枝もたわわになりたるが。枝の撓むばかりに其菓實のなりたるがありけるとなり。○まはり。周圍と云ふなり。

〔文格〕此の木なからましかばの下に、よからましといふ含語あるべし。此の格歌にはいと多し。

同じ心ならん人と、をめやかに物語して、をかしきことも、世のはかなき事も、うらなくいひなぐさまんこそ、うれしかるべき、さる人あるまじければ露たがはざらんと對ひ居たらんは、ひとりあるこゝちやせん。たがひにいはんはどの事をば、げにと聞くかひあるものから、いささかたがふ所もあらん人こそ、我はさやは思ふなど爭ひにくみ、さるからさぞともうちかたらはゞ、つれ〴〵なぐさまめとおもへど、げにはすてしかてつかたも、我と均しからざらん人は、大方のよしなしごといはんはどこそあらめ。まめやかの心の友には、はるかにへだゝるところの、ありぬべきぞわびしきや。

〔語解〕同じ心ふらん人。自分と同心の人なり。公羊傳に曰く。同レ心謂ニ之友一。○しめやかに。

閑靜なる義あり。○とのしきこと。世の面白き事と云ふなり。○はこのゐき事。あはれはこのなき事、卽はち無常の事と云ふなり。うらなく。語に表裏ゐき義にして、腹襟と開らきて云ふ意に解すべし。○露たがはざらん。露は少しもの義なり。少しも先方の心に違ふまいと思ふことと意味す。○我はさやは思ふなど爭ひにくみ。其方にはさやうに思はるゝが。我はさは思はずと爭ひにくひとあり。○さるからさぞとも云々。さやうにてあるから左樣あるぞと、其理由とよく言ひ聞したらばの義なり○つれ〴〵云々。体屈ゐぐさめとは思ふけれどなり。○大方のよしゐしごと　たゞひと通りの由緒なき事と云ふなり。卽ち普通の雜談とさす。○まめやかの心の友。まめやかは眞實の義なり。眞實ふゐし心の友となり。○わびしきや。上に說けりやはよに通ふ体辭なり。

〔文格〕とのしき事も、世のはこのなき事もは、對語法の粗格なり。されば二つのも辭よりうらなくいひ慰さまんへ係るなり。

ひとり燈の下に、文をひろげて、見ぬ世の人を友とするこそ、てよなうなぐさむわざなれ。文は文選のあはれなる卷々、白氏文集、老子の言葉、南華の篇、此の國の博士どものかける物も、いにしへのは、あはれなる事おほかり。

〔語解〕見ぬ世の人。我が生れ出てぬ先きの世の人の義なり。○文。書籍なり。○こよなう。

此上もおきといふ義なり。　文選。梁の武帝の子、昭明太子の撰ゐり。古より弘く我國の學者聞に行はる。○白氏文集。唐の白樂天が文集なり。白樂天わゐき時より長慶年中までの詩文と集めて、白氏長慶集と名つく、五十卷あり、長慶以後のものと加へて七十五卷とし、白氏文集と名つく、今の世に行はるゝは七十一卷あり。○老子の言葉。老子經と云ふゐり。○南華篇。莊子のことなり、莊子唐の天寶元年封せられて南華封人と稱せらる、故に南華の稱あり。○此國の文とは、本朝文粹などの類と云ふなるべしと、野槌に見へたり。

〔文格〕　古のはの下に書といふ含語あり。此の國の博士どものこのける物もは、あはれなる事多のりへ係る文脈なり。

和歌てそなはをかしきものなれ。あやしの志づ、山がつらのゐわざも、いひ出づれは、おもゐろく、おそろしき猪のゐゝも、ふすゐの床といへは、やさしくなりぬ。

〔語解〕　とかしきものなれ。面白きものなりとの義と知るべし。○しつ。弘く下品の人間とさせるゐり。○山がつら。木こり。炭焚人と云ふなり。○しわさ。下品のものや、木こり、焚炭人なとの行爲と云ふなり。○いひ出つれば。和歌に詠すれはなり。○ふすゐの床。おろろしき猪しゝも、ふすゐの床と和歌○詞によめは、優美にゐりぬとなり。八雲御抄に、寂蓮法師がいひけ

る歌のやうにいみしきものなし、ゐの志志などいふ、おろろしきものとも、ふすゐのとことひつれは、やさしき也。云々此詞と兼好引けるゐり。

此のごろの歌は、一ふしをかしくいひかなへたりと見ゆるはあれど、ふるき歌どものやうに、いかにぞや。ことばの外にあはれに、けしきおぼゆるはなし

〔語解〕　此ごろの歌。近頃の和歌はとなり、兼好は和歌の四天王とも云はれしほどの人なれは、かくぞ云ひたるなり。○一ふし。一節なり。○ふるき歌ども。古今集以下、三代集などの古き歌と云へり。○あはれにけしき。餘韻言外に漏れて、人として深く感動せしむるものは、一つもあらぬ處ゆるとゐり。

貫之が、糸による物ならなくにといへるは、古今集の中の歌くづとかや、いひつたへたれど、今の世の人のよみぬべきことがらとは見えぞ。其の世の歌には、姿言葉、このたぐひのみおほし。此の歌にかぎりて、かくいひたてられたるもゐりかたし。源氏物語には、ものとはなしにとぞかける。新古今には、のてる松さへ嶺にさびしきといへる歌をぞいふなるは、まことにすこしくだけたるすがたにもや見ゆらん。されど、この歌も、衆議判の時、よろしき沙汰ありて、後にも殊更に感じ仰下されけるよし、家長が日記にはかけり。

〔語解〕 糸によるものならぬくに。古今集第九、羈旅の部に、わづまへまゐりける時に道中にてよめる「糸によるものならなくにわがれぬの心ぼそくもおほゆるかな」と云へる歌の上句とこゝに引けるなり。○古今集。古今集は延喜五年に。紀友則、紀貫之、躬恒、忠峰等の撰みたるものなり。○歌くづ。貫之が歌は古今集中の歌屑ありと云ふことは、飛鳥井榮雅が著なる古今集抄に見へたり。○源氏物語。越前守爲時この物語を作り、こまゐる所は、娘の紫式部にゐゝせたりしと、とぎさきの宮、きこしめし給ひけるよし、宇治物語に見へたり。○新古今にはのこる松さへ。新古今は、元久二年、後鳥羽院の院宣に依て參議右衛門通具、大藏卿有家、右近中將定家、前上總介家隆、右少將雅經等の撰する所のものあり、此新古今集に祝部成仲が歌に、「冬のきて山もあらはに木の葉ふりのこる松さへ嶺にさびしき」とあると云へるなり。○衆議判。こは歌よせなどに判者とたゝず、一座の作者より批判して勝負優劣を決すると云ふなり。○家長。醍醐天皇の御子、西ノ宮の左大臣高明公、十代の孫、從四位ノ下左馬權頭但馬ノ守が事あり。後鳥羽院の御時和歌所の開闔に成て、始めて來りし日、奏し侍りし歌、新古今集に見へたりと句解に見も。

歌の道のみ、いにしへにかはらぬなどいふ事もあれど、いさや。今もよみあへるおなし詞歌枕も、むかしの人のよめるは、さらにおなじものにあらぬ。やすくすなほにして、すがたもきよげに、あはれもふかく見ゆ。梁塵秘抄の郢曲のこ

とばこそ又あはれなる事はおほかめれ。むかしの人は、たゞいかにいひすてたることぐさも、皆いみしくきこゆるにや。

〔語解〕 ○いさや。不知の義なり。○歌枕。壽に云く、名所の歌と集めたると歌枕といへど、こゝにては詞のつゞき枕詞などと云ふべし。○梁塵秘抄の郢曲のことば。梁塵秘抄は、後鳥羽院の作にして、神樂催馬樂の類とえらひ集めたるものあり。○郢曲のことは、郢は楚國の都あり、文選に、有下歌二於郢一中一者上云々とあり、これより歌謠を郢曲と稱せしとぞ。○いみしくきこゆるにや。皆な古人の歌は、立派に聞ゆるが如しとなり。「にや」は俗に「カモシラン」ありと云ふに同じ。

〔文格〕 すなほにしてはあはれも深くへ係る文脈なり。きこゆるにやは、にやあらむといふべき格なると、省筆法ともてこく書けり。

いづくにもあれ、志ばし旅だちたるこそ、めさむるこゝちすれ。其わたり、こゝかしこ見ありき、ゐなかびたるところ、山里おぼは、いとめおれぬ事のみぞおほかる。都へたよりもとめて、文やる、其の事かのこと便宜に忘るなどいひやるこそをかしけれ。さやうの所にてこそ、よろづに心づかひせらるれ。もてる調度まで、よきはよく、能ある人、かたちよき人も、常よりはをかしとこそ見ゆ

第十六段

れ。寺社などに、忍びてこもりたるも、をかし。

〔語解〕 いづくにもあれ。何方とも方角と定めざる義なり。○めさむるこゝちすれ。旅すれは目に見るもの新奇あるにより、眠れる目の覺るが如き心地するとなり、これ心のうつり行き一境に、執着のなきと旅の德にいへるあるべしと、聲抄に見へたり。○其わたりこゝのしこ見ありき。其旅したる邊、及ひ彼處となり。○ねなのびたるところ。田舍めきたる處とあり。○めなれぬ。見馴ぬにて其新奇なると云ふなり。○都へたよりもとめて。都へ行く人ともとめてなり。○便宜に忘るゝ。其時の便りと忘れず心せよと云ふ義あり。○とのしけれ。面白き義と見るべし。○調度まてよきはよく。常によき道具なるもとりわけよく見ゆるとあり。○能ある人。藝能ある人と云ふ。○常よりはとのしところ見ゆれ。都にては能ある人も、形貌のよき人も、左まて目立たぬけれども、田舍にて見れば、格別に見ゆるとなり。○忍びてこもりたるもとのし。假令旅なとせずとも、寺社あるにて人の知らぬ所に、籠り居るも面白しとなり。

〔文格〕 文やるの下に時といふ合語と置きて、下句へ聯續する格と知るべし。こゝと終止格に見なさむは、なの〳〵宜しからざるべし。

神樂てそなまめかしくおもしろけれ。おほかたものゝねには、笛、篳篥、つねにきゝたきは、琵琶、和琴。

第十七段

〔語解〕 なまめかしくおもしろけれ。なまめかしくは優美の義、おもしろは面白き義なり。天照太神天の岩戸とさして籠り給ひし時、天下とこやみになりければ諸神祈りて申されけるに、天鈿目命まささのかづらとのつらとしひのげとたすきとして歌ひ舞ひ庭燎とたきしより神樂といふことはしまれるよし、占語拾遺に見へたり

〔文格〕 和琴の下に、などおもしろしといふ語あるべきと、例の省筆法にて含めたるなり。あゝる所あは下にも多し。應用して知るべし。

山寺にかきこもりて、佛につかうまつるこそ、つれ〴〵もなく、心の濁りも、きよまる心ちすれ。

〔語解〕 かきこもりて。このきは、添詞なり。こもりては、籠り居りての義なり○佛につかうまつる。讀經修行すると云ふなり。○つれ〴〵もなく。徒然ありとも思もることなき義なり。○心の濁りもきよまる云々。精神爽然として仙境の人たる心持するとあり。

人は、おのれをつゞまやかにし、おごりをしりぞけて、財をもたゝ、世をむさぼらざらんぞ、いみじかるべき。むかしより、かしこき人の富るはまれなり。もろこしに許由といひつる人は、さらに身に志たがへるたくはへもなくて、水をも手してささげて飲けるを見て、なりひさごといふものを、人の得させければ、あ

る時、木の枝にかけたりければ、風にふかれてなりけるを、かしがましとてすてつ。又手にむすびてぞ、水ものみける。いかばかり心のうちすゞしかりけん、孫晨は。冬月に衾なくて、藁一束ありけるを、夕にはこれにふし、朝にはをさめけり。もろこしの人は、これをいみじと思へばこそ、志るしとゞめて、世にもつたへけめ。これらの人は、かたりも傳ふべからぞ。

〔語解〕 人は。こゝの人は弘く人間とさせる義にとるべし。○おのれとつゝましやかにし。身と處するに儉約と以てすべき義あり。○ふぐりとしりぞけ。驕奢と退けて近よらざることと念慮とすべき義なり。○世とむさぼらんぞ。世と榮耀榮花に暮さうゐと思ばざらんことゝころあり。○のしてき人。賢人君子と云ふ。○許由といふつる人は云々。高士傳に云く、許由隱二箕山一以レ手捧レ水飲レ之。人遺二一瓢一得以取飲飲訖懸二於樹上一風吹歷々作レ聲。尙以爲レ煩遂去レ之とある と和文譯せるなり。許由は堯帝の時の賢人なるが、堯帝のれに天下と讓らんとせしと聞きて、遁け去りし事は、莊子、史記、韓文などに見へたり。○孫晨は冬月に衾なくて云々。蒙求に孫晨、字は元公、家貧にして席と織りて業とす、詩書に明のなりしのば擢られて京兆功曹と爲るも、冬月被むるものと持たず、藁一束ありけるとあると、國文に譯せるなり。○これらの人はのたり傳ふべのらず。日本にたとひ許由、孫晨の如き人ありとも、狂妄の者と見ゐ

して、語り傳ふることあるまじとゐりと、解句に見えたり。

をりふしのうつりかはるこそ、物ごとにあはれおれ。」ものゝあはれは、秋こそまされと、物ごとにいふめれど、それもさる物にて、今ひときは、心もうきたつものは、春のけしきにこそあめれ。鳥の聲おども、ことのほかに春めきて、のどやかおる日影に、かきねの草もえいづる頃より、やゝ春ふかく、霞わたりて花もやう〳〵けしきだつほどこそあれ。折しも、雨風うちつゞきて、心あわたゞしくちりすぎぬ。青葉におりゆくまで、よろづにたゞ心をのみぞおやます。花たちばおは、名にこそおへれ。おほ梅のにはひにぞ、いにしへの事もたちかへり、とひしう思ひいでらるゝ。山吹のきよげに、藤のおぼつかおささまたる、すべておもひすてがたき事おほし。

〔語解〕 をりふしのうつりのはる。「をりふし」は時節なり、「うつりのはる」は轉變の義なり、こゝの意味は、四時の變遷して行くと云へるゐり。○物ごとゐあはれおれ。物ごとは覆載間にある森羅万象と云ふ義なれども、わけて、花鳥風月とさせるものと心得べし、あはれなれは、面白き心の中に、哀傷もふくめる義と解すべし。○秋ころまされと人ごとにいふめれど。四時の變

遷中、秋は尤も物のなしくあると人々云ふなれどもとなり。白樂天が詩に、大底四時心總苦就中腸斷是秋天とあり。又拾遺に「春はたゞ花のひとへに咲くばかり物のあはれはあきぞまされる」とあり。○これもさる物にて。今の俗語にて、其も左樣にてもあれどもと云ふ義なり。○今ひとときは。いま一層なり。きはは際なり。○うきたつものは感情と動き起すものはとなり。○あめれ。あるめれより約まれる詞にて、ある樣子の義なり。○鳥の聲などもことのはのに春めきて。陳闘南が野花啼鳥一般ノ春と吟せしが如き、有仲集に、「百千鳥朝げの空に遊ぶなりことの外にも春めきにけり」とあるが如き類なり。此れ春の景色の來れる樣といひあらはせるものなり。○のどかなる日影に。のどかは、長閑なり。日影は、日の草木に當りて影の出つる所と云ふ。日蔭の義(日の當らぬ)にはあらず。○もえいづる。萌し出つる義なり。○春ふかく霞わたりて。仲春の景と云ふなり。○心あわたゞしくちりすぎぬ。花の心も忙しげに散り行くとなり。杜子美が詩に、花飛有二底急一とあるに符合す。○青葉になりゆくまで云々。草木の花、散りて青葉のみのこるまでは、たゞ花と思ふ心となやますとなり。○花たちばなは名にこそふへれ。花橘の香に、昔と忍ふは名たのきことなれどの意なり。○いにしへの事もたちのへり。古の事も梅の匂とのぎて思ひ起すとあり。○山吹のきよげに。俊成卿の歌に、「ふりぬれどよし野の川はろこきよみきしの山ふきう つろひにけり」とあり。○藤のおぼつかなきさま。おぼつかなきは、花の色の「おぼろなる」と云ふなり。○すべて。春の景色は總じてとなり。

〔文格〕 とりふしの云々あはれなれ」は、此の四時の變遷と陳べたる一編中の發端なれば、下の大路のさま云々またあはれへ照應して首尾とあせり。また此の春の一段にて云はゞ、すべて思ひすてがたき事多し」は、初めの心もうきたつものはに應じて、小首尾となせるなり。

灌佛のところ、祭の頃、わか葉の梢すゞしげに、茂りゆく程こそ、世のあはれも、人の戀しさもまされと、人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月あやめふく頃、草苗とる頃、水鶏のたゝくおぞ、心ぼそからぬかは。六月の頃、あやしき家に、夕顔のおろく見えて、蚊遣火ふすぶるも、あはれなり。六月ばらへ、又をかし。

〔語解〕 灌佛のころ。四月八日時分の義なり。年中行事歌合註に曰く、灌佛は佛の生れ給ふ時、天龍下りて水と灌ぎ侍るとのや、其例にて百敷にも上達部より始めて佛に水とあびせ奉るなり。蓋し、灌佛は佛生會なり。四月八日に行はる。釋迦の誕生の像に水とそゝぎのくることと云ふ。其より轉じて四月八日と灌佛とは稱すめり。○祭の頃。加茂の祭の頃なり。加茂祭は四月中の酉の日と以て行ふとあり。○人の仰せられしころ。或る人の仰せられしとあり。其人は誰とも明ならず。○あやめ。菖蒲なり。○早苗とる頃。苗と田に植るころなり。○水鶏たゝく。たゝくは鳴く義なり。○心ぼろのらぬのは。「のは」は反語なり。心ぼろくあらぬの、心ぼろきこと

也。○あやしき家。田舎などの賤しき家の義あり。○夕顔のしろく見えて。夕顔の花の白く見えてとなり。○蚊遣火のふすぶるも。古今集戀の歌に「夏なれは宿にふすふる蚊遣火のいつまで我身下もえにせん」とあり。ふすぶるはけぶらす義あり。○六月はらへ。八雲抄に云く、六月祓邪神とはらへ、なだむるゆへに行ふとあり。六月晦日に行ふものなり。

〔文格〕 世のあはれも、人の戀しさも」あやめふく頃、早苗とる頃」は對語法の精格なり。さて又此の一段は、灌佛の頃、まつりの頃」と對語法ともて云ひ起し、終りに至りて、六月ばらへ又とのしと照應ととりて、小首尾となせる殊にめでたし。

七夕まつるとそ、おまめかしけれ。やう〳〵夜寒にあるほど、鴈おきて來ること、萩の下葉色づくほど、わさ田かりはすおど、とりあつめたる事は、秋のみぞおほかる。又野分のあしたとそ、をかしけれ。いひつゞくれば、みな源氏物語、枕草紙おどに、ことふりにたれど、おおじ事、又いまさらにいはじとにもあらぬ。おぼしき事、いはぬは、はらふくるゝわざおれば、筆にまかせつゝ、あぢきなきすさびにて、かひやりすつべき物おれば、人の見るべきにもあらぬ。

〔語解〕 七夕まつる。公事根源に云く、七月七日の夜、ふこおはる。天平勝寶七年より初まれり乞巧奠とも七夕祭とも云ふなり。延喜式に、七月七日、織女祭の事、委しくあり、就て見るべし。

○おまめかし。優美の義あり。○やう〳〵夜寒にあるほど。陰暦八月比と云ふあり。○萩の下葉色づくほど。萩の葉の秋霜とうけて、紅葉すると云ふ。季秋の比なり。○わさ田のりはす。早稲田の水とはして稲と刈ると云ふ。○野分のあしたこそとのしけれ。野分は野草と吹きわくる大風なり。○ことふりにたれど。「に」は助辭にて、ことふりたれと云ふ義なり。○おぼしき事。心に思ひ居る事なり。○あぢきなきすさび。あぢきなきとは興味のなき義、すさびは戯れ業にの義なり。○かひやりすつべき物。掻き破ぶり捨つべきものとの義なり。

〔文格〕 夏季の一段なる、神祭佛事六月祓の事おぞと受け來りて、七夕まつるころと言ひ起したる筆勢、なの〳〵にめたくころ覺ゆれ。また此の段のとりあつめたる事は、秋のみぞ多おるといへる詞は、春季の一段の初なる、物のあはれは秋ころまされの詞に照應せり。

さて冬がれのけしきこそ、秋にはをさ〳〵おとるまじけれ。汀の草に、紅葉のちりとゞまりて、霜いとしろうおける朝、やり水より烟のたつこそ、をかしけれ。年の暮れはてゝ、人でとにいそぎあへる頃ぞ、又おくあはれおる。すさまじき物にして、見る人もおき月の寒けくすめる、二十日あまりの空こそ、心ぼそき物おれ。御佛名荷前の使たつおどぞ、あはれにやんでとおき。公事ども出げく、春のいそぎにとりかさねて、もよほしおこおはるゝさまぞ、いみじきや。追儺よ

り四方拜につゞくことそ、おもしろけれ。つごもりの夜、いたうくらきに松どもともして、夜半すぐるまで、人の門たたきはしりありきて、何事にかあらん。とゞ〳〵さくの〻しりて、あしを空にまどふが、曉がたよりさすがに音おくありぬるこそ、年のおごりも、こゝろぼそけれ。おき人のくる夜とて、魂まつるわざは、此のごろ都にはおきを、あづまのかたには、猶することにてありしこそ、哀れおりしか。

かくて、明行く空のけしき、昨日にかはりたりとは見えねど、ひきかへめづらしきこゝちぞする。大路のさま、松たてわたして、はなやかにうれしげなるこそ、またあはれなれ。

〔語解〕 さて。さては然しての義に通ふべし。○冬のれのけしき。冬になれは草木の葉みな枯れ落つるものなる故に、冬のれとところは云ふなれ。○とさ〳〵。大方の義なり。○汀の草池などの水際の草なり○霜いとしろうおける朝。霜のふりていとも白く見ゆる朝なり。○やり水。庭の池などに、細き流れと引きてながす水と云ふなり。○人ごとにいろぎあへるころぞ。十二月になりて、人の急きて年中のことと處理すると云ふなり。○すさまじき物にして。今の俗語

にて「イヤナモノニテ」あるの義なり。○御佛名　こは三世の諸佛の名號を唱へて、六根の罪を滅す心にして、十二月十九日より廿一日まで三ケ日間行はるゝ佛事なりと、句解に見えたり。○荷前の使。こは十二月吉日をえらび、十陵八墓に幣帛を奉らせ給ふ御使をなり。其詳細は江次第を見て知るべし。○公事ぞもしけく。禁中に行はるゝまつり事、多忙なりと也。○追儺。十二月晦日年中の惡疫を追ひ拂ふために行ふ式なり。○四方拜。正月元日天皇陛下、四方の山の陵をゝがみ給ひて、年災、寶祚をいのり給へる御式を云ふなり。○つごもりの夜。十二月晦日を云ふ。○いたうくらきに。夜甚暗きになり。○こと〳〵しくの〻しりて。非常に騷きての義に解すべし。「の〻しり」は罵詈の義にあらず。○足を空にまどふが。人の急はしく忙しく往來するさまを形容せる詞なり。○おき人のくる夜とて魂まつるわざ。十二月晦日は亡き人の來る夜とて、其ゝ靈魂を祭る古例あると云ふなり。○あづまのかた。東國をさせるなり。○大路のさま松たてわたして。都の大路に門松を立てわたしてとなり。

〔文格〕 秋季の一段なる、野分のあしたころとのしけれの詞を受け來りて、さて冬枯のけしきころ云々と云ひ起し、汀の草云々より霜または寒月にうつし、御佛名荷前の使追儺四方拜魂まつるわざと云ひて、上の三季に照應をとれるいと〳〵めでたし。のくて以下は發端に應じて結尾をなせるなり。

あにがしとかやいひし世すて人の、此世のほだしもたらぬ身に、たゞ空の名殘のみぞをしきと、いひしこそ、まことに、さも覺えぬべけれ。

〔語解〕 なにがしとこのや　某の字と書く。何とやらんといふに同じ。○此世のほだしもたぬ。此世に妻子ともたぬとなり。此世は、現世と云ふ。ほだしは、羈絆の字とわて、足半まどひのものと意味するなり。故に眷屬のことに解す。○空の名殘のみぞとしき。年月の移り行く空と名殘りとしと思ふとなり。○さも覺えぬべけれ。兼好も同感にて然りと思ふとなり。

よろづの事は、月見ることそ、あぐさむるものあれ。或人の月ばかり、おもしろきものはあらじといひしに、又ひとり、露こそあはれなれと、あらそひしこそ、をかしけれ。折にふれば、何かはあはれならざらん。月花は更なり。風のみこそ、人に心はつくめれ。岩にくだけて、清く流るゝ水のけしきこそ、時をも忘れぬべきたけれ。沅湘、日夜に東に流れ去る。愁人のためにとどまることを、志ばらくもせゞと、いへる詩を見侍りしこそ、あはなれりしか。

〔語解〕 よろづの事は云々。此の一段は、四季のことを云ひたる餘論なり。よろづの憂患も、また徒然なるも、月と見れば其心なぐなめ愈ゆるとなり○月ばかり。月はどの義なり○露ころあはれ。爰のあはれは、面白き義にとるべし○とかしけれ。風流なりとの義なり○月花は更なり。更に言ふまでもなきの意○風のみころ人に心はつくめれ。のみは、俗に「バカリ」云ふなり。風ばなりは、殊に人として、時節を感知せしむるとなり○時をもわるず。論語に、夫子の川のほとりにいましして、逝者如斯夫不舍晝夜と、いひたるに同然なり。○沅湘。沅水、湘水とて、共にもろこしの、水の名稱なり○あはれなりしか。哀傷の至りなりとぞ云ふ義なる。

〔文格〕 よろづの事は云々なぐさむる」折にふれば、云々あはれならざらむ」風ころ、云々つくめれ」水のけしきころ、云々めでたけれ」とゞまること、云々せずあるぞは、間接法聯續格なり。東に流れ去る」月花は更なり等は、係結法第一格、何のはあはれならざらむは、係結法第二格、月見るころ、云々ものあれ」露ころあはれあれ」風のみころ云々つくめれ」あるぞは、係結法第三格なり。

嵇康も、山澤にあそびて魚鳥を見れば、心たのしぶといへり。人とはく、水草きよき所に、さまよひありきたるばかり、てゝろなぐさむ事はあらじ。

〔語解〕 嵇康。竹林七賢人の一なり。○山澤にあそびて云々。文選四十三嵇康與山濤絶交書の書に云く、遊山澤觀魚鳥心甚樂之行作吏此事便廢安能捨其所樂而從其所惧哉。思ふに此意と引來れるなり。○人とはく水草きよき。人とはく、水草きよき」は間接法聯續格なり。人迹絶えて、地境の清潔なる處と云ふなり。○さまよひ。逍遙の義なり。

〔文格〕 嵇康も云々いへり」は間接法聯續格なり。人とはく、水草きよき」は疊語法の粗格なり。

何事も、ふるき世のみぞ、したはしき。いまやうは、無下にいやしくてそなりゆくめれ。かの木の道のたくみの、つくれるうつくしきうつはものは、古代のすがたてそ、をかしと見ゆれ。文の詞などぞ、むかしの反古どもは、いみしき。たゞいふ詞も、くちをしうてそ、なりもてゆくなれ。いにしへは、車もたげよ、火かけよとてそいひしを、今やうの人は、もてあげよ、かきあげよといふ。主殿寮の人數たてといふべきを、たちあかしをろくせよといひ、最勝講の御聽聞所なるをば、御かうのろとてそいふを、かうろといふ。くちをしとぞ、ふるき人は、仰せられし。

〔語解〕 何事もふるき世のみぞしたはしき。よろづの事物は、古風ころ慕はしく思はるゝとなり○いまやうは無下にいやしく云々。當世風は至りて下品になり行くとの義なり。○木の道のたくみ。大工番匠の類と云ふ○うつはもの。器物の事あり○古代のすがた。古風なると云ふなり○文の詞なども。文章及ひ日用の消息文の言葉と云ふ○いみじき。善美なるとほめたる詞なり○人數だて。節會、御神樂などに、主上別殿に行幸せさせ給ふ時、殿上人脂燭を執りて供奉し、主殿寮二人立明をとりて供奉せり、是と人數だてといふなりと、文段抄に見えたり。○御かうのろ。御講の廬と云ふなり。

〔文格〕 車もたげよ」火かけよ」「もてあげよ」「かきあげよ」などの類は、對語法の精格なり。

おとろへたる末の世とはいへど、なほ九重のかみさびたるありさまてそ、世づかぬめでたきものなれ。

〔語解〕 おとろへたる末の世。なほ澆季の世と云ふが如し。○九重。内裏の事なり。天子の御所と、九門内と云故なり。○かみさびたるありさま。貴く古風なると云ふ義なり。○世づかず。世間とはなれたる義なり。

〔文格〕 末の世とは云へど。云々めでたきものなれは、間接法聯續格なり。

露臺、朝餉、何殿、何門などは、いみしとも聞ゆべし。あやしの所にもありぬべき、小蔀、小板敷、高遣戸なども、めでたくてそきこゆれ。陣に夜の設けせよといふてそ、いみじけれ。夜御殿のをば、かいともしとうよなどいふ、又めでたし。上卿の陣にて、事おとなへるさまは更なり。諸司の下人どもの、したりがほになれたるもをかし。さばかりさむき夜もすがら、とゝかしてに、ねぶりゐたるてそをかしけれ。内侍所の御鈴の音は、めでたく優なるものなりとぞ、德大寺太政大臣は、仰せられける。

〔語解〕 露臺、朝餉。みな禁中の御殿の名なり。露臺は屋根と覆はす露はせる故にこの名ありと

ぞ○あやしの所。賤しき家にもの義あり○陣。公卿の座所あり。清涼殿の前なる、紫宸殿の西に在りたりとぞ○夜の設け云々。灯などと用意せよと云ふあり○夜ノ御殿のとば。夜のおとゞの灯とばと云ふと省筆法にかけるなり○のいともしとうよ。のいともしは、掻燈なり。とうよは、疾くせよの義なり○さばのり。さる斗りなり○内侍所。神鏡と安置せさせ給ふ所なり○徳大寺の太政大臣。従一位實基公と云ふあり。

〔文格〕優なるものなりとぞは、仰せられけるへ係る文脈にて、すなはち間接法聯續格なり。

齋宮の野宮に、おはしますありさまこそ、やさしく面白きことのかぎりとは覺えしか。經佛などいみて、なかで、染紙などいふなるものをかし。すべて、神の社こそ、すてがたく、なまめかしき物あれや。ものふりたる、森のけしきもたゞならぬに、玉がきしわたして、さか木にゆふかけたるなど、いみじからぬかは。ことにをかしきは、伊勢、賀茂、春日、平野、住吉、三輪、貴船、吉田、大原野、松尾、梅宮。

〔語解〕齋宮。伊勢太神宮に仕へまつるべき、内親王の御事と云ふなり○野ノ宮。こは嵯峨のあり す川の邊にあり。齋宮のいまだ伊勢太神宮へ仕へまつらざる前に、此所にて齋沐し給ふ所なり○經佛などいみてあるのゞ染紙など云々。こは齋宮の忌詞にして、佛とば中子といひ、經とは染紙などゝ云ふは、面白きことありとなり○神の社ころ云々。總じて神の御社ころ、捨てがたく、

尊敬すべきものにして、且優美あるはあらざらめとなり○玉がき。玉垣なり○さか木にもふかけたるなど。ゆふは、白木綿のことなり。榊に白木綿のけたると云ふなり。

〔文格〕經佛などいみては、いふなるもへ係る文脈あり。いみじからぬのは、イミジカラムと意の裏へ返る反語法なり。殊にをかしきは、梅宮の下にナリの含語ありて、これへ係りて係結となす。

飛鳥川の淵瀬、つねならぬ世にしあれば、時うつり、事さり、たのしみかなびゆきかひて、はなやかなりしあたりも、人すまぬのらとなり、かはらぬすみかは、人あらたまりぬ。桃李ものいはねば、たれとともにか、むかしをかたらん。まして見ぬいにしへの、やんごとなかりけん跡のみぞ、いとはかなき。

〔語解〕飛鳥川の淵瀬つねならぬ。飛鳥川は大和高市郡にありて名所の川なり。爰にては、世間の早く變じ、事のこのはりて其常なきと、其川の水瀬の常なきに喩へたり。故に飛鳥川の淵瀬の如く云々の義なり○たのしみのなしびもきこのひ。苦樂の往還すると云ふあり○のら。野原の義なり。古歌などにもある詞にて、らは助辭なり○桃李ものいはねば云々。史記李廣が傳の贊に、桃李不ㇾ言下自成ㇾ蹊とありて、口ときこのねば昔と語るによしなしとなり○まして。漢字の況の字に當る。一層言葉と強く云ふ時に用ふるなり。

〔文格〕 時うつり、事さり」たのしみ、このなしびは對語法の精格、はなやかなりしあたりも云々、このはらぬすみかは云々」は、疊句法の精格あり。ものいはねばはこのたらむへ係る間接法聯續格なり。

京極殿、法成寺など見るこそ、志とゞまり、事變じにけるさまは、あはれあれ。御堂殿の作りみがゝせ給ひて、庄園おほくよせられ、我御ぞうのみ、御門の御うしろみ、世のかためにて、行く末までとおぼしおきし時、いかならん世にも、かばかりあせはてんとは、おぼしてんや。大門金堂など、ちかくまでありしかど、正和の比、南門は燒けぬ。金堂は、其後たふれふしたるまゝにて、とりたつるわざもなし。無量壽院ばかりぞ、そのかたとてのこりたる。丈六の佛九躰、いとたふとくておらびおはします。行成大納言の額、兼行がかける扉、あざやかに見ゆるぞ、あはれある。法花堂なども、いまだ侍るめり。これも又いつまでかあらん。かばかりの、名殘だにあき所々は、おのづから、石ぞゑばかりのこるもあれど、さだかにしれる人もなし。

〔語解〕 京格殿。拾芥抄京極殿。土御門南、京極西一南地二町、其南一町被入二道長家一或大入道殿家上一東一門院是也、後一條、後朱雀、後冷泉三代帝於此、所二誕一生一。法成寺。五條河原にあり。榮花物語によれば、後一條院行幸し給ひしことあり。京極殿や、法成寺などと見れば、懷舊の情に堪へず、殊に心と留めらるゝとなり。御堂殿。道長と御堂關白といひし故に、御堂殿と云ふ。庄園おほく。領地と多く寺に寄附せられしと云ふなり。字彙に云く、田舍也俗作レ庄。又三体詩注曰唐人謂二別一業一爲レ莊。我御ぞうのみ。我が宗統の者ばかりと云ふ義あり。御門の御うしろみ云々。攝政關白大臣などの大政に預る者と云ふなり。かばかりあり。かくばかりあり。あせはてん。荒廢しはてんの義なり。丈六の佛九躰。丈六は一丈六尺のことなり。佛九躰は佛像九箇の義あり。成行大納言。謙德公、伊尹の孫、義孝の子なり。世々能書の聞えあり。世に道風、佐理、行成と三跡と云ふ。法花堂。法華三味と行ふ所あり。

〔文格〕 法成寺あゞ見るこそは、あはれあれへ係り、よせられは行く末へ係り、ありしのゞは燒けぬへ係り、無量壽院ばかりぞは殘りたるへ係り、名殘なき所々はのこれるへ係る文脈なり。御門の御うし見、世のこのためは、對語法の粗格なり。されば、よろづに見ざらん世までを、おもひおきてんこそ、はかなかるべけれ。

〔語解〕 されば。さこのあればの約語にて、前の義論をうけ、後をひきおこす詞あり。○よろづに見ざらん世まで。寺院家居等に限らず、總体の事物、すべておのれがあき後の末世までの義なり。○此段は上の段に神社の事といへるに就て、又佛閣のさだにうつり、何事も世の無常なる事と人

に誡めたる結論なる由句解に見えたり。

〔文格〕されば。ははこのなこのるべけれへ係る文脈なり。さて此のはかなこのるべけれは、おきてんころとどめたるにて、係結法の第三格なり。

風もふきあへず、うつろふ人の心の花に、なれにし年月を思へば、あはれと聞きしことのはごとに、わすれぬものから、我世の外になりゆくならひこそ、なき人のわかれよりもまさりて、かなしきものなれ。されば、しろき糸のそまんことをかなしび、路のちまたのわかれん事をおげく人も有けんかし。堀川院の百首の歌の中に、むかし見しいもが垣ねはあれにけり。つばおまじりのすみれのみして」さびしきけしき、さること侍りけん。

〔語解〕風も吹きあへず云々。古今集の櫻花とく散りぬとも花はえず人の心ぞ風も吹きあへずとある歌より來れり。風も吹き通らぬのに移り變り易き人の心の花に、なれ親しみ來りし年月と思ふにとなり。○あはれと聞し言の葉ごとに。人の心のこのはちぬはどにいひのはせし言葉の。あはれなりしは忘れざるながらもとのこゝろなりと、季吟翁は云へり○されば云々。淮南子に云く、楊子見二逵路一而哭レ之爲下其ノ可二以一南一可中以北上墨子見二絲一而泣レ之爲下其可二以黄一可中以黑上高誘が注に曰く、觸二其本同而末異一○堀川院の百首の歌の中に。堀川院の百首は二種あ

り。其一は權大納言藤原公實公の勸進にこのゝれり。こゝに引く、昔し見しの歌は、公實の作なり。

〔文格〕わすれぬものから、我身の外にあり行くならひころおどは、間接法聯續格にて、このおしきものなれへ係る文脈なり。されば。も同格にてありけんこのしへ係れり。

御國ゆづりの節會おこなはれて、劔、璽、内侍所わたし奉らるるほどこそ、かぎりなう心ぼそけれ。新院のおりゐさせ給ひての春、よませたまひけるとかや。

「殿もりのとものみやつこよそにして、はらはぬ庭に花ぞちりしく」今の世のことしげきにまぎれて、院にはまゐる人もなきぞ、さひしげなる。かゝるをりにぞ、人の心もあらはれぬべき。

〔語解〕御國ゆづりの節會。天子の御位を皇太子に讓り給ふ時の節會と云ふなり○内侍所。内侍所に神鏡を安置し奉つるにより、内侍所とは神鏡の在所なり○わたし奉らるゝ。先帝より今帝に御渡し奉るとなり。○新院。兼好この文をかきたりしは、後醍醐天皇の時なれば、花園天皇とさして新院とは申し奉れるなり○殿もり。主殿寮と云ふ○とものみやつこ。主殿寮の屬僚の者なり○このゝるとりにぞ。人の伺ひ奉らざるときと云ふなり。

諒闇の年はかり、あはれなる事はあらじ。倚廬の御所のさまなど、板敷をさげ、あしの御簾をかけて、布のもかうあらく〜しく、御調度ども、おろそかに、皆人の

さうぞく、太刀平緒まで、ことやうなるぞゆゝしき。

〔語解〕 諒闇。天皇陛下の御喪に籠りおはしますことと云ふ○倚廬の御所云々。諒闇の時の御所の義なり。禮記の注に曰く、廬在二中門外東壁一倚レ木爲故云二倚廬一。○布のもううあら〳〵しく。布のもうは、布にて拵へ、もううの紋と付ると布の木瓜といふ。あら〳〵は粗なる義なり。又もううと帽額といふ説もあり○平緒。整束の帶と前にて結びたれたる緒、平なる故に云ふ。また太刀の前に下げる緒といふ説もあり○ことやうなる。凶事凶禮なれば常と異りて、黑染ゐるといふなり。

さづかに思へば、よろづすぎにしかたの戀しさのみぞ、せんかたなき。人しづまりて後、ゐがき夜のすさびに、何とゐき具足とりしたゝめ、殘しおかれしと思ふ、反故ゐどやりすつる中に、ゐき人の手ゐらひ、畫かきすさびたる、見出たるこそ、たゞそのをりのこゝちすれ。此頃ある人の文だに、久しくゐりて、いかゐるをり、いつの年ゐりけんと思ふは、哀ゐるぞかし。手ゐれし具足ゐども、心もゐくて、かはらぬ久しきいとかゐし。

〔語解〕 人しづまりて。人の寢しづまりて後と云ふなり○ゐがき夜のすさびに。夜の長くして、ねられぬまゝにの義なり○何となき具足云々。何と定りもせぬよろづの道具と取調ぶるなり○

やりすつる。破り捨る義なり○手なれし具足。年久しく持ち馴れたる諸道具と云ふなり○心もゐくて。器具は無心の物ゐればかくは云ふなり○いとゐなし。いとも哀に思ふとなり。

〔文格〕 さづかに思へば。は、せんのたなきへ係り、すさびにはとり出たゝめへ係る文脈ゐり。また畫ゐきすさびたるの下になどの含語あり。

人のゐきあとばかり、かゐしきはゐし。中陰のほど、山里ゐどに、うつろひて、便あしくせばき所に、あまたあひゐて、後のわざどもいとゐみあへる、心あわたゝし。日數のはやく過るほどぞ、物にも似ぬ。はての日は、いとゐさけゐう、たがひにいふ事もゐく、我かしこげに、物ひきしたゝめ、ちり〳〵に、行あかれぬ。もとのすみかにかへりてぞ、更にかなしき事は、多かるべき。

〔語解〕 人のゐきあと云々。人の死していまだ日數のたゝぬ時ほど、何となく物がなしき事はあらじとゐり○中陰のほど。人の死去したりしきはより四十九日間の義ゐり○山里などにうつろひて。亡者の追善の爲に、山寺ゐどに行きて、籠り住むことと云ふゐり○便あしくせばき所にあまたあひゐて。便利あしく、狹き所に家族親類ども、多く寄り合ひて居ると云ふなり○あとのわざども。七日〳〵の法事どもと執行すると云ふ○あわたゝし。心中多忙の義なり○日數の早く云々。四十九日の經過すれば常にも似ざる舉止と云ふ○はての日。四十九日と云ふ○我ゐし

こげに。我劣らじとの義なり○物ひきしたゝめ。諸道具携帯品などと取り方付くると云ふ○行あのれぬ。行別れて自家へ歸るなり○もとのすみのにのへりてぞ。山里の寺より一族ども立歸りて、己が住家に戻りたる時ぞの義なり。

〔文格〕 うつろひてはあひねてへ係り、はての日は物ひきたゝめへ係る文脈あり。

をかゝの事は、あなかしこ、跡のため、いむなる事ぞなどいへるこそ、かばかりのなかに何かはと、人の心は猶うたておぼゆれ。

〔語解〕 をかゝの事。云々の事すなはち凶事中の事柄はとなり○あなかしこ。あらかろろしと云ふ義なり○あのばかりのなかに。あくばかり哀傷の中にとなり○何かはと。何事のは忌むべき事あるべきと云ふ義なり○うたて。こは俗にうたてしき義なり。古今集戀の部の歌に「心こころうたてにくけれ染ぎらはうつろふこともとしのらましや」とあり。

〔文格〕 云々の事は忌むなるへ係り、いへるころはうたておぼゆれへ係る文脈なり。何のはの下にあらむの含語あり。

年月へても、露わするゝにはあらねど、去る者は日々に疎しといへることなれば、さはいへど、其きはばかりは覺えぬにや。よしなしごといひてうちもわらひぬ。

〔語解〕 露わするゝにはあらねど。露はども死者と忘るゝにはあらざれどもの義と見るべし○去る者は日々に疎し。文選廿九の古詩に云く、去者日已疎。來者日已親。出二郭門一直視。但見二丘與一墳。云々。其註に云く。去者謂レ死也、來者謂レ生也。不レ見二容貌一故疎也、歎レ愛終レ日故親也○さはいへど。年月へてもわすれねどの詞と打のへしたる言葉なり○其きはは。其死にし際の義なり。

からは、けうとき、山の中にをさめて、さるべき日ばかり、まうでつゝ見れば、程なく卒都婆も苔むし、木葉ふり埋て、夕の嵐、夜の月のみぞ、ことゞふよすがなりける。

〔語解〕 からは。死骸と云ふ○けうとき。氣疎の字と書く、人氣疎く物さびしき義なり○さるべき日ばかり。月忌年忌などの日ばかりなり○よすがなり。よすがは、便の義なり、卽ち嵐や月ならでは誰も訪ひ尋ぬる人なきとの義なり。

思ひ出て、忍ぶ人あらん程てそあらめ。そも又はどなくうせて、聞つたふるばかりのすゑ〳〵は、哀とやはおもふ。さるはあとゝふわざもたえぬれば、いづれの人と、名をだにしらぞ。年々の春の草のみぞ、心あらん人はあはれと見るべきを、はては嵐にむせびし松も、千とせをまたで、薪にくだかれ、古墳はすかれて

田となりぬ。其のかたゞになくなりぬるぞ、かなしき。

〔語解〕 思ひ出て忍ふ人。なき人と思ひ出して、戀ひ忍ぶ人なり○ろも。ろれもの略語なり○聞つたふるばゝりのすゑ〳〵は。あき人の名を聞傳ふるばゝりで、實際其人と知らざる子孫ゝとなり○哀とやはふもふ。哀れとも、悲しとも思はざらんとなり○さるは。左樣であるわけはとの意なり○いづれの人と名とだにしら京。白樂天の詩に、古墳何代人化爲二路傍土一。不レ知二姓與レ名。年々春草生。とあるの意ととりたるものなり○嵐にむせびし松も千とせをまたて云々。文選の古詩に云く、古墓犂爲レ田。松柏摧爲レ薪とあるとやはらげてゝのけるなり。

雪のおもしろうふりたりし朝、人のがり、いふべき事ありて、文をやるとて、雪のこと何ともいはざりし返事に、此の雪いかゞ見ると、一筆のたまはせぬほどの、ひが〳〵しからん人の仰らるゝ事、聞いるべきかは。返々くちをしき御心なりと、いひたりしこそ、をかしかりしか。いまは、なき人なれば、かばかりのことも、わすれがたし。

〔語解〕 人のがり。人の許へとの義なり○ひが〳〵しからん。ひが〳〵は、僻の字にて、一事に心のひがみたる義あり。若紫に少しかくまりたる山住もせでさる海つらに出で給ひたるひが〳〵敷やうなれとあり。矢張り僻の字の義なり○とゝのし。面白の義にて、ほめたる詞なり○ゝの

ばゝりの事。この位の事にてもあり。

〔文格〕 雪の云々降りたりし朝、人のがり。等は文とやるとてへ係る文脈なり。また返事。にはいひたりしころへ係るなり。文中に、書簡文及び談話語など挾める所は、皆此の格なり。

九月廿日の比、ある人にさそはれ奉りて、明くるまで月見ありくこと、侍りしに、おほし出づる所ありて、あないさせて入り給ひぬ。あれたる庭の露しげきに、わざとならぬ、にほひしめやかにうちかをりて、忍びたるけはひ、いと物あはれなり。よき程にて出で給ひぬれど、猶ことざまの優におぼえて、ものゝかくれより、しばし見るたるに、妻戸を今すこしおしあけて、月みるけしきなり。やがてかけてもらましかば、くちをしからまし。跡まで見る人ありとは、いかでかしらん。かやうの事は、ただ朝夕の心づかひによるべし。其人、ほどなくうせにけりと、きゝ侍りし。

〔語解〕 明るまで。夜のあくるまでとなり○おほし出る所ありて。兼好と月見に誘ひたる人、みちの程にて、ある家の立寄るべき所と思ひ出してとなり○あないさせ。案内させての義なり○わざとならぬにほひ。客ありとて俄ゝに香なゞ焚きたる匂にてゐく、平生空燒のにほひすると云ふ○しめやかに。俗に云つほりといへる義に通ぶべし○妻戸。凡てものゝ端とつまといふ、

茲のつまどとは殿の側にある戸と云ふなり○このけこもらましのば。主人の客と送り出て、すぐに内へこのけ入り籠らばと云ふ義なり○はどゝく程もあらずの義なり。

今の内裏つくり出されて、有職の人々に、みせられけるに、いづくも難なしとて、すでに遷幸の日ちかくなりけるに、玄輝門院、御覽じて、閑院のくしがたの穴は、まろくふちもなくてぞありしと仰せられける。いみじかりけり。是はえうのいりて、木にてふちをおたりければ、あやまりにて、なほされにけり。

〔語解〕今の内裏。兼好時代の内裏なり。然れは冷泉萬里小路の内裏と云ふならんか。○有職の人々。上に述べたり。○いづくも難なし。何方も故實に違ひたる所あらざれば、非難すべき所なしとの義なり。○玄輝門院。伏見院の母后、洞山山階ノ左大臣實雅公の女なり○閑院殿。閑院は、二條の南、西の洞院の西一町、冬嗣大臣の家、金岡疊ニ水石一公季公傳ニ領之一と拾芥抄に見たり。○くしがたの穴。俗に火灯口といひて、書院などに附る也。地下の家にもする也、昔は丸くして緣もやうも無このりしとこのや。○是はえうのいりて。五葉の松、千葉の花なるいへる意なるべしと野槌に見えたり。蓋し、えうは葉の字と書くなるべし。故に其形と松の葉の如くにすることゝ心得べし。

甲香は、ほら貝のやうなるが、ちひさくて、口のほどのほそながにして、いでたる

貝のふたなり。武藏ノ國金澤と云ふ浦にありしを、所の者は、へなたりと申侍るとぞいひし。

〔語解〕甲香。異物志に云く、甲香（俗に音合と云ふ）は螺の屬なり、衆香を合併して之を燒けば、皆ゐ芳をまさしむ、一つ燒くときは則ち臭しと○へなたり。或本には「ばへ」とあり「へな」と「ばへ」とは大に異れりと季吟翁は云へり。

手のわろき人の、はゞからぬ、文かきちらすはよし。見ぐるしとて、人にかゝするはうるさし。

〔語解〕手のわろき人。手跡のあしき人なり。○はゞからず。人に手跡のあしゝと云はるゝをも思はぬ程にとの義なり。○見ぐるしとて。わが手跡のあしく見苦しくあるとてなり。

久しくおとづれぬ頃、いかばかりうらむらんと、我がおこたり思ひしられて、言葉おきてゝちするは、女のかたより、仕丁やある。ひとりゐぬ いひおこせたるこそ、有りがたくうれしけれ。さる心ざましたる人ぞよきと、人の申し侍りし。さもあるべき事なり。

〔語解〕久しくおとづれぬ頃。兼て親しく交れる人へ久しく不音信にてある比となり。○仕丁やある。仕丁は下部のことなり○いひおこせたる。其旨と云ひ來りたるの義なり○さる心ざま

したる人ぞよき。左様ゐ心得ともてる人こそよけれとなり。

朝夕へだてなくなれたる人の、ともある時、我に心おきひきつくろへるさまに見ゆるこそ、今更かくやはなどいふ人もありぬべけれど、猶げに〳〵しく、よき人かなとぞおぼゆる。うとき人の、うちとけたる事ゐどいひたる、又よしと思ひつきぬべし。

〔語解〕 朝夕へだてゐくなれたる人。朝夕胸襟と開きて交り馴れたる人なり○ともある時。何事がある時なり○我に心おきひきつくろへるさまに見ゆるころ。我に人の隔心のことありて、遠慮の躰にて禮容するさまに見ゆる時ゐり○猶げに〳〵しく。兼好も同感にて、實にもつともと思ふとなり○うとき人。平生疎して親しゐらぬ人なり。

〔文格〕 今更ゐくやはの下に、つくろふべきの含語ゐり。見ゆるころは、ゐりぬべけれにて結ぶべきと、させずして下へ云ひ續けたり。是と轉結格と云ふ。編中此の格多し。

名利につかはれて、しづかなるいとまおく、一生を苦むるこそ、おろかなれ。

〔文格〕 つのはれて。いとまなく等よりは、苦むるへ係る文脈なり。

財おほければ、身を守るにまどし。害をかひ、わづらひをまねくなかだちなり。

身の後には、金をして北斗をさゝふとも、人のためにぞ、わづらはるべき。おろかなる人の目をよろこばしむるたのしび、またあぢきゐし。大ゐる車、肥えたる馬、金玉のかざりも、こゝろあらん人は、うたておろかなりとぞ見るべき。金は山にすて、玉は淵になぐべし。利にまどふは、すぐれておろかなる人なり。

〔語解〕 身と守るにまどし。財おほければ、寶にはとめども、我身と守るには、貧しとなり。此れ財のために其身の災とうくること多ければなり○害とのひ。金錢にて貨物と買求むるが如く、財多ければ身に煩はしき災害とまねぐとなり○金として北斗とさゝふとも。金錢と多く貯蓄すること北斗の星と支持するほどに至るともなり○人のためにぞわづらはるべき。人のためには煩と引きおこすの種ゐりとの義ゐり○こゝろあらん人はうたておろゐのなりとぞ。道理と辨へ是非と知るの心ある人には、愚なる事ゐりと見もると也。

うづもれぬ名を、おがき世に殘さんこそ、あらまほしかるべけれ。位たかくやんごとなきをしも、すぐれたる人とやはいふべき。愚につたなき人も、家に生れ時にあへば、高位にのぼり、おごりをきはむるもあり。いみじかりし賢人、聖人みづからいやしき位にをり、時にあはぜしてやみぬる、またおほし。ひとへにたかきつかさ位をのぞむも、次におろかゐり。

〔語解〕 うづもれぬ名、肉體は死して地に埋らるとも、博學廣才の芳名は、後世に殘れる故にの

くは云ふなり○いみじのりし賢人聖人みづのらいやしき位にをり。孔子、孟子、顔回の如き聖賢の人にても、卑き位に在りたるにあらずやとの義あり○ひとへにたのきつのさ位とのぞむも云々。六管官職位記の高きを望むも、財利と妄崇するの愚に次べき愚なりとの義なり。

智惠と心とてそ、世にすぐれたる譽も、殘さまほしきを、つら〳〵おもへば、はまれを愛するは、人の聞を喜ぶなり。はむる人、そしる人、ともに世にとゞまらぜ。つたへきかん人、亦々すみやかに去るべし。誰をかはぢ、誰にかしられん事をねがはん。譽はまた毀の本なり。身の後の名、殘りて更に益なし。これを願ふも次におろかなり。

〔語解〕殘さまほしきと。智慮の世に勝れたる名譽は、殘したきことなる物ととなり○つら〳〵おもへば。是非得失と陳列してよく熟思すればなり○人の聞と喜ぶなり。名聲の人の聞のんことと喜ぶものなりとの義○はむる人、そしる人ともに云々。人とはむる人も、又人を毀る人も、共に其名、世に留り殘らねば、これと願ふは、徒事に過ぎざるなりとの義なり。

たゞし、まひて智を求め、賢をねがふ人のためにいはゞ、智惠出でては僞あり。才能は煩惱の增長せるなり。

〔語解〕たゞし。今の俗語にて「ソウデアルケレドモ」に同じ○智惠出ては僞あり。一向嬰兒のごとき無智の者には僞なけれども、少しく理不理を知る智惠出づるに至れは、やがて僞言を吐くが世の習慣なれば、このくは云へるなり○才能。才智藝能なり○煩惱の增長せるなり。才能と得るには、元苦惱と以てすればこのくは云へるなり。

つたへきき、學びしるは、まことの智にあらぜ。いかなるをか智といふべき。可不可は一條なり。いかなるをか、善といふ。眞の人は、智もなく、德もなく、功もなく、名もなし。誰か知り、誰か傳へん。これ德をかくし、愚をまもるにはあらぜ。もとより賢愚得失のさかひに、をらざればなり。

まよひの心をもちて、名利の要をもとむるに、かくのごとし。萬事はみな非なり。いふに足らぜ。願ふにたらぜ。

〔語解〕可不可は一條なり。可とは善美の義なり、不可は醜惡の義なり、一條は一ヶ條と云ふに同じ、是れ世には善惡、正邪、是非の區別あるも、其理と終局にまでおし窮むれば一に歸すると云ふ、莊子の議論の意とくみとりたるものなり○眞の人。眞正に道理と辨へたる人の義なり○もとより賢愚得失のさこのひに云々。元來眞正の道理を辨へたる人の如きは、賢と好み、愚と退け、得ととり、失と厭ふが如き境遇には在らぬとなり。

〔文格〕智もなく、德もなく、功もなく、名もなし」は疊語法の一格なり。また誰か知り誰か傳へ

む」は同法の常格なり。

或人、法然上人に念佛の時、ねぶりにをかされて、行をおこたり侍る事、いかゞして、此のさはりをやめ侍らんと申ければ、目のさめたらんほど、念佛し給へと答へられたりける、いとたふとかりけり。又往生は、一定と思へば一定、不定と思へば不定なりといはれけり。これもたふとし。又うたがひながらも、念佛すれば、往生すともいはれけり。これも又たふとし。

〔語解〕 法然上人。淨土宗の開山、僧源空の事なり○行とおこたり侍る事。稱名念佛と懈怠する義なり○此さはり。眠りて念佛を怠ると云ふなり○目のさめたらんはと。目の覺めてある間と云ふ義なり○往生。安樂國に往きて蓮華の中に生るゝ義なり○一定不定。一定して居るものと思へば一定し、不定あるものと思へば不定なり、其間の區別は、己が心の決定によりて斷せらるゝとなり○うたがひながらも。念佛すれば己が罪業を滅し、未來は安樂世界に生るゝと云ふことと疑ひながらも也。

因幡の國に、何の入道とかやいふ者のむすめ、かたちよしと聞きて、人あまたいひわたりけれども、此のむすめ、たゞ栗をのみ食ひて、更によねのたぐひをくはざりければ、かゝることやうのもの、人に見ゆべきにあらぬとて、おやゆるさざりけり。

〔語解〕 何の入道とかや。其名の不明なるが故に、かくは書けるなり○人あまたいひわたりけれども。彼方此方より乘多の人、嫁に貰はんといひ來りたれどもなり○よねのたぐひ。穀類なり、たゞ米と云ふ義にはあらず○ことやうのもの。かく常人と異なりたる者との義なり。

五月五日、賀茂のくらべ馬を見侍しに、車の前に、雜人立へたてゝ、見えざりしかば、おの〳〵おりて、埒のきはによりたれど、ことに人おほくたちてみて、分け入りぬべきやうもなし。かゝるをりに、むかひなるあふちの木に、法師ののぼりて、木のまたについゐて、物みるあり。とりつきながら、いたう眠りておちぬべき時に、目をさますことと度々なり。これを見る人、あざけりあざみて、世のしれものかな。かくあやふき枝の上にて、やすき心ありて、ねぶるらんよといふに、我が心にふと思ひしまゝに、われらが生死の到來、たゞ今にもやあらん。それを忘れて、もの見て日をくらす、おろかなる事は、なほまさりたるものといひたれば、前なる人ども、まことにさにこそ候ひけれ。最もおろかに候ふといひて、みなうしろを見かへりて、とこへいらせ給へとて、所をさりてよび入れ侍りにけり。

き。か程のことわり、誰かは思ひよらざらんなれども、折からのおもひかけぬこゝちして、胸にありたりけるにや。人、木石にあらねば、時にとりて、物に感ぜる事なきにあらぜ。

〔語解〕 賀茂のくらべ。賀茂神社にて行ひし競馬なり○車の前に雑人立へだてゝ。車の前とは、吾人の乗りたる車の前の義なり。雑人は、人間の數にも入らぬ程の下等社會の者と云ふなり。立へたゞてゝ、立ふさがりての意あり○おのゝ〳〵おりて。各人車よりおりてなり○埒のきは。埒とは、馬場にめぐらせる柵と云ふなり、其きはにとなり○あふちの木。今いふ栴檀の木なり○ついゐて。晩き居る義なり○あざけりあざみて。嘲けり見下げての義なり○世のしれものゝ。しれものは、白痴又は愚者の義なり○我心にふと思ひしまゝ。兼好の心に、ふと思ひ付きしまゝなり○まことにころ。仰せ御尤との義なり○所とさりて。自分等が見て居りたる處と去りてなり○か程のこと。これ程と云ふに同じ○人木石にあらねば。文選鮑照が詩に云く、人非二木石一豈無レ感。蓋し此の句とこゝに引きたるあらん。

〔文格〕 この程のことわり、誰かは思ひよらざらんなれども」は、思ひよらざらん思ひよるべき。然あれども」と云ふべき格あると、例の省筆法にて本文の如くは記せるなり。

唐橋中將といふ人の子に、行雅僧都とて、教相の人の師する僧ありけり。氣の

上る病ありて、年のやう〳〵たくるほどに、鼻の中ふたがりて、息も出がたかりければ、さま〴〵につくろひけれど、わづらはしくなりて、目、眉、額などもはれまどひて、うちおほびければ、物も見えぜ、二の舞の面のやうにみえけるが、たゞおそろしく、鬼のかほにおりて、目はいたゞきのかたにつき、額のほど鼻になりなどして、のちは坊のうちの人にも見えぜ、とゐるて、年ひさしくありて、猶わづらはしくなりて死に〻けり。かゝる病もあることにてそありけれ。

〔語解〕 唐橋中將。參議中將雅清が事あり○教相。眞言宗にては經綸聖教と學ぶと、教相ところ稱すなれど、野槌に見えたり○二の舞のおもて。伶人の舞の面と云ふあり、色赤くしてふろしき面なり○額のほど鼻になりなどして。額の處は鼻にありあどしてと云ふに同じ○坊のうちの人にも見えず。寺僧中の人に迄見えずの義なり。

春のくれつかた、のどかに艶なる空に、いやしからぬ家のおくふかく、木立ものふりて、庭にちりしをれたる花、見すぐしがたきを、さし入りて見れば、南面のかうし皆おろして、さびしげなるに、東にむきて、妻戸のよきほどにあきたる、御簾のやぶれより見れば、かたちきよげなる男の、とし廿ばかりにて、打とけたれど、

心にくゝのどやかなるさまして、机の上に文をくりひろげて見るたり。いかなる人なりけん。たづねきかまほし。

〔語解〕 春のくれつかた。暮春の時季なり○艶なる空。うるはしく艶陽の空のことなり○いやしからぬ家云々。賤しからず、風雅なる家の、奥ゆかしく樹木も茂り、庭に花の散りたるなど、何となくおもしろく見過し難きまゝ、中にさし入りて見ればとなり○妻戸。殿の側の方なる戸と云ふ○のたちきよげなる。容貌の清く高雅なると云ふなり○打とけたれど。厳格なる行儀をせざれどもなり○心にくゝ。奥ゆかしく高尚なると賞せるなり。

あやしの竹のあみ戸のうちより、いとわかき男の、月影にいろあひさだかからねど、つやゝかなる狩衣に、こきさしぬき、いとゆゑづきたるさまにて、さゝやかなる童ひとりをぐして、遙なる田の中のほそみちを、稲葉の露にそぼちつゝわけゆくほど、笛をえならぬ吹きすさびたる、あはれと聞きしるべき人もあらじと思ふに、ゆかんかたしらまほしく見おくりつつ行けば、笛を吹きやみて、山のきはに、惣門のあるうちに入りぬ。

〔語解〕 あやしの。賤しき義なり○竹のあみ戸。竹にて編みて拵へたる戸なり○つやゝかなる狩衣。つやゝかなる狩衣とは、美はしき狩衣の義なり○こきさしぬき。濃紫の指貫なり、こは衣

冠の時夏冬ともに用ゐるなり○ゆゑづきたるさま。故ありげなるさまとなり○さゝやかなる童。小童なり○ほそみち。細道なり○ろぼちつゝ。ろぼちは、ぬるゝ義なり○吹きすさび。ふき慰む義なり○あはれと聞しる人もあらじ。笛の音のあゝ面白しと聞き知る人もあらずとなり○惣門。寺の惣門と云ふ。

〔文格〕 つやゝかなる狩衣に、こきさしぬきの下に云ての合語あるべき格なり。またさまにてぐしてはろ道などよりは、わけゆくへ係る文脈なり。

榻にたてたる車の見ゆるも、都よりは目とまる心ちして、下人にとへば、しかくの宮のおはしますなる比にて、御佛事あるどさぶらふにやといふ。御堂の方に、法師ども参りたり。夜寒の風にさそはれくる、そらだきものゝにほひも、身にしむてゝちす。寝殿より御堂の廊にかよふ女房のおひ風、よういなど、人めなき山里ともいはれぬ、心づかひしたり。

心のまゝにしげれる秋の野ちは、おきあまる露にうづもれて、虫のねかでとがましく、遣水の音のどやかなり。都の空よりは、雲の往來もはやきてゝちして、月のはれくもる事、さだめがたし。

〔語解〕 榻。車とすゑておくものなり○都よりは目とまる心ちして。都にては通常みられて珍

しのらねど、田舎にては目にとまりて、一層珍奇に思はるゝとなり○夜さむの風。秋の夜の風と云ふなり○ろうたきものゝにほひ。衣裳などに香をつけるために焼く香にはあらず、平常に焼く香の匂と云ふ義あり○寝殿。宮のおはします殿なり○御堂の廊。廊下の義なり○おゝ風。人の行き過きたるあとの風と云ふあり○ようい。ゆきゝする様躰などの用意なるべし○人めなき。人の住み居らぬ義あゝ○心のまゝ。草木の心のまゝになり○野らは。野原あり○ものどがましく。虫の音の喞けがましく鳴くと云ふなり○雲の往來もはやきこゝちして。山と山との間の田舎あれば、都よりは山風はげしく、雲の動揺もはやき様に見ゆとなり。

公世の二位のせうとに、良覺僧正と聞ゆしは、きはめてはらあしき人なりけり。坊の傍に、おほきなる樓の木のありければ、人、樓木僧正とぞいひける。此の名しかるべからぬとて、かの木をきられけり。其の根のありければ、きりくひの僧正といひけり。いよ〳〵はら立て、きりくひをほりすてたりければ、其の跡おほきなる堀にてありければ、堀池僧正とぞいひける。

〔語解〕 公世の二位。二位侍從公世卿の事なり、閑院の末流にて、筆の一正流あり○せうと。兄の事と云ふなり、卽ち兄人の義なり○きはめてはらあしき人。極めて腹と立てやすき人となり○此名しかるべからず。このやうなるあだ名はよろしからずとてなり○きりくひ。木の切株と云ふ。俗に「キリカブ」と云ふに同じ。

柳原の邊に、强盜法印と號する僧ありけり。たび〳〵强盜にあひたる故に、名をつけにけるとぞ。

〔語解〕 柳原。京都の地名なり、或人の說によれば京の室町の邊と、古は柳原と稱しけりとぞ。この段は人の名と聞く人の心得までに書れたるものなり。

或人、清水へ參りけるに、老いたる尼の行きつれたりけるが、道すがら、くさめ〳〵といひもてゆきければ、尼御前、何事をかくはの給ふぞと問ひけれども、いらへもせず。猶いひやまざりけるを、たび〳〵とはれて、うちはらたちて、やゝはおひたる時、かくまじおはねば、死ぬるぞりと申せば、やしおひ君の、比叡山に兒にておはしますが、たゞ今もや、はおひ給はんと思へば、かく申ぞかしといひけり。有りがたき志おりけんかし。

〔語解〕 清水。京都の音羽山清水寺のことなり○行つれ。道つれの義あり○くさめ〳〵といひ。くさめは、今の「クシャミ」あり、他人の「クシャミ」としたる時は、此方も又「クシャミ」云ひつゝ呪ふと云ふなり○いらへもせず。返答せざる義なり○やゝはなひたる時。やゝは、漸くの義なり。はなひたる時は嚏の字にて、「クシャミ」したる時と云ふなり○やしおひ君。養ひ育

てたる君の義なり○比叡山。近江山城兩國の間にあり。

光親卿院の最勝講奉行してさぶらひけるを、御前へめされて、供御をいただされて、くはせられけり。さて物くひちらしたる衝重を、御簾の中へさし入れて、罷出にけり。女房あおきたお。誰にとれとてかおぞ申しあはれければ、有職のふるまひ、やんごとおき事おりと、かへすがへす、感せさせ給ひけるとぞ。

〔語解〕光親卿。正三位堀川中納言光親卿なり○院の最勝講。院は後鳥羽院の事ならんか。最勝講の事は前に述べたり○衝重。破籠のやうなるものなり○やんことなき事。ここにては、はめたる詞にて、故實家の擧止役目と重ずればなり○かへす〳〵。繰りかへし〳〵しとの義なり。

〔文格〕誰にとれとての下に、茲に入れられつるの含語あり。又此の前句おるおなきたなの下にも、き事よと含語と入れて心得べし。

老來りて、始めて道を行せんと、まつことおかれ。ふるき墳おほくは是少年の人おり。はからざるに病をうけて、忽に此の世を去らんとする時にこそ、初めて過ぎぬるかたの、あやまれる事は知らるおれ。あやまりといふは、他の事にあらず。速にすべき事をゆるくし、ゆるくすべきことをいそぎて、過にしことのくやしきおり。其の時、悔ゆともかひあらんや。

〔語解〕道と行せんとまつことなのれ。道と行せんは、佛道と修行せんとなり。まつことなのれは、老の來ると待ちて、初めてなすとなのれとの義なり○ふるき墳云々。古詩に、莫下待二老來一方學ち道古一墳盡是少年とあると國文に譯したるものなり○はのらざるに病をうけ。思ひもよらざるに、病氣に罹りての義なり○あやまりといふは、他の事にあらず云々。過ちたりと思ふことは他事にあらず、早く佛道と修行せず、無益なる事と爲し居たる事と云ふおり。

〔文格〕速にすべき事とゆるくし、ゆるくすべき事といろぎ」は對句法の精格なり。このひあらんや」は反語法にて、このひなのらんと詞と反して係結格となすなり。

人は、たゞ無常の身にせまりぬる事を、心にひしとかけて、つかのまもわするまじきおり。さらばおどか、此の世のにでりもうすく、佛道をつとむる心も、まめやかおらざらん。むかし、有りけるひじりは、人來りて自他の要事をいふとき、答へて云く、今火急の事ありて、すでに朝夕にせまれりとて、耳をふたぎ念佛して、つひに往生を遂げたりと、禪林の十因に侍り。心戒といひたる聖は、あまりに此の世のかりそめおる事を思ひて、しづかについるけることだにおく、常はうゑくまりてのみぞありける。

〔語解〕心にひしとかけて。心中に執着しての義なり、俗に「ビックリト思込ンダ」と云ふに同

じ○つこのまも。時のまもなり、造次顚沛にも忘るべからずと云はんが如し○さらばなどの。左樣にあらば、どうしてのとなり○自他の要事。自身の上にも、他人の上にも、肝要なる事と云ふなり○禪林の十因。東山の永觀堂と禪林と云ふ。其寺の住僧たりし、永觀律師、みづから往生十因といふ一卷と著はして、道俗にしめしけり。世にこれと禪林の十因と稱すとぞ○心戒といひける聖。發心集に、ちこく心戒房とて、居所も定めず、風雲に跡をまかせたるひじりありけり。俗姓は、花園殿の御末とこそ。八島の大臣の子にして、宗親とてあはのこのみになされし人ありけり云々とあり○ついゐけることだにおく。髫さ居ることさへなくしての義なり○うづくまり。蹲踞の字にあたる義なり。

〔文格〕 などの云々まめやかあらざらん」は反語法にて、まめやかにあるべきと詞と加へて、係結法第二格と調ふべき格なり。

應長の比、伊勢ノ國より女の鬼にゐりたるを、ゐてのぼりたりといふ事ありて、其頃、廿日ばかり、日でとに、京白川の人、鬼見にとて出でまどふ。昨日は西園寺に參りたりし、今日は院へ參るべし。たゞいまはそこ〳〵になどいひあへり。まさしく見たりといふ人もなく、そらごと〻云ふ人もなし。上下たゞ、鬼の事のみいひやまず。其の頃、東山より安居院の邊へ、罷り侍りしに、四條よりかみ

ざまの人、みな北をさしてはしる。一條室町に鬼ありと、のゝしりあへり。今出川の邊より見やれば、院の御棧敷のあたり、更にとほりうべうもあらず、たちてみたり。はやく跡なき事にはあらざめりとて、人をやりて見するに、おほかたあへるものなし。暮るまでかく立ちさわぎて、はては、鬪諍おこりて、淺ましき事ども有りけり。その比、おしなべて、二三日、人のわづらふ事侍りしをぞ、かの鬼のそらごとは、此のしるしをしめすなりけりと、いふ人も侍りし。

〔語解〕 女の鬼にゐりたるとゐてのぼりたり。女の鬼に化身せるものと、連れ率ゐて京へ登りたりとなり○京白川。京都の白川と云ふ地なり○西園寺。此頃は、西園寺殿、北條家にして威勢最も盛ゐりしゐば、まづ此に書き記したるなり○院へ參るべし。上皇または法皇の院へ參るべしとゐり○ろこ〳〵。どこ其處などと云ふに同じ○ろちごと云ふ人もゐし。盧說ゐどと云ふ人もゐらずとなり○安居院の邊へ罷り侍りしに。兼好、用事ありて安居院の方へ行きたりしにゐり○のゝしりあへり。噪しく評判するとゐり。罵詈の義にはゐらず○院の御棧敷。昔は、一條大路に賀茂の祭の物見のために、院の御棧敷ありきとゐり○とはりうべうもあらず。通行し得べくもあらずとゐり○はやく。急速なり、俗に「トックニ」と云ふに同じ○鬪諍。たゝこのひ爭ふゐり。毗尼母に、二人共競名レ鬪徒一黨相助名レ諍とゐり○おしなべて。總躰なり○此のしるしとし

めすゐり。曩に女の鬼の京に登りたるは、この流行病の前兆と示せるものと、云ふ人も有りけりとなり。

〔文格〕 はやくの語は、下の人とやりてに係る文脈なり。

龜山殿の御池に、大井川の水をまかせんとて、大井の土民におほせて、水車をつくらせられけり。多くのあしを給ひて、數日にいとなみ出してかけたりけるに、大方めぐらざりければ、とかくなほしけれども、終にまはらで、いたづらにたてりけり。さて宇治の里人をめして、こしらへさせられければ、やすらかにゆひて、まゐらせけるが、おもふやうにめぐりて、水を汲み入るゝ事、めでたかりけり。万に其の道をしれる者は、やんごとなきものなり。

〔語解〕 龜山殿の御池。龜山天皇嵯峨の龜山の山莊に、御隱居あらばしてありけるが、其庭内の御池にと云ふ義ゐり○水とまこのせられんとて。大井川の水と引き入れられんと思はれてなり○多くのあしと給ひて。あしは料足の事と云ふ。多くの賃錢と與へ給ひてと云ふ義なり○宇治の里人云々。宇治は水車製造の名所なる故に、其土地の匠人と召して、作らしめければとなり○やすらかに。容易の義なり。輕く手易く作りたるゐるべし○万に其道としれる者は云々。水車によらず、万事其道と知れる者は、感心の至りなりとゐり。

仁和寺にある法師、年よるまで、石清水を拜まざりければ、心うく覺えて、ある時、おもひ立ちて、獨かちよりまうでけり。極樂寺、高良などを拜みて、かばかりとこゝろえて、かへりにけり。」さてかたへの人にあひて、年比おもひつる事、はたし侍りぬ。聞しにもすぎて、たふとくおはしけれ。そも參りたる人でとに、山へのぼりしは、何事かありけん。ゆかしかりしかど、神へまゐるとこそ、はいなれとおもひて、山までは見ぎとぞいひける。すこしの事にも、先達はあらまほしき事なり。

〔語解〕 仁和寺。宇多天皇、昌泰二年十月御落飾ありて、法名と空理と申たてまつり、延喜四年に、仁和寺に御室と營みおはしける故に、一にこれと御室とも申すなり○のちより。徒歩してなり○極樂寺。山城國久世郡、科手上里にあり。八幡ノ宮護國寺別當安宗の開山なり○高良。京都男山の麓にあり。玉垂命とあかめ奉れり○のたへの人。傍の人達なり○先達。道者の長と云ふ。こゝにては、案内者の義に解すべし。

これも仁和寺の法師、童の法師にならんとする名殘とて、おの〳〵遊ぶことありけるに、醉て興に入るあまり、傍なる足鼎をとりて、頭にかづきたれば、つまる

やうにするを、鼻をおしひらめて、かはをさし入れて舞出でたるに、滿座興にいることかぎりなし。たばしかおで〻後、ぬかんとするに、大かたぬかれぞ。酒宴でとさめて、いかゞはせんとまどひけり。とかくすれば、くびのまはりかけて血たり、たゞはれにはれみちて、息もつまりければ、打わらんとすれど、たやすくわれぞ、ひゞきてたへがたければ、かなはですべきやうなくて、三足なるつの〻上に、かたびらを打かけて、手をひき、つゑをつかせて、京なるくすしのがりゐて行きけるに、道すがら、人のあやしみ見る事、かきりなし。醫師のもとにさし入りて、むかひゐたりけんありさま、さてそとやうなりけめ。物をいふも、くゞもり聲にひゞきて聞えぞ。か〻る事は文にも見えぞ、傳へたる教へもなしといへば、又仁和寺へ歸りて、したしき者、老いたる母ゐど、枕上によりゐて、なきかなしめども、きくらんとも覺えぞ。か〻る程に、あるもの〻いふやう、たとひ耳鼻てそきれうすとも、命ばかりはゐどか生ざらむ。たゞちからをたてひき給へとて、藁のしべをまはりにさし入れて、かねをへだて〻、頭もちぎるばかりひきたるに、耳鼻かけうげながらぬけにけり。からき命まうけて、久しくやみゐたりけり。

〔語解〕 足鼎。三足の鼎の事なり○頭にのづき。頭に足鼎とのぶりたるなり○つまるやうに云々。頭と鼎に入る〻に、中狹くして、入れのたき狀を云ふなり○鼻とおしひらめて。鼎に頭と入る〻に、鼻をれし平めて入れたりとなり。○ぎばしのゐで〻後。ぎばしは、暫時ゐり。のなで〻は、奏で〻なり。踊舞ふことと云ふなり。○大のたぬのれず。少しも鼎がぬけざると云ふ。○酒宴ことさめて。酒宴の興味が急になくなりてなり○とのくすれば。扱のん思ひもとやかくと鼎とひねり廻はせばゐり○くびのまはりのけて。法師の首のまはりの皮肉が切れてなり○血たり。血のたり出づる義ゐり○たゞはれにはれみちて。首のまはり一面に膨れ滿ちてといはんが如し○打わらんとすれば云々。鼎を打わり毀さんとすれども、如何さま堅固に出來てあれは、容易にこはれず、其の音、頭腦へ響けて堪難ければとなり○のなはですべきやうゐくて。鼎とぬのんとすれぞもぬけず、さりとてなすべき手段もなくてなり○三足ゐるつのの上に。三足の鼎の角の上にとなり○くすしのがり。くすしは、醫者のことなり。がりは許の義なり○ゐて行けるに。率連れて行けるにゐり○道すがら。醫者へ行く途中なり○ことやう云々。異樣なる風躰ゐりしならんとなり○くゝもり聲にひゞきて。聲の鼎の内にこもりて、物云ひの響きて分らぬと云ふなり○のゝる事は。のやうの事はとなり。是れ醫師の詞なり○文にも見えす。醫書に其事あらずとゐり○傳へたる教へもゐし。口傳として師匠より教へられし事もなしとゐり○枕が

み。まくらもとの義なり○うけうげながら。鼻のけて跡に孔があきながらあり。うげは、穿の字や安當らむ。

御室に、いみじき兒のありけるを、いかでさそひ出して、あそばんとたくむ法師どもありて、能あるあそび法師どもなどかたらひて、風流の破子やうの物、ねんごろにいとなみいでゝ、箱ふぜいの物にしたゝめ入れて、おらびの岡の便よき所にうづみおきて、紅葉ちらしかけなど、おもひよらぬさまにして、御所へ參りて、兒をそのゝかしいでにけり。うれしと思ひて、こゝかしてあそびめぐりて、有りつる苔の席にふみるて、いたうてそてうじにたれ。あはれ紅葉をたかん人もがな。驗あらん僧達、いのりとゝろみられよおどいひしろひて、埋つる木のもとにむきて、數珠おしすり、印てとゞ〳〵さくむすび出でなどして、いらなくふるまひて、木の葉をかきのけたれど、つや〳〵物も見えぬ。所のたがひたるにやとて、はらぬ所もなく、山をあされどもなかりけり。うづみけるを人の見おきて、御所へまゐりたるまにぬすめるなり。法師ども、ことの葉なくて、聞きにくいさかひ、はら立ちてかへりにけり。あまりに興あらんとする事は、必ぬ、あひ

なきものなり。

〔語解〕御室。仁和寺の事なり○いみじき兒。兒とは、いまだ得度せざる童子を云ふ。いみじきは、甚よき義なり○能あるあそび法師。藝道の能ある遊び法師なり○風流の破子やうの物。風流は、みやびのある義なり。破子は、飲食物を入るゝ道具なり○箱ふぜいの物。箱風情の物にて、箱のやうなる物とあり○ならびの岡。双岡と書く、御室に近き丘なり○御所。御室の御所なり○うれしと思ひて。能ある法師の誘出を嬉しく思ひてなり○宵つる苔の席。苔の生ひ出でたる處を席としてなり○いたうてそてうじにたれ。甚つゝれ草臥れたる義なり。こうじは、困の字と書く○驗あらん僧達、いのりとゝろみられよ。修業の驗あらん僧達は、何ぞ食物を祈り出して、試されよとあり○いひしろひて。互に云ひ合ひてあり○印ことゞ〳〵しくむすび出でなどして。呪文を唱へて祈禱すると印を結ぶと云ふ。即ち其術をことゞ〳〵しく行ふ事なり○いらなくふるまひて。種々に加持を盡して餘す術なく振舞ひてあり○つや〳〵。一向又は一切の義なり。俗に「スコシモ」と云ふに同じ○あされども。詮索すれども義あり○ことの葉なくて。兒に對して言解く詞あらず、面目なくてなり○あひなき。無愛又は無興の字を書くなり。

家の作りやうは、夏をむねとすべし。冬はいかゝる所にもすまる。あつき頃、わろき住居は、たへがたき事なり。ふかき水は、涼しげなし。淺くしてながれたる、

遙にすゞし。てまかふる物を見るに、遣戸は蔀の間よりもあかし。天井の高きは、冬さむく、燈くらし。造作は用なき所をつくりたる、見るも面白く、萬の用にもたちてよしとぞ、人の定めあひ侍りし。

〔語解〕夏をむねとすべし。夏に適するやうに、家と建設すべしとあり○わろき住居。風の通りのわろき住居なり○てまやこなる物。細字を以て書きたる書物の事なり○遣戸。明り取りの戸あり○造作は用なき所と云々。平素無用のやうに思はるゝ所も、ある場合には有用なるあり。假令は母屋、書院あゞの、殊の外に造作を要せざる所と、造作するは、反て面白く必要ありとの說なり。

久しくへだたりて、あひたる人の、我が方にありつる事、かぞ〳〵に殘りおく、語りつゞくるこそ、あいなけれ。へだてなくおれぬる人も、ほゞへて見るは、はづかしからぬかは。次ざまの人は、あからさまにたち出ても、けふこりつる事として、いきもつきあへぞ、かたり興ぞるぞかし。よき人の物がたりするは、人あまたあれど、ひとりにむきていふを、おのづから人もきくにてそあれ。よからぬ人は、誰ともなく、あまたの中にうち出でゝ、見ることのやうに語りなせば、皆おなじくわらひのゝしる、いとろうがはし。

〔語解〕久しくへだたりてあひたる人。久しく疎遠にてありし人に遇ふ事なり○殘りおく語りつゞくる。殘らず語り盡す義なり○はづかしからぬかは。「かは」は反語なり。耻しからぬかなり○よき人。次ざまの人。上中の人の、次の人といふ義なり。卽ち下等の徒輩と云ふいふを。閑ある躰にて、一人に對ひて云ふ談話あり○ちうかはし。亂りがましくうるさしとの義なり。

〔文格〕はづかしからぬかは」は、例の反語法にてはづかしらむと詞を加へて係結格を調ふる格あり。

をかしき事をいひても、いたく興せぬと、興なき事をいひても、よくわらふにぞ、志なのほど、はかられぬべき。人の見ざまのよしあし、ざえある人は、其事おど定めあへるに、おのが身をひきかけていひ出でたる、いとわびし。

〔語解〕志なのほどはかられぬべき。面白く、とのしき事を聞きて、笑ふと、笑はぬとによりて、人の品格は推量らるゝとなり○ざえある人。才智ある人なり○おのが身をひきかけて云々。人の身の上の賢愚善惡を評するに、我身を定規にして云ふは、聞きにくゝあるとなり。

人のかたり出でたる、歌物語の、うたのわろきてそ、ほいなけれ。少し其道ざら

ん人は、いみじと思ひては、かたらじ。すべて、いとも知らぬ道の、ものがたり去たる、かたはらいたく聞きにくし。

〔語解〕はいるけれ。本意なきわざなれとあり○いみしと思ひてはのたらじ。少しにても歌の道と心得たる者は、其わろき歌とば、よしと思ひては人に語らじとあり○いとも知らぬ。委しく知らぬ義なり。

〔文格〕前段の終りのいひ出でたる」と、茲のものがたりしたる」とは同格なれば、共には。の含語ありて下の語へ續くなり。

道心あらば、住む所にしもよらじ。家にあり、人にまじはるとも、後世を願はんに、かたかるべきかはと云ふは、さらに後世おらぬ人なり。げには、此の世をはかなみ、必ず生死をいでんと思はんに、何の興ありてか、朝夕君につかへ、家をかへりみるいとおみの、いさましからん。心は緣にひかれてうつる物なれば、閑ならでは道は行じがたし。

〔語解〕道心。佛道と信仰する心と云ふなり○のたるべきのは。後世と願ひて、願ひがたき事のわらんの義なり○げには。實によく思ひて見る時には意なり○生死といでん。六道の生死界と出離する義なり○心は緣にひかれてうつる物なれば。君につかふれば、其緣にひかれて、君

のことのみと思ひ、また家とかへり見れば、其緣にひかれて、妻子の事のみと思ひて、後世の事は忘却するものなれば、佛道と修行せんと欲せば、一向に佛道に心と歸せねば、遂げ難きものとなり。

〔文格〕君につかへ、家とのへりみる」は、疊語法の精格なり。此の條、兼好自身が上とうつし出でたるなるべし。

其のうつはもの、むかしの人におよはず。山林に入りても、餓をたすけ、嵐をふせぐよすがおくては、あられぬわざおれば、おのづから、世をむさぼるに似たる事も、たよりにふれば、なぞかおからん。されはとて、そむけるかひなし。さはかりならば、なじかはすてしなどいはんは、無下の事なり。さすがに、一度、道に入りて世をいとはん人、たとひ望ありとも、いきほひある人の、貪欲おほきに似るべからず。紙の衾、麻の衣、一鉢のまうけ、あかざのあつ物、いくばくか人のつひへをなさん。もとむる所はやすく、其の心はやく足りぬべし。

〔語解〕其のうつはもの。其人の器量あり○山林に入りても。佛道と修行せんがため、世と捨て山林に入りてもなり○よすがなくてはあられぬわざなれば。便りなくては叶はぬ業なればと也○世とむさぼるに似たる事。衣食と需むるゆゑに、少は世と貪ぼるに似たる事もあらんとなり○

たよりにふれば。時宜によりて衣食など需むる緣にふればなり○ろむけるこのひなし。世とゝて山林に入りたる甲斐あしとの意ぶり○さすがに。今の俗語にて「ソレダケニ」と同じ○紙の衾麻の衣。桑門の寒と防ぐよすがなり○あのざのあつ物。藜莠と云ふ草の羹ぶり○其心はやく足ぬべし。自身が心中に頓て滿足すべしとの意なり。

〔文格〕 なじのは」は、何しのはの略語にて、誦讀の語勢に從ひて、なじのはと濁れるなり。是の例他の詞にも多のり。類推して知るべし。

かたちにはづる所もあれば、さはいへど、惡にはうとく、善にはちかづく事のみぞおほき。人と生れたらんきるしには、いかにもして、世をのがれむとてそ、あらまほしけれ。ひとへに、むさぼる事をつとめて、菩提におもむかざらんは、萬の畜類に、かはる所あるまじくや。

〔語解〕 のたちにはづる所もあれば。心はまことならずとも、剃髮して出家の姿になれば、惡とする事はまれぶり。是れのたちに耻づる心ある故にとなり○さはいへど 去ばには云ふものなれぞもぶり○世とのがれんことろ。佛道と修行して、其道と得んことろと云ふ意ぶり○菩提 こは梵語なり。佛道の極に達したるとば、菩提と云ふなりと或書に見えたり。

〔文格〕 惡には疎く、善には近づく」は、疊句法の精格なり。のはる所あるまじくやは、其の下に

いのゞあらむと、詰問する語と加へと係結格を調ふべし。

大事を思ひたゝん人は、さりがたく心にかゝらん事の、ほいをとげずして、さながら捨つべきなり。おほし此の事はてゝ、おなじくば、かの事、沙汰しおきて、おかゞ〳〵の事、人の嘲やあらん。行末難なくおたゝめまうけて、年來もあればてそあれ。其の事またんほどあらじ。物さわがしからぬやうにおぼ思はんには、えさらぬ事のみいとゞかさなりて、事のつくるかぎりもなく、思ひたつ日もあるべからず。おほやう人を見るに、少し心あるきはゝ、皆此のあらましにてぞ、一期はすぐめる。ちかき火おどにぐる人は、おほしとやいふ。身をたすけんとすれば、耻をもかへりみず、財をもすてゝのがれさるぞかし。命は人をまつものかは。無常の來る事は、水火のせむるよりも速にのがれがたきものを、其の時、老たる親、いときなき子、君の恩、人の情、捨がたしとて捨てざらんや。

〔語解〕 大事。佛者にては、生死の二つと大事といふなりと、大全に見えたり○さりがたき心。心より捨て去り難き事なり○さおがら捨つべきなり。ろのまゝに捨て去るべきなりとなり○おほし此事はてゝ云々。人の世に立ちて爲すべき業務、のずゝ多けれど、此事と遂げて後、菩提

と求めん。この事と沙汰しれきて後世とも求めん。然らざれば世の譏り、人の嘲弄と受けんなど、遠慮するさまあり○えさらぬ事のみ。捨て難き用事ばかりあり○れはやう、凡そ又は大略おぼえ云ふ義なり○すこし心あるきはゝ。少し道心ある分際の者はとの義あり○命は人とまつ物かは。死ぬる命は、人間の用事ありとて、其と待て後來るものにあらずとあり。

眞乘院に、盛親僧都とて、やんごとなき智者ありけり。いもがしらといふ物をこのみて、おほくゝひけり。談義の座にても、おほきなる鉢に、うづたかくもりて、ひざもとにおきつゝ、くひながら文をよみけり。煩ふ事あるには、七日二七日おぼえ療治とて籠居て、おもふやうに、よきいもがしらを撰びて、ことに多く食ひて、萬の病をいやしけり。人にくはする事なし。たゞひとりのみぞくひける。きはめてまづしかりけるに、師匠、死にざまに錢二百貫と、坊ひとつをゆづりたりけるを、坊を百貫にうりて、彼是三万疋を、いもがしらのあしとさだめて、京なる人にあづけおきて、十貫づゝとりよせて、いもがしらを、ともしからぬめしけるほどに、又ことやうに用ふる事おくて、其のあしみなになりにけり。三百貫の物をまづしき身にまうけて、かくはからひける、誠に有りがたき道心者なりとぞ、人申しける。此の僧都、ある法師を見て、おろうるりといふ名をつけたりけり。とは何物ぞと人のとひければ、さるものを我もおらぬ。もしあらましかば、此の僧の顔に似てんとぞいひける。此の僧都みめよく、力つよく、大食にて、能書、學匠、辨説、人にすぐれて、宗の法燈おれば、寺中にもおもく思はれたりけれども、世をかろくおもひたる曲者にて、よろづ自由にして、大方、人におたがふといふ事なし。出仕して饗膳などにつく時も、みな人の前すゑわたすをまたぬ、我か前にすゑぬれば、やがてひとり打食ひて、歸りたければ、ひとりついたちて行きけり。とき非時も、人にひとしく定めてくはぬ。わがくひたき時、夜なかにも、曉にも食ひて、ねぶたければ、晝もかけこもりて、いかなる大事あれども、人のいふことゝいれぬ。目さめぬれば、いく夜もいねぬ、心をすまして、うそぶきありきおぼえ、尋常ならぬさまなれども、人にいとはれぬ、よろづゆるされけり。徳のいたれりけるにや。

〔語解〕 眞乘院、仁和寺境内にあり○いもがしら。芋頭あり○談義の座。宗義と講談する座なり○師匠死にざまに。師匠の法師が死に際になり○坊。僧侶の居宅なり○あし。料足の字と書

く。金銭のことなり○めしける。食する義なり○まうけて。貯蓄しれきてゐり○しろうなり。此僧の顔、白く不慧顔せるにて、誹謗して附けたる名なり○宗の法燈。宗は、眞言宗のことなり。法燈は、棟梁の義なり○曲者。ひと倜ある者の義なり○出仕。佛事に出仕せし時と云ふなり○ついだちて。ついは、助勢辭にて、たゞ立ちてなり○とき非時。「とき」とは、佛者が日中、午の時に食するといひ、非時は、沙彌十戒中の、離非時食にて、晩食の時と云ふなり。

御産のとき、飯おとす事は、さだまれる事にあらぞ。御胞衣とゞこほるときの、まじおひなり。とゞこほらせ給はねば、此の事なし。下ざまよりとおこりて、させる本説なし。大原の里のこしきをめすなり。ふるき寶藏の繪に、賤き人の子うみたる所に、飯おとしたるを書きたり。

〔語解〕御産のとき。皇后または皇妃ゐどの御産の時なり○飯れとす。飯は、飯と炊く器物なり。其と家の棟より落すことなり。此の事平家物語に見も○ふるき寶藏の繪。古きたゐら藏に納め置きたる繪双紙なり。

延政門院、いときなくおはしましける時、院へまゐる人に、ことづてとて申させ給ける御歌、「ふたつもじ牛の角もじ、すぐなもじ、ゆがみもじとぞ君はおぼゆる」てひしく思ひまゐらせ給ふとなり。

〔語解〕延政門院。後嵯峨天皇の皇女なり○院へまゐる人にことづて。後嵯峨院へ參らるゝ人に言傳してゐり○ふたつもじ（こ）の字をさすなり。牛の角もじ（い）の字と云ふ。すぐゐもじ（し）の字をさすなり。ゆがみもじ（く）の字と云ふ。○君はれぼゆる。君とば思ひ慕ひ奉るとの義ゐり。

後七日の阿闍梨、武者をあつむる事、いつとかや。盗人にあひにけるより、宿直人とて、かくことゞくしくなりにけり。一年の相は、此の修中のありさまにてそ見ゆなれば、兵をもちひん事、おだやかならぬ事なり。

〔語解〕後七日。眞言院の御修法は、正月八日より七日行はる。今年金剛界なれば、明年は胎藏界、年にのはるゝ修せらる。此と後七日の御修法と稱することは、公事根源に見えたり○阿闍梨。御修法をつとめ給ふ師を云ふゐり○一年の相は云々。一ヶ年間の吉相凶相は、此の御修法の中の有樣に見ゆとなり○れだやのならぬ。穩當ならずとゐり。

車の五緒は、必ず人によらぞ、ほどにつけて、きはむるつかさ位にいたりぬれば、のる物なりとぞ、ある人、仰せられし。

〔語解〕車の五緒。五ッ緒とは、緒と車簾の五ヶ處につくるを云ふなり○きはむるつかさくらゐ。極官極位なり。其家々につきて、極官極位に進みたる者は、皆五緒車に乘ると得べしと

なり、

此のごろの冠は、むかしよりは、はるかにたかくありたるなりとぞ、或人おはせられし。古代の冠桶をもちたる人は、はたをつぎて、今用ふるなり。

〔語解〕冠桶。一に冠箱とも云ふ。冠と入るゝ物にして、梨地蒔絵などにて、箱の内を錦もて張れるもあり○はたとつぎて。冠制の變れる故に、ろのまゝにては入れ難きゆゑ、冠桶の緑とつけたり、端とつぎたりして、つくろひ足してあり。

岡本關白殿、さかりなる紅梅の枝に、鳥一双をそへて、この枝につけてまゐらすべきよし、御鷹飼、下毛野武勝に仰せられたりけるに、花に鳥つくるすべをりさふらはぬ。一枝にふたつつくる事も、存知候はぬと申しければ、膳部に尋ねられ、人々にとはせ給ひて、又武勝に、さらばおのれが思はんやうにつけて、まゐらせよと仰らせれたりければ、花もなき梅の枝にひとつをつけて、まゐらせけり。

〔語解〕岡本關白殿。關白左大臣家平公なり。家と岡本と號す○鳥一双。鳥二疋なり○花に云々すべしりさふらはず。其術と知らずとなり○膳部。御膳の事と執り扱ふものなり○一つとつけてまゐらせけり。雉一羽を付て差上げたりとなり。

武勝が申侍りしは、柴の枝、梅の枝、つぼみたると、ちりたるとにつく。五葉などにもつく。枝の長さ七尺、あるひは六尺返しがたゐ五分にきる。枝の半に鳥をつく。つくる枝、ふまする枝あり。ゑゞら藤のわらぬにて二所つくべし。藤のさきは、ひうち羽のたけにくらべて切て、牛の角のやうにたわむべし。初雪の朝、枝を肩にかけて、中門よりふるまひて參る。大みきりの石をつたひて、雪にあとつけぞ、あまおほひの毛を、すこしかゐぐりちらして、二棟の御所の高欄によせかく。祿をいださるれば、かたにかけて、拜して去りぞく。初雪といへども、沓の鼻のかくれぬほどの雪には參らぞ。あまおほひの毛をちらすことは、鷹はよわでしをとる事ゐれば、御鷹のとりたるよしゐるべしと申しき。

〔語解〕五葉。五葉の松なり○返しがたな。野鍛に、木竹によらず、はすぎりに切りて、其うらと切りろぐと、返しのたなと云ふとあり。○しゞら藤。つる草の名にて、つらゝ藤とも青葛とも云ふなり○ひうち羽。鳥の羽のさきに火打の形したる羽あると云ふあり○枝と肩にのけて。是れ關白殿の前にて申上れば、關白殿へ鳥と進ずる作法と武勝が申たるありと、文段抄に見えたり○ふるまひてまゐる。禮儀容躰をとゝのへて參るなり○大みきりの石。庭の傍ら軒の下の

石なり○あまれはひの毛。雉の尾の付け際にある毛を云ふ○高欄によせおく。欄干に鳥柴を寄せ掛くるなり○祿といださるれば。御衣裳を祿として賜はるればなり。

花に鳥つけぞとは、いかゐる故にか有けん。長月ばかりに、梅のつくり枝に、雉をつけて、君がためにとをる花は、時しもわかぬといへること、伊勢物語にみえたり。つくり花は、くるしがらぬにや。

〔語解〕 長月ばかりに。九月のことなり○伊勢物語にみえたり。伊勢物語に云く、むかしおとこ、いまうちきみと聞ゆるはしけり。つかうまつるとて、長月ばかりに、梅のつくり枝にきじをつけて奉るとて、わがたのむ君がためにとる花は時しもわかぬ物にぞ有けるとよみて奉りければ、いとかしこくとかしがり給ひて、つかひに祿たまへりけり云々。

〔文格〕 此の一段は三章に分れて、終始鳥と花木とともて莊飾したるなり。かくて結尾の文に、伊勢物語の古事と引出でて、初章に照應せしめて首尾と成せり。

賀茂の岩本、橋本は、業平、實方ゐり。人の常にいひまがへ侍れば、一年參りたりしに、老いたる宮司の、過しをよびとゞめて、尋ね侍りしに、實方は、御手洗に影のうつりける所と侍れば、橋本やゐは水の近ければと覺え侍る。吉水の和尚、「月をめで花をゐがめしいにしへの、やさしき人はこゝにありはら」とよみ給ひ

けるは、岩本の社とこそ承りおき侍れど、おのれらよりは、おか〳〵御存知ゐどもこそさふらはめと、いとうやゝしくいひたりしてそ、いみじくおぼえしか。

今出川院近衛とて、集どもにあまた入りたる人は、わかゝりける時、つねに百首の歌をよみて、かの二の社の御前の水にてかきて、手向けられけり。誠にやんごとゐきはまれありて、人の口にある歌おほし。作文、詩序ゐど、いみじくかく人ゐり。

〔語解〕 賀茂の岩本橋本。賀茂の神社内にある岩本の社は、在原業平朝臣を祀り、橋本の社は、藤原實方朝臣と祀れるものなりと也○過しとよびとゞめて。兼好の前と通り過ぎし宮司と呼び留めてなり○御手洗。神山より發して、片岡森と過ぎて流れ行く川なり○影のうつりける所。其川に神社の影のうつる所とゐり○吉水和尚。法性寺關白忠通公の一子、慈鎮和尚なり○今出川院近衛。今出川院に宮仕へせし、近衛の局の事ゐり。今出川院は、亀山院の后、常盤井相國實氏公の孫、中宮嬉子なり○集ども。歌集どもなり。續古今集より以下、五代の集の作者なり。○人の口にあるうたたはし。名歌とて人々が口に唱へらるる歌多しとなり。

筑紫に、あにがしの押領使ゐどいふやうなる、もの〳〵ありけるが、土おほねを、よろづにいみしき藥とて、朝でとに、ふたつづつやきて食ひけること、年久しくゐ

りぬ。ある時、館の内に、人もおかりける隙をはかりて、敵襲ひ來りて、かこみせめけるに、館の内に兵二人いでゝ、命ををしまぎ戰ひて、皆追ひ返してけり。いとふしぎに覺えて、日頃こゝに物し給ふとも見えぬ人々の、かくたゝかひし給ふは、いかなる人ぞと問ひければ、年來たのみて、朝おゝ〳〵めしつる土おほねらにさぶらふと、いひてうせにけり。ふかく信をいたしぬれば、かゝる德も有りけるにてそ。

〔語解〕筑紫。九州諸國の總稱なり○押領使。一國内の二三郡と代々支配するものなり。國司とは別なり○土ほねは。土大根なり○日頃こゝにものし給ふとも見ぬ人々。平常この館にはしもせぬ人々と云ふ意義あり○朝なゝ〳〵めしつる。毎朝食せられきとなり○うせにけり。其形と失ひたりとなり。

書寫の上人は、法華讀誦の功つもりて、六根清淨にかなへる人なりけり。旅のかりやにたちいられけるに、豆のからをおきて、豆を煑ける音の、つぶ〳〵となるを聞給ひければ、うとからぬおのれらしもうめらしく、我をば煑て、からきめを見する物かなといひけり。たかるゝ豆がらの、はら〳〵とおる音は、我心より

する事かは。やかるゝは、いかばかりたへがたけれども、力なき事なり。かくおぼ恨み給ひそとぞ聞えける。

〔語解〕書寫上人。性空が事なり。平安城の人、從四位ノ上橘善根が子なり。播广ノ國書寫山に入りて、菩提心を發し、六根清淨を得て、庵を西洞に結ひて此に居たり。故にこの名あり○六根清淨にかなへる人。法華經を誦讀する功德によりて耳、目、鼻、舌、身、意の六根清淨になりたる人とあり○れのれらしも。し字は、助辭なり。己れ等もなり○我心おらする事かは。「おは」は反語なり。豆がらの心おらする事にはあらずとなり。

元應の清暑堂の御遊に、玄上はうせしころ、菊亭大臣、牧馬を彈じ給ひけるに、座について、先柱をさぐられたりければ、ひとつおちにけり。御ふところに、そくひをもち給ひたるにて、つけられにければ、神供の參るほどに、よくひて、とゆゑなかりけり。いかおる意趣か有りけん。物見けるきぬかづきの、よりてはなちて、もとのやうに、おきたりけるとぞ。

〔語解〕元應。後醍醐帝の御宇の年號なり○清暑堂の御遊。天皇陛下御一代に一度、大嘗會と行はせ給ふ時に、其御式はて丶後、清暑堂にて群臣に御酒肴と賜はり、御神樂あると云ふ○玄上はうせしころ。玄上は琵琶の名にて、其物のなくなりし頃なり○牧馬を彈じ。牧馬も琵琶の名

なり○先柱とさぐられたり。柱は、琵琶の柱あり。琴にて「ことぢ」と云ふと同一の物なり。所作とあさんまへに、まつ柱と氣づかひて、此と調べられしなり○神供。神膳なり○ことゆゑあるのりけり。異なる故もなのりけりとあり○きぬのつき。衣被あり。節會などに衣と被きて、物見る女房と云ふあり。

名を聞くより、やがて面影は、おしはからるゝてゝちするを、見る時は、又かねて思ひつるまゝの顔したる人てそおけれ。昔物語をきゝても、此のごろの人の家の、そてはどにてぞ有りけんと覺え、人も今見る人の中に、おもひよそへらるゝは、誰もかく覺ゆるにや。又いかかるをりぞ、たゞいま人のいふ事も、目に見ゆる物も、我が心のうちも、かゝる事のいつぞや有しかと覺えて、いつとはおもひ出でねども、まさしくありしてゝちするは、われぱかりかく思ふにや。

〔語解〕　やがて。頓の字と書く、直ちにの義なり○のねて。前もつて己れが推量しての義なり○そこはど。其處程にて、今の俗語のろれ丈など云ふに同じ○まさしく。確かにと云ふに同じいやしげなるもの、居たるあたりに、調度のおほき、硯に筆のおほき、持佛堂に佛のおほき、前栽に石草木のおほき、家のうちに子孫のおほき、人にあひて詞のおほき、願文に作善おほくかきのせたる。多くて見ぐるしからぬは、文車の文、塵

塚のちり。

〔語解〕　いやしげなるもの。下品にあるものを云ふあり○居たるあたりに。居座の邊と云ふなり○調度。諸道具と云ふなり○前栽。は庭園と云ふ○願文に作善おほくかきのせたる。願文は、來世安樂界に往生せんことを、佛菩薩に願ふ文章あり。作善は、願文に、或は佛像と供養し、或は佛の經典を書き寫すことなどと、書つらぬると云ふなりと、文段抄に見えたり○文車の文。書籍と積みたる車あり。

〔文法〕　何々多き、某々多き、云々多くと續けたるは、疊句法の一格なり。

世にかたりつたふる事、まことにあいなきにや。おほくは皆虚言あり。あるにも過ぎて、人は物をいひなすに、まして年月すぎ、境もへだゝりぬれば、いひたきまゝに語りあらして、筆にもかきとゞめぬれば、やがて又定りぬ。道々の物の上手の、いみじき事など、かたくなあるる人の、その道しらぬは、そゞろに神のごとくにいへども、みちしれる人は、更に信もおこさず、おとにきくと、見る時とは、何事もかはるものあり。

〔語解〕　あいなきにや。愛なきなり、正實なる事のみ語り傳へては、愛も面白みもあらぬにやあちむの意なり○あるにも過て。事實のあるにも過きてといはむが如くにて、兎角人は誇大に語

り過すとなり○境もへだゝりぬれば。遠國或は他境を云ふなり○道々。諸藝能の道なり○ゐたゞくなる人。頑固なる愚物と云ふなり○おとにきく云々。風評に聞くと、實際見る時とはなり。かつあらはるゝをもかへり見ず、口にまかせていひちらすは、やがてうきたることゝ聞ゆ。又我しも、まことしからぬは思ひながら、人のいひしまゝに、鼻のはどおでめきていふは、その人の虚言にはあらず。げに〳〵しく所々うちおほめき、よくしらぬよし出て、さりながら、つま〳〵あはせてかたる虚言は、おそろしき事なり。わがため、面目あるやうにいはれぬるそらごとは、人いたくあらがはず。皆人の興ずるそらことは、ひとりさもなかりし物をといはんも、詮なくて聞ゐたるほどに、證人にさへゐされて、いとゞ定りぬべし。とにもかくにも、そらごとおほき世なり。たゞ常にある、めづらしからぬ事のまゝに心得たらん、よろづたがふべからず。

〔語解〕 ゐつあらはるゝ。かつは、且の字と充つ。ろのまゝまた其の上といはむ義にも通ふべし。あらはるゝは、虚言のあらはれ行くと云ふなり○うきたることゝ聞ゆ。うきたることは、浮言にて、即ち是れ虚説なり○鼻のほどおでめきて。鼻の邊とうごめゐしてなり○げに〳〵しく。

實々しくなり○つま〳〵。節々端々なり○わがため面目あるやうにゐたるうらごと。我がために眞目に實際らしく語る虚言なり○證人にさへゐされて。其物語の虚實としるべき人の、僞とも思はで、聞居たれば、さては無レ疑と、皆人思ふ故に、やがて其證據人にさへ、取なされて、彼虚言の物がたり、いよ〳〵まことに定まりぬべしと、文段抄に見えたり。

下ざまの人の物語は、耳おどろくことのみあり。よき人は、あやしきことを語らず。かくはいへど、佛神の奇特、權者の傳記、さのみ信ぜざるべきにもあらず。これは、世俗の虚言をねんごろに信じたるも、をこがましく、よもあらじなどいふも詮なければ、大方はまことしくあひしらひて、偏に信ぜず、又うたがひ嘲るべからず。

〔語解〕 耳おどろくことのみなり。其語ることの奇怪なると云ふなり。論語述而篇に、子不レ語二怪一力亂一神一とあり。是等の事とも憚ある談と云ふにや○神佛の奇特。佛經にふほく載する所の佛菩薩鬼神の奇特神變、又は神明の不測なることと云ふなり。と野槌に見えたり○權者の傳記。權者とは、神佛ゐどの人間に化身したるものと云ふ。其人の傳記とゐり○とこがましく。嗚呼とゝ書くなり○よもあらじ。左樣にはよもあるまじとなり。

蟻のごとくにあつまりて、東西にいそぎ、南北にはしる。高きあり。賤きあり。老

たるあり。若きあり。行く處あり。歸る家あり。夕にいねて、朝におく。いとおむ所、何事ぞや。生をむさぼり、利をもとめてやむときおし。身をやしおひて何事をかまつ。期する所、たゞ老と死とにあり。其の來ること速にして、念々の間にとゞまらぬ。是をまつあひだ、何のたのしみかあらん。まぢへるものは、これをおそれぬ、名利におぼれて、先途の近き事をかへり見ねばなり。おろかなる人は、又これを悲しぶ。常住ならんことを思ひて、變化の理をしらねばなり。

〔語解〕 蟻のごとくにあつまりて。柳子厚云く、蜂一附蟻一合と、爰にては人間の名利と欲して、北方に集まると形容せるなり○生をむさぼり。生命と永く保持せんと欲して、利と求むると云ふなり○念々の間。一念一念の間あり。老死の急速に來ると云ふなり○何のたのしみのある。死滅老病の、其身と離れず迫れるに、只管名利と欲しても、何の樂のある。一向樂あるまじきなり○先途 冥途の義あり○變化の理。生死病老の變化の理、人間に附着すると云ふなり。

〔文格〕 東西に急ぎ、南北に走る」は疊句法の精格、高きあり。賤しきあり」老たるあり。若きあり。行く處あり。歸る家あり」は連對法の一格なり。

つれ〴〵わぶる人は、いかなる心なるらん。まぎるゝかたおく、たゞひとりあるのみこそよけれ。世にしたがへば、心の外の塵にうばはれてまどひやすく、人

にまじはれば、言葉よその聞に隨ひて、さながら心にあらぬ。人にたはふれ、物にあらそひ、一度はうらみ、一度はよろこぶ。そのこと定れる事なし。分別みだりにおこりて、得失やむ時おし。まどひの上に醉へり。醉の中に夢をなす。走りていそがはしく、はれてわすれたること、人皆かくのごとし。

いまだ誠の道をしらぬとも、緣をはなれて身を閑にし、事にあづからぬして、心をやすくせんこそ、しばらくたのしぶともいひつべけれ。生活、人事、伎能、學問等の諸緣を、やめよとこそ、摩訶止觀にも侍れ。

〔語解〕 つれ〴〵わぶる人。徒然にて不愉快に思ふ人なり○心外の塵にうばはれて。濁世に從へば、清潔なる心も、外界の塵に奪はれて、心と迷はすとなり○分別みだりにおこりて。とやせんのくやせんと、分別さま〴〵に起りてなり○まことの道。生死出離のさとりと云ふなり。一說には、諸法實相の理なりともあり○緣とはなれて。生活人事等の諸緣と云ふなり○摩訶止觀。天台大師の觀心の事と書たる經典あり。摩訶は佛者にて大の義なり。

〔文格〕 世にしたがへば、心の外の塵にうばゝれて云々」、人にまじはれば、言葉よその聞に隨ひて云々」は、疊句法の粗格あり。人にたはふれ、物にあらそひ」は、對句法の精格、一度はうらみ、一度はよろこぶ」は、疊句法の精格なり。また此の章の句造りすべてめでたし。心と附けてよ

みあぢはふべくゐむ。但し生活以下の語は人世の本情と缺くといふべし。

世のおぼえ、はなやかなるあたりに、なげきも、よろこびもありて、人おほく行きとぶらふ中に、ひじり法師のまじりて、いひ入れたゞずみたるこそ、さらずとも見ゆれ。さるべき故ありとも、法師は、人にうとくてありなん。

〔語解〕世のおぼえはなやかなる。時と得て權勢榮花を極むる人なり○行きとぶらふ中に。人の多く行き訪ふ中になり○ひじり法師。世濁脫絕の聖法師なり○いひ入れたゞずみたるころ。人と以て家内へいひ入れて、自身は門外にたゞずみ居たるなり○さらずとも見ゆれ。左樣にせずともよからるべく思はるゝなり○さるべき故ありとも。行き訪ふべき故ありともなり。

世の中に、そのころ、人のもてあつかひぐさに、いひあへる事、いろふべきにはあらぬ人の、よくあないしりて、人にも語り聞せ、とひきゝたるこそうけられね。殊にかたほとりなる、ひじり法師かとぞ、世の人の上は、わがごとく尋ねきゝ、いかでかばかりは、知りけんと覺るまでぞ、いひちらすめる。

〔語解〕人のもてあつかひぐさに。ぐさは種なり。人の云ひはやらかす言ひ草といふ義なり○いろふ。立入るなり、卽ち其事に關係するなり○あない。案内なり○うけられぬ。承引せられぬ義なり○かたほとり。片田舍すなはち邊陲の義なり○いひちらすめる。云ひ散らす樣なりと

云ふ義なり。

今やうの事どものめづらしきを、いひひろめもてなすこそ、又うけられね。世にことふりたるまで、さらぬ人は、心にくし。いまさらの人などのある時、こゝもとにいひつけたることぐさ、ものゝ名など、心得たるぞ、かたはしいひかはし、目見あはせわらひなどして、心さらぬ人に、心えぞおもはする事、世ふれぞ、よからぬ人の、かならずある事なり。

〔語解〕今やうの事どものめづらしき。當世風の浮說などの新奇なるを云ふなるべし○うけられぬ。承引せられぬなり○世にことふりたるまで云々。事件の既に世の舊聞になるまで知らぬ人はなり○いまさらの人。更に初めて交はれる人なり○ことぐさ。言種なり○ものゝ名。人の知らざる物の異名なるべし○心得たるぞ。心得知りたる朋友同志なり。

何事も、入りたゝぬさましたるぞよき。よき人は、さりたる事とて、さのみさりがほにやはいふ。片田舍より、さし出でたる人とぞ、萬の道に心得たるよしの、さしいらへはすれ。されば、世にはづかしきかたもあれど、みづからもいみじと思へるけしき、かたくなおり。よくわきまへたる道には、必ず口おもく、とはぬかぎりは、いはぬこそいみじけれ。

〔語解〕何事も、入りたたぬ云々。何事によらず、其事に立入り考りがはせぬはよきとなり○よき人はしりがほにやはいふ。物心得たる善人は、左程知り顔に云はぬとなり。「やは」は反語なり○さしいらへはすれ。差出て答をするなり。俗に云ふ、出すぎなり○口おもく。人より問はれぬ限りは、もの云はぬ容あり。

人ごとに、我が身にうとき事をのみぞこのめる。法師は、兵の道をたて、夷は、弓ひくすべしらぬ。佛法しりたるきそくし、連歌し、管絃をたしなみあへり。されど、おろかなるおのれが道よりは、猶人に思ひ侮られぬべし。法師のみにあらぬ、上達部、殿上人、かみざまでおしなべて、武をこのむ人おほかり。百たび戰ひて、もゝたび勝つとも、いまだ武勇の名を定めがたし。其の故は、運に乘じてあたをくだく時、勇者にあらぬと云ふ人なし。兵つき、矢きはまりて、つひに敵に降らぬ、死をやすくして後、始めて名をあらはすべき道なり。いけらん程は、武にほこるべからぬ。人倫に遠く、禽戰にちかきふるまひ、其の家にあらぬは、好みて益なき事なり。

〔語解〕我身にうとき事をのみぞ好める。其身に相適らざる藝道ばかり好むとなり○法師は兵の道をたて。法師は、其身に似合ぬ兵道を修行すとなり○夷は云々。夷は、爰にては、田舎の武

士のことゝ見るべし。田舎武士は弓を弾く術と知らず。反て連歌を作り、管絃などの道を嗜み好むとなり○上達部。三位以上の公卿を云ふなり○殿上人。四位五位六位まで、昇殿を聽されし人をすべて云ふなり○あたをくだく。敵をくだき勝を占むるを云ふなり○敵にくだらず。敵に降參せぬ義なり○其家にあらずは。武士の家にあらざればなり。

屏風障子などの繪も、文字も、かたくなゝる、筆やうして書きたるが、見にくきよりも、宿のあるじのつたなく覺ゆるなり。大方もてる調度にても、心おとりせらるゝ事は有りぬべし。さのみよきものを、もつべしとにもあらぬ。損ぜざらんためとて、品おく見にくきさまにもなし、めづらしからむとて、用なき事どもをそへ、わづらはしく、このみなせるを云ふなり。ふるめかしきやうにて、いたくことゞくしからぬ、つひへもなくて、物がらのよきがよきなり。

〔語解〕こたくなゝる、筆やうして書たるが。こたくなるは、頑僻の文字と書く意なれど、爰にては、下手の義にとるべし。下手に見にくゝ書きたるはなり○宿のあるじ。其屏風や障子と持てる家の主人なり○品なく。下品なり○用なきことどもしろへ。無用の裝飾となし添へてなり○つひへもなくて。入費もこのゝらずなり○物がらのよき。品物の躰のよきなり。

〔文格〕損ぜざらむ爲とて云々、めづらしからむとて云々」は、疊句法の粗格なり。

うすものゝ表紙は、とく損ずるがわびしきと、人のいひしに、頓阿が羅は、上下はつれ、螺鈿の軸は、貝おちて後こそ、いみじけれと申侍りしこそ、心まさりて覺えしか。一部とある草子あどの、おおじやうにもあらぬを、見にくしといへど、弘融僧都が、物をかならず一具にとゝのへんとするは、つたなきもののする事あり。不具なるこそよけれといひしも、いみじくおぼえしなり。

すべて何も皆、ことのとゝのほりたるは、あしき事あり。おのこたるを、さて打おきたるは、おもしろくいきのぶるわざなり。内裏つくらるゝにも、かならず作りはてぬ所を、のこす事なりと、或人申侍りしなり。先賢のつくれる内外の文にも、章段のかけたる事のみぞ侍る。

〔語解〕 うすものゝ表紙。うすき羅紗絹あどにて作りたる、卷物の表紙あり○とく損ずるはわびし。疾く損ずるは悲しく殘念となり○頓阿。二條爲世卿の門弟にて、世に和歌の四天王と呼ばれし一人あり。井蛙抄、草菴集、續草菴集あどの著書あり○螺鈿の軸。卷物の軸に貝とすり入れたるを云ふなり○弘融僧都。權少僧都弘融なり。文保二年十月於二押小路亭一隨二少一將爲仲入道一受二古今和歌集訓說一云々と、野槌に見えたり○おのこしたると、さて打おきたるは。仕殘したると其儘になして捨ておきたるはとなり。打は、助勢辭なり○内外の文。内典外典なり。佛經をば

内典といひ、儒書百家の文とは外典と云ふとぞ。

竹林院ノ入道左大臣殿、太政大臣にあがりかり給はんに、何のとゞこほりかおはせんなれども、めづらしげなし。一上にて、やみなんとて、出家し給ひにけり。洞院ノ左大臣殿、此の事を甘心し給ひて、相國の望おはせざりけり。亢龍の悔ありとかやいふことを侍るあり。月みちてはかけ、物さかりにしてはおとろふ。萬の事、さきのつまりたるは、やぶれにちかき道なり。

〔語解〕 竹林院ノ入道左大臣殿。西園寺公衡公あり。竹林院の左府と號す○一上。左大臣の事あり○洞院左大臣殿。從一位左大臣實雄公あり。西園寺太政大臣公經公の息なり○甘心。心に甘く思ふ義なり○亢龍の悔あり。亢龍とは、天上へ高く昇り極まれる龍あり。のぼり極まれば、降るより外なし。故に悔あるあり。易經に云く、亢ノ龍有レ悔、盈不レ可レ久也。又曰く、亢ノ龍有レ悔與レ時偕極、亢之爲レ言也、知レ進而不レ知レ退、知レ存而不レ知レ亡、知レ得而不レ知レ喪也。

〔文格〕 月みちてはこのけ、物さかりにしてはおとろふ」は、疊句法の粗格なり。

法顯三藏の天竺にわたりて、古鄕の扇を見てはかなしび、病にふしては、漢の食をねがひ給ひけることを聞きて、さばかりの人の、無下にこそ心よわき氣色を、ひとの國にて、見え給ひけれと、人のいひしに、弘融僧都、優に情ありける三藏

かなといひたりしてそ、法師のやうにもあらぬ、心にくゝおぼえしか。

〔語解〕 法顯三藏。釋法顯、姓は龔、平陽武陽の人なり。晉の隆安三年、天竺國に渡りし高僧なり○漢の食とねがひ。法顯が古鄉卽漢土の食なり○さばこのりの人の無下に云々。佛道と修行せんと欲して、遙々天竺まで渡りたる程の人にても、古鄉と慕ひ食物とねがひしは、無下心弱き子なるとと云ふ義なり○優に情ありける。いとすぐれてやさしくして、情ふかき三藏かなと、弘融がほめたる詞なり。

人の心、すなはおらねは、僞おきにしもあらぬ。されども、おのづから、正直の人などかなからん。おのれすなはならねど、人の賢を見て、うらやむは、世の常なり。いたりておろかなる人は、たゞ〳〵賢なる人を見て、これをにくむ。おはさなる利をえんがために、少しきの利をうけぬ、僞りかざりて、名をたてんとすとそしる。おのれが心に、たがへるによりて、此の嘲をなすにてありぬ。此の人は、下愚の性うつるべからぬ。いつはりて、小利をも辭すべからぬ。

かりにも愚を學ぶべからぬ。狂人のまねとて、大路をはしらば則狂人あり。惡人のまねとて、人をとろさば、惡人なり。驥をまなぶは驥のたぐひ。舜をまなぶは舜の徒なり。僞りても賢をまなばんを賢といふべし。

〔語解〕 すなはならねば。廉直おらねばあり○いたりてあろあるる人。至極愚なる人あり○おはきある利とえんが爲めに少しきの利とうけず。これ至愚の人の賢人の行爲とうしる言葉なり。○下愚の性うつるべからず。論語陽貨篇に云く、上智與二下愚一不レ移。云ふ意は、下愚の人は、天性しるが故に、如何とも上智に移し變ふること能はずとあり○驥をまなぶは云々。驥は千里の馬なり。尋常の馬にして千里を行うんとするは、是れ卽ち驥の類なりとなり○舜とまなぶは云々。舜は虞の天子なり。資性孝順にして、爲政の道に通せしゆば、堯帝擧げてこれに天子の位を讓れり。

〔文格〕 狂人のまねとて云々、惡人のまねとて云々」は、對句法の精格、驥とまなぶは驥のたぐひ、舜とまなぶは舜の徒」も同格なり

惟繼中納言は、風月の才に富める人なり。一生精進にて讀經うちして、寺法師の圓伊僧正と、同宿して侍りけるに、文保に三井寺やかれし時、坊主にあひて、御坊をばてら法師ととそ申しつれど、寺はなければ、今よりは、ほうしととそ、申さめといはれけり。いみしき秀句なりけり。

〔語解〕 惟繼中納言。平氏にて西洞院の嫡流あり。元德二年、權中納言に任せられ、建武二年文章博士に任せられ、曆應五年、七十六歲にて出家す○風月の才。詩歌の能才と云ふなり○寺法師

三井寺の僧と云ふなり○文保。花園天皇御宇の年號ぶり○坊主。圓伊僧正と云ふ。

下部に、酒のまする事は、心すべき事なり。宇治に住みけるをのこ、京に具覺坊とて、なまめきたる遁世の僧を、こじうとなりければ、常に申しむつびけり。或時、迎に馬をつかはしたりければ、遙なるほどなり。口つきのをのこに、まづ一度せさせよとて、酒を出したれば、さしうけ〳〵、よゝとのみぬ。太刀うちはきて、かひ〴〵しければ、たのもしく覺えて、めしぐして行くほどに、木幡のほどにて、奈良法師の兵士、あまたぐしてあひたるに、此の男、たちむかひて、日暮れにたる山中に、あやしきぞ、とまり候へ、といひて、太刀をひきぬきければ、人も皆太刀ぬき、矢はげなどしけるを、具覺坊、手をすりて、うつし心なく醉ひたる者に候ふ。まげてゆるし給はらんといひければ、各あざけりて過ぎぬ。此のをとこ、具覺坊に逢ひて、御坊はくちをしき事を給ひつるものかな。おのれ醉ひたること侍らぜ、高名仕らんとするを、ぬける太刀、むなしくおし給ひつることゝいかりて、ひたぎりにきりおとしつ。さて山たちありと、のゝしりければ、里人おこりて出であへば、我こそやまだちよといひて、走りかゝりつゝ、きりまはりけ

るを、あまたして、手あはせ打ふせて、しばりけり。馬は血つきて、宇治大路の家にはしり入りたり。淺ましくて、をのこどもあまた、はしらかしたれば、具覺坊は、くちなし原に、によびふしたるを求め出でて、かきもてきつ。からき命いきたれど、腰さり損せられて、かたはになりにけり。

〔語解〕下部。下郎又は下劣の者なり○心すべき事なり。注意すべき事の義なり○なまめきたる。風流優雅の義なり○こじうと。小舅なり○申しむつび。言交しむつましくする義なり○遙なるほどなり。宇治までは遠路なりと也○口つきの男。馬の口と取る男なり。卽ち馬遣男なり。○一度せさせよ。酒を一盃せさせよの義なり○さしうけ〳〵。盃と受け〳〵なり「さし」は助勢辭なり○よゝとのみぬ。今の俗語にて「ドク〳〵」と飲みぬなり○矢はげ。弓に矢とつがへたることなり○うつし心なく。現心の文字と書く。本心なき義なり○ひたぎりに。猶豫もせず具覺坊をきりにきりたりとなり○山だち。山賊なり○くちなし原。梔原にて木幡の邊にあり○によびふし。によびは呻吟にて、うめき俯して居たりとなり○のきもてきつ。舁ぎ持て來れるなり。

或石、小野ノ道風がかける、和漢朗詠集とて持ちたりけるを、ある人、御相傳うくる事には侍らじなれども、四條ノ大納言撰ばれたる物を、道風かゝん事、時代やたがひ侍らん。おぼつかなくこそといひければ、さ候へばこそ、世にありがたき

物には侍りけれとて、いよ〳〵秘藏しけり。

〔語解〕 小野道風。從四位、上木工頭道風朝臣なり○和漢朗詠集。上下二卷あり。日本人と漢人との詩歌を撰び集めたるによりて此名あり○四條大納言。藤原公任なり○時代やたがひ侍らん道風の死去したる年は、公任の生れたる年なり○ふぼつこのなく。請合がたしとなり。

奥山に、猫またといふものありて、人をくらふなると、人のいひけるに、山からねども、これらにも猫のへあがりて、ねこまたになりて、人とる事はあるものをと、いふ者ありけるを、何阿彌陀佛とかや連歌しける法師の、行願寺の邊に有りけるが聞きて、ひとりありかん身は、心すべきことにこそと、思ひけるころしも、ある所にて、夜ふくるまで連歌して、たゞひとりかへりけるに、小川のはたにて、音にきく猫また、あやまたぬ、あしもとへ、ふとよりて、やがてかきつくまゝに、頸のほぞをくはんとす。肝心もうせて、ふせがんとするに力もなく、足もたゝぬ、小川へころび入りて、たすけよや。ねこまたよや〳〵と、さけべば、家々より、松ぞもともして、はしりよりて見れば、このわたりに、見しれる僧なり。とはいかにとて、川の中よりいだき起したれば、連歌のかけものとりて、扇小箱など、懷に持

たりけるも水にいりぬ。希有にしてたすかりたるさまにて、はふ〳〵家に入りにけり。かひける犬の、くらけれど、主を忘りて、とび付たりけるとぞ。

〔語解〕 猫また。一に金花猫と云ふ。猫の年ふりて毛の黄色になれるものなり。ばけて婦女老小とかぶろうして煩はすと、野槌に見えたり○何阿彌陀佛。時宗の名に、何あみ、こあみ、といふあり。其名のたしこのならぬと云ふなり。連歌師の名なり。○行願寺。小川の草堂の名なり○ふとより付て。突然寄り來り付てなり○連歌のこのけもの。當時は連歌の善惡と稱する爲に賭ものとせしなり○希有。稀なる義なり。俗に奇妙と云ふ語にもあたるべし。

〔文格〕 何阿彌陀佛とこのやの下に、云ふの含語ありて直に連歌へ聯續する格あり。とかやには聯續格なると斷止格なるとあり。思ひ誤るべからず。

大納言法印の、めしつかひし乙鶴丸、やすら殿といふものを知りて、常に行通ひしに、ある時、出で歸りきたるを、法印いづくへ行きつるぞと問ひしかば、やすらどの〳〵がりまかりて候ふといふ。其のやすら殿は、男か法師かと、又とはれて、袖かきあはせて、いかゞ候ふらん頭をば見候はぬと、答申しき。おどか、頭ばかりのみ見ざりけん。

〔語解〕 大納言法印。天台宗にては、俗性とえらび、兒のこのみと別るなり。俗性よからねば、衆徒

の數に入れざるあり。之に依りて、剃髮の時、俗性のいやしからざるとば、若き間には、公家衆の入道に比して、官職とあたふる事あり。此法印は、公家の比叡山に上りて、入道せし故に、始めの官と呼びて、このくいふなり。中將あれば、中將法印あゞ、云ふなりと、隱解に見えたり○私のきわはせて。耻ぢ入りたる躰と云ふなり。

赤舌日といふ事、陰陽道には、沙汰おきてとなり。昔の人、これをいまゝ。此の頃おにものゝいひ出でて、いみはじめけるにか。此の日ある事、末とはらぬといひて、其の日いひたりし事、したりしてと、かおはゞ、えたりし物はうしおひつ。くはたてたりし事おらゞといふおろかおり。吉日を撰びて、おしたるわざの、すゑとはらぬを、かゞへてみんも、ひとしかるべし。その故は、無常變易のさかひ、ありと見るものも存せゞ。始ある事も終おし。志はとげゞ、望は絶えゞ、人の心不定おり。物みな幻化おり。何事かしばらくも住する。此の理をしらざるなり。吉日に惡をなすに、必ゞ凶おり。惡日に善を行ふに、必ゞ吉なりといへり。吉凶は人によりて、日によらゞ。

〔語解〕赤舌日。通書大全に赤口日忌二會レ客證レ事賣買一とある赤口日と云ふおり○陰陽道。陰陽ノ頭は、天文、暦數、風雲、氣色の奏聞の事と掌ると、職員令に見えたり。即ち是なり○末とはら

ず。行末物ごと成就せざる義なり○無常變易のさかひ。ものゝ常住に定りたる事おき境界おれば、日の吉凶も定むまじきといはんとて也と、文段抄に見えたり○幻化なり。まぼろしの如く、物みな變化してきはまりなきと云ふなり。

〔文格〕志はとげず、望は絶えず」吉日に惡となそに云々、惡日に善と行ふに云々は、皆對句法の精格なり。

ある人、弓いる事をならふに、もろ矢をたばさみて、的にむかふ。師のいはく。初心の人、ふたつの矢をもつことなかれ。あとの矢をたのみて、初の矢は等閑の心あり。毎度たゞ得失なく、此の一矢に定むべしと思へといふ。

わづかに二ッの矢、師の前にて、ひとつをおろかにせんと思はんや。懈怠の心、みづからしらゞといへども、師これを知る。此のいましめ、萬事にわたるべし。

道を學する人、夕には朝あらんことを思ひ、朝には夕あらん事を思ひて、かさねて念ごろに修せんことを期す。況んや、一刹那のうちにおいて、懈怠の心あることを知らんや。なんぞたゞ今の一念において、たゞちにする事のはおはたかたき。

〔語解〕 もろ矢とたばさみて。一手にて矢二すぢと手に挾みもつ事と云ふなり。左右二手ともろ手といふも同じ○初心の人。初めて其道に志せる人と云ふなり○道を學する人。佛にあれ、儒にあれ、其道を學修する人なり○一刹那。たゞ一念の間と云ふなり。俗に「トタン」と云ふに當るべし○なんぞたゞ今の一念に云々。何ぞ其れ一念の起るに隨ひて、たゞちに道を學び修むることの、爲し難きぞと詰問するなり。

〔文格〕 夕には朝あらん事を思ひ、朝には夕あらん事を思ひ」は、對句法の精格なり。おろかにせんと思はんや。」懈怠の心ある事を知らんや」おぞは、例の反語法なり。

牛を賣る者あり。買ふ人、明日そのあたひをやりて、牛をとらんといふ。夜の間に牛死ぬ。かはんとする人に利あり、うらんとする人に損ありと、語る人あり。これを聞きて、かたへある者のいはく。牛のぬし、誠に損ありといへども、又大なる利あり。其の故は、生あるもの、死のちかきことを知らざること、牛既にしかなり。人また同じ。はからざるに牛は死し、はからざるに主は存せり。一日の命、萬金よりもおもし。牛のあたひ、鵝毛よりもかろし。萬金を得て、一錢を失なはん人、損ありといふべからぞといふに、皆人嘲りて、其の理は牛のぬしに、かぎるべからぞといふ。

〔語解〕 此段は人欲に溺れて自己の樂を忘れ、徒に他の財を求むることと、牛の賣買なる問答に取り設けて說けるなり○かたへなる者。傍に居る者なり○一日の命萬金よりもおもし。大智論に云く、設滿二世界一寶。無レ有レ直二身命一○鵝毛よりもかろし。鵝は鴨の屬なり。其羽毛は甚輕きものなりとぞ。司馬遷、仕少卿に報ずる書に云く、人固有二一死一或重二於太山一或輕二於鵝毛一○

〔文格〕 かはんとする人に利あり、うらんとする人に損あり」は、對句法の精格、はからざるに牛は死し、はからざるに主は存せり」は、對句法の精格、一日の命萬金よりも重し。牛のあたひ鵝毛よりも輕し」は、對句法の粗格なり。

又いはく。されば、人、死をにくまば、生を愛すべし。存命のよろこび、日々にたのしまざらんや。おろかなる人、この樂を忘れて、いたづからはしく、外のたのしびをもとめ、此の財を忘れて、あやうく他の財をむさぼるには、志みつことなし。いける間、生を樂まぞして、死に臨みて、死をおそれば、此の理あるべからぞ。人みな生をたのしまざるは、死をおそれざる故なり。死をおそれざるにはあらぞ。死の近き事をわすれゝなり。もし又、生死の相にあづからぞといはゞ、實の理を得たりといふべしといふに、人いよ〳〵あざける。

〔語解〕 されば人死をにくまば生を愛すべし。さやうに人は死を憎むひとならば、生をば一向に

愛すべしとなり○いたづこのはしく。煩はしくと云ふに同意義なり○此財。人の生命と云ふあり○他の財。金銀あるどの財寶と云ふなり○生死の相にあづからず。生も樂まず、死とも惱まず、哀樂の實相に關係せずとの義なり○實の理。佛法に云ふ、生死老病の實理と知りたるものとなり。

常盤井ノ相國、出仕し給ひけるに、勅書を持たる北面あひ奉りて、馬よりおりけるを、相國後に、北面あにがしは、勅書をもちながら、下馬し侍りし者なり。かはどの者、いかでか君につかふまつり候ふべきと、申されければ、北面をはなたれにけり。勅書を、馬の上ながら、さゝげて見せ奉るべし。おるべからぞとぞ。

〔語解〕常盤井ノ相國。太政大臣實氏公あて、西園寺ノ流あり○勅書。勅書と黄紙に書くことは、唐の太宗の貞觀年中より初まれるありとぞ○北面。北面に二種あり。上北面下北面是なり。上北面は諸大夫なり。下北面は五位六位譜代の侍を云ふなり○かはどのもの。これしきの故實とも知らぬ者となり○はあたれけり。免職なり。

箱のくりかたに、緒をつくる事、いづかたにつけ侍るべきぞと、ある有職の人に、尋ね申侍りしかば、軸につけ、表紙につくる事、兩説なれば、いづれも難なし。文の箱は、おほくは右につく。手箱は軸につくるも、當の事ありと仰せられき。

〔語解〕箱のくりかた。箱の蓋を半月の如くにくりたる所と云ふなり○有職の人。故實とよく

辨へ居る人なり○いづれも難なし。何れにしても苦しからずとなり。

めなもみといふ草あり。くちはみにさゝれたる人、かの草をもみて付けぬれば、則ちいゆとなんっ見きりておくべし。

〔語解〕めなもみ。蒼耳又は地菘の文字と書く。本草綱目に、蒼耳治二毒死并射工等傷一。嫩葉一握研取レ汁和二温酒一而灌レ之將レ滓厚罨二傷處一とあるこれなり○くちはみ。蝮なり○いゆとなん。平愈するとなり。

其の物につきて、其の物を費しそこなふ物、かぞをしらぞあり。身に虱あり、家に鼠あり、國に賊あり、小人に財あり、君子に仁義あり、僧に法あり。

〔語解〕其物につきて、其物を費しそこなふ云々。其物より生れ出でゝ、反りて其物を害そるものとなり○小人に財あり。小人は財を好みて、遂に其が爲に其身を失ふとなり○君子に仁義あり。比干が殷の紂王を諫めて、それが爲に胸を割かれ。伯夷叔齊が、武王を諫めて其言納られず、遂に仁義を全ふせんが爲に、首陽山に餓死したるが如きをさすなり。是れ卽ち仁者が、仁の爲に其身を滅したる好適例なり。

たふときひじりの、いひおきたる事を、書きつけて、一言芳談とかやなづけたる、草子を見侍りしに、心にあひて覺えし事ども。

〔語解〕 たふときひじり。其德の尊き佛家の聖僧なり○一言芳談書名なり○心にあひて覺えし事。兼好の心に適ひてめでたく覺えし事あり。

一。爲やせまし、せぞやあらましと、おもふ事は、おほやうは、せぬはよきあり。

〔語解〕 ゑやせまし云々。爲せやうの、爲せまじきことと決し難く思ふ事は、寧爲さゞると以て可とすとなり。

一。後世を思はん者は、糂汰瓶一ッも持つまじき事あり。持經本尊にいたるまで、よきものをもつ、よしなき事あり。

〔語解〕 糂汰瓶。糂汰は、ヌカ味噌なり。瓶は、つぼ、又は瓶子なり○持經。我所持の經の義なり○本尊。我が朝夕、拜し奉つる佛躰なり。

一。遁世者は、ふきにてとかけぬやうを、はからひて過ぐる、最上のやうにてあるなり。

〔語解〕 遁世者。世俗と遁れて僧侶になりなむ者なり○ふきにてとかけぬやうといなき時にもこと缺ぬ樣に、平常儉約して貯蓄しおくと云ふなり○最上のやうにて。最もよき仕ねの義なり。

一。上臈は下臈になり、智者は愚者になり、德人は貧人になり、能ある人は、無能にあるべきなり。

〔語解〕 上臈下臈。臈は、出家する者、髮を剃り授戒してより、一夏九旬の間、勤行すると臈と云ふと、野蠻に見えたり。然れども爰にては、上位下位の者と云ふ義と、解すを以て當ると知るべし。

一。佛道をねがふといふは、別のことなし。いとまある身になりて。世のことを心にかけぬを、第一の道とす。

此の外もありし事どもおほえぞ。

〔語解〕 世のことを心にかけぬ。諸緣を捨て、諸願を棄て、世俗の外に超然としてあるべきと、第一義と爲すべしとなり。

堀河相國は、美男のたのしき人にて、そのことゝなく、過差をこのみ給ひけり。一子、基俊卿を、大理になして、廳務おこたりなくふはれけるに、廳屋の唐櫃、みぐるしとて、めでたく作りあらためらるべきよし、仰せられけるに、此の唐櫃は、上古より傳りて、其の始をしらぞ、數百年をへたり。累代の公物、古弊をもちて規摸とす。たやすくあらためられがたきよし、故實の諸官等、申しければ、其の事やみにけり。

〔語解〕堀河相國。岩倉内府具實公の一男、基具公なり。○美男のたのしき人。美男にて美麗と樂む人あり○過差とこのみ　驕者と好む義なり○大理。檢非違使別當の唐名あり○唐櫃。訴訟の文書と入れ置く箱あり。韓櫃とも書けり○めてたく云々。結構に作替へむと也○故實の諸官。古事と調査考證する諸官人なり。

久我相國は、殿上にて、水をめしけるに、主殿司、土器を奉りければ、まがりをまゐらせよとて、まがりしてぞ、めしける。

〔語解〕久我相國。太政大臣雅實公なり○水とめしける。水を飲まんと取寄しにあり○土器。土燒の器物あり。「かはらけ」と讀むべからず○まがり。貝と磨きて作りたる水呑の用具なり。

ある人、任大臣の節會の内辨を、つとめられけるに、内記のもちたる、宣命をとらせて、堂上せられにけり。きはまりなき失禮なれども、たちかへりとるべきにもあらず、思ひわづらはれけるに、六位外記康綱、衣かつきの女房をかたらひて、彼の宣命を持せて、忍びやかに奉らせけり。いみじかりけり。

〔語解〕任大臣の節會。大臣に任せらるゝ時の節會なり○内辨。諸の節會には、内辨、外辨とあり。江家次第に云く、第一、大臣於二承明門内一辨二修諸事一故云二内辨一。第二、大臣於二門外一辨二修諸事一故云二外辨一○内記。詔勅宣命と草する役なり○宣命。其人を大臣に任せらるゝ由の宣命る

り○思ひわづらはれける。心配せられけるなり○衣かつきの女房とかたらひて。衣被の女官と頼みてなり。

尹ノ大納言光忠入道、追儺の上卿をつとめられけるに、洞院ノ右大臣殿に、次第を申請られければ、又五郎男を、師とするより外の才覺、候はじとぞ、のたまひける。彼の又五郎は、老いたる衛士の、よく公事になれたる者にてぞ有りける。

〔語解〕尹ノ大納言。尹は彈正ノ尹なり○追儺の上卿。追儺と行はせらるゝ時の奉行と云ふあり。追儺の事は、上に述べたり○洞院右大臣殿。右大臣實素公なり○衛士。衛門及ひ兵衛府の火とたくものなり。

近衛殿、著陣したまひける時、ひざつきを忘れて、外記をめされければ、火たきて候ひけるが、まづひざつきをめさるべくや候はんと、しのびやかに、つぶやきける、いとをかしかりけり。

〔語解〕著陣。節會などに陣の座に着このるゝ事なり○ひざつき。小半疊のうすべりなり。名目抄には膝突と書けり○外記とめされければ。外記と召させられければなり○いとをかしのりけり。歎賞の詞あり。

大覺寺殿にて、近習の人ども、なぞ〳〵をつくりて、とかれける處へ、くすし忠

守、參りたりけるに、侍從大納言公明卿、我が朝の者とも見えぬ、忠守かおと、なぞ〳〵にせられけるを、唐瓶子ととき、わらひあはれければ、はらたちて退出でにけり。

〔語解〕 大覺寺殿。後宇多院、嵯峨の大覺寺に御隱居ありしゆゑに、おくは申し奉るなり○おぞ〳〵。謎なり○くすし忠守。正四位下典藥頭忠守ゐり。「くすし」は醫又は藥の義ゐり○唐瓶子。平忠盛の異名なり。忠守と忠盛と訓ゐひ同じきにより、おくは云へるものゐるべし。

荒たる宿の、人めおきに、女のはゞかる事あるところにて、つれ〴〵とてもりたるを、ある人、とぶらひたまはんとて、夕月夜の覺束おきほどに、忍びて尋ねおはしたるに、犬のことゞ〳〵しく、とがむれば、げす女のいで〻、いづくよりぞと云ふに、やがて案内せさせて、入りたまひぬ。心ぼそげなるありさま、いかで過すらんと、いと心ぐるし。あやしき板敷に、しばしたちたまへるを、もてしづめたるけはひの、わかやかなるして、こあたへといふ人あれば、たてあけ所せげゐる、遣戸よりぞ、入りたまひぬる。内のさまは、いたくすさまじからぬ、心にくゝ火はあおたにはのかおれど、もの〻きらなど見えて、俄にしもあらぬにはひ、いとなつかしうすみなしたり。門よくさしてよ。雨もぞふる。御車は門のしたに、御供の人は、そこ〳〵にといへば、こよひぞやすきいはぬべかめると、打さゝめくも忍びたれど、程おければほのきこゆ。さて此のほとの事ども、こまやかにきてえ給ふに、夜ふかき鳥もなきぬ。こしかたゆくすゑかけて、まめやかなる御物語りに、此たびは、鳥もはなやかなる聲にうちしきれば、明はなるゝにやと聞き給へど、夜ふかく、いそぐべき所のさまにもあらねば、少したゆみたまへるに、ひましろくなれば、わすれがたき事などいひて、たち出でたまふに、梢も庭もめづらしく、青みわたりたる卯月ばかりのあけぼの、艶にをかしかりしを、おぼし出でて、桂の木のおはきなるが、かくるゝまで、今も見おくり給ふとぞ。

〔語解〕 はゞかる事あるころ。世間と憚ることにて、物忌などの時ゐり○とふらひ。訪ひ尋ぬる義なり○つれ〴〵とこもりゐたる。徒然にて籠居したる義なり○げす女。下子女にて今いふ下婢なり○あやしき板敷に。見ぐるしく荒れたる板敷なり○もてしづめたるけはひのわかやかなる。ものなれて、しとやかなる、氣色したる若き女の聲してなり○たてあけ所せげゐる。戸のたてあけの至りて、所狹さを云ふなり○いたくすさまじからず。甚もの淋しくもあらずして

となり○俄にしもあらず。俄のに態と焚きたる香にあらず、常々たく空香の匂なり○こよひぞやすきいはぬべのめる。今宵は心安く、熟睡して寢ねらるゝあらむとの義あり○夜ふのくいろくべき所のさま云々。人めを憚のる處ところ、明けぬ程にと急きても歸るべけれど、人目あき所あれば、あのぬ心に任せて、猶少したゆみいたるなりとの意なりと、文段抄に見えたり○ひましろく。夜明くれば透間〳〵のあのくあると云ふなり○おぼし出。思ひ出してなり。

北の屋かげに、きえのこりたる、雪のいたうてはりたるに、さしよせたる車のながえも、霜いたくきらめきて、有明の月さやかなれども、くまなくはあらぬに、人ばなれなる、御堂の廊になみ〳〵にはあらぬと見ゆる男、女となげしにしりかけて、物がたりするさまこそ、何事にかあらん。つきすまじけれ。かぶしかたちなど、いとよしと見えて、えもいはぬにほひの、さとかをりたるこそ、をかしけれ。けはひあるどは、つれ〴〵きこえたるも、ゆかし。

〔語解〕 北の屋かげ。家屋の北陰と云ふなり○ながえ。車の轅なり○くまなくはあらぬに。滿くらき限もなきにあらぬとなり。○なみ〳〵にあらずとみゆる男。尋常の人とは見えぬ男なり○なげしにしりかけて。下ゝ狀に尻とかけてなり○つきすまじければ。話の語り盡ぬ義なり○かぶしかたち。頭髮容貌の義あり○けはひなどはつれ〴〵聞えたるも。男女の物語りの、はし〳〵折々に、聞えてあれどなり。

〔文格〕 物語するさまこそ、何事にかあらん。つきすまじけれ」は、二重に調ふる格にて、即係結法の第二格と第三格となり。此の格の事、詞の玉緒に委しく云へり。

高野の證空上人、京へのぼりけるに、細道にて、馬に乘りたる女の、行きあひけるが、口ひきける男あしくひきて、聖の馬を、堀へおとしてけり。聖いとはらあしくとがめて、こは希有の狼籍かな。四部の弟子はよな、比丘よりは、比丘尼はおとり、びくにより、優婆塞はおとり、うばそくより、優婆夷はおとれり。かくのごとくの、うばいなどの身にて、比丘を堀へ蹴入れさする、未曾有の惡行なりといはれければ、口ひきの男、いかにおはせらるゝやらん。えこそ聞きしらねといふに、上人なほいきまきて、何といふぞ。非修非學の男と、あらゝかにいひて、きはまりなき放言しつと、おもひける氣色にて、馬ひきかへして、にげられにけり。たゞとかりける、いざかひなるべし。

〔語解〕 口ひける男。馬の口をとれる男なり○狼籍。狼の物と蹈みちらしたるが如く、亂りがはしき義なり○四部の弟子はよな。比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷と四部の弟子と云ふ。又四衆とも云ふなり○優婆塞。僧男なり○優婆夷。俗家の女にして、五戒を持てる者を云ふなり○

えこう聞しらぬといふ。聞えても其道理が譯りえぬとなり○放言。惡口を云ひ放つ義なり。女の物いひかけたる返事、とりあへぞよきほどにする男は、ありがたきものとぞ。龜山院の御時、しれたる女房ども、わかき男達のまゐらるゝ毎に、時鳥や聞きたまへると問ひて、心見られけるに、なにがしの大納言とかや、數ならぬ身は、えきき候はぞと答られけり。堀河ノ内大臣殿は、岩倉にて聞きて候ひしやらんと、おほせられたりけるを、是は難なし。かぞならぬ身、むつかしなど、定めあはれけり。

〔語解〕しれたる女房ども。ざれたる宮仕の女房達なり○數ならぬ身。人の數にもあらぬ身となり○堀河内大臣殿。太政大臣基具公の男、具守公なり○是は難なし。是れは非難する所あらじとなり。

〔文格〕ありがきものとぞの下に覺もるの含語ありて、係結法第二格と調ふる文勢なり。次章のおふしたつべしとぞも同じさまなり。

すべて、をのてをば、女にわらはれぬやうに、おふしたつべしとぞ。淨土寺前ノ關白殿は、をさおくて、安喜門院のよくをしへまゐらせ給ひける故に、御詞などの

よきぞと、人の仰せられけるとかや。山階ノ左大臣殿は、あやしの下女の見奉るも、いとはづかしく、心づかひせらるゝとてそ、おほせられけれ。女のなき世なりせば、衣紋も、冠も、いかにもあれ、ひきつくろふ人も侍らじ。

〔語解〕すべてとのこ。總して男子とばなり○おふしふたつべし。生ひ育てわぐべしとなり○淨土寺前ノ關白殿。九條師教公なり○安喜門院。後堀河院の女御、淨土寺太政入道公房公の女なり○山階左大臣殿。山階官雄公なり○あやしの下女。身分賤しき下劣の女なり。

かく、人にはぢらるゝ女、いかばかり、いみしき物ぞと思ふに、女の性は、皆ひがめり。人我の相ふかく、貪欲甚しく、物の理をしらぞ。たゞまよひの方に、心もはやくうつり、詞もたくみに、くるしからぬことをもとふ時はいはぞ、用意あるかとみれば、又あさましき事まで、とはぞがたりにいひ出す。ふかくたばかりかざれる事は、男の智惠にもまさりたるかとおもへば、その事あとより、あらはるゝをしらぞ。すなはならぞして、つたなきものなり。其の心に隨ひてよく思はれん事は、こゝろうかるべし。されば、何かは女のはづかしからん。もし賢女あらば、それも物うとく、すさまじかりおむ。たゞまよひをあるじとして、かれに

したがふ時、やさしくも、おもしろくも、覺ゆべき事なり。

〔語解〕女の性は皆ひがめり。婦人の性はみな僻みゐて正直ならずとゐう○人我の相ふこのく。人は人、我は我と、へだて思ひて、人とこのろくし、我と重くする心と云ふ也、と文段抄に見えたり○くるしのらぬ事。語りても難ゐき事なり○用意あるこのとみれは。遠慮あるかと見れはと同意義なり○其心に隨ひて。このやうに惡智多き女の心に隨ひてゐり。

寸陰をしむ人なし。これよくしれるか。おろかなるか。愚にして、おてたる人のためにいはゞ、一錢かろしといへども、これをかさぬれば、まづしき人を、とめる人とおす。されば、商人の一錢を惜む心、切ゐり。刹那おぼえぎといへども、これをはこびてやまされば、命を終る期、忽にいたる。されば道人はとほく日月を惜むべからぎ。たゞ今の一念、むなしく過ぐる事ををしむべし。

もし、人來りて、我が命あすは必ぎ失はるべしと、告げしらせたらんに、けふのくるゝあひだ、何事をかたのみ、何事をかいとなまん。我等がいけるけふの日、なんぞ其の時節にことならん。

〔語解〕寸陰をしむ人なし。寸陰は一寸の時間ゐり。淮南子云く、聖人不レ貴二尺之璧一而重二寸之陰一時。難レ得而易レ失也○これよくしれるか。おろこのゐるこの。寸陰の惜むべきことを知りて惜まざるこの、將愚にして其惜むべきを知らざるこの。何れにしても、人々多くは、光陰を惜まじとなり○道人。後世を大事として、已に修行におもむきし人なりと、文段抄に見えたり○もし人來りて云々。是より又、たとへを設けて、嚴しく無益の事をなすべこのらざるを、敎へたる說なり。

〔文格〕何事をこの頼み、何事をこの營まん」は、疊句法の精格ゐり。

一日のうちに、飲食、便利、睡眠、言語、行歩、やむことをえぎして、おほくの時をうしなふ。其のあまりの暇、いくばくならぬうちに、無益の事をなし、無益のことをいひ、無益の事を思惟して、時をうつすのみゐらぎ、日を消し、月を亘りて、一生を送る。尤も愚なり。謝靈運は、法華の筆受ゐりしかど、心常に、風雲の思を觀せしかは、惠遠白蓮の交を、ゆるさゞりき。

しばらくも、これなき時は、死人におなじ。光陰なにのためにか、をしむとならば、內に思慮なく、外に世事なくして止ん。人はやみ、修せん人は修せよとなり。

〔語解〕便利。大小便と云ふなり○思惟。たゞ思ひめぐらすと云ふなり○謝靈運。宋の人ゐり幼にして穎悟なり。文章の美は、顏延之と江左第一たり。故に世に顏謝と以て文章の二大家と稱す○法華の筆受。法華經の飜譯者ゐり。天竺の梵語と唐土にて通事すると飜譯といふ。ろれを唐文字に書き寫すを筆受とぞ稱ふとゐり○風雲のおもひを觀せしのは。名山名水に逍遙して、

第百九段

其景色を詩賦に吟するを云ふなり○惠遠白蓮のまじはりをゆるさゞりき。謝靈運は、心雜起の者ありとて、惠遠が蓮社の友に交はることを許さゞりきとなり。惠遠は晋の人、大乘法師を號せし名僧なり○しばらくもこれなき時は。暫時も光陰を惜む心なき時はなり。

〔文格〕 無益の事をなし、無益の事をいひ、無益の事を思惟し」は、對句法の一格、日を消し月を亘り」内に思慮なく、外に世事なく」は、皆對句法の精格なり。

高名の木のぼりといひしをのて、人をおきてゝ、たかき木にのぼせて、梢をきらせしに、いとあやうく見えしほどは、いふ事もおくて、おるゝ時に、軒長ばかりになりて、あやまちすな。心しておりよと、言葉をかけ侍りしを、かばかりになりては、飛びおるゝともおりなん。いかにかくいふぞと、申侍りしかば、其の事に候ふ。めくるめき、枝あやうきほどは、おのれがおそれ侍れば、申さゞ。あやまちは、やすき所にありて、かならゞ仕る事に候ふといふ。あやしき下臈なれども、聖人のいましめに、かゝへり。鞠もかたき所を蹴出してのち、やすくおもへば、必ゞ落ると侍るやらん。

〔語解〕 高名の木のぼり。よく木に登る名と取りたるものと云ふなり○人とかきてゝ云々。かゝてゝは、掟なり。高名の木登の男、其弟子に木に登ることと教へて、木に昇らせて其の梢と切

ちせし時にとなり○あやうまちすな。これ高名の男の詞にして、過て落るなと云ふなり○のばこのりになりて。これほどに僅なる高さにありて也○めくるめき。眼眩なり○あやしき下臈なれども。賤しき卑下のものなれどもなり○鞠もかたき所と云々。鞠と蹴るにも、其の蹴難き所をけとげて、今は容易なりと心とゆるす時は、落す事あれば注意すべしとなり。

〔文格〕 侍るやらん」は、侍るとにやあらむの略語なり。此の一章賤業者の事を云ひて、貴人の遊事に及したるいとめでたし。

双六の上手といひし人に、其の行をとひ侍りしかば、かたんとうつべからゞ、まけじとうつべきなり。いづれの手か、とく負けぬべきと案じて、その手をつかはゞして、一めおりとも、おそくまくべき手に、つくべしといふ。道をしれる教、身を治め、國をたもたん道も、又かかなり。

〔語解〕 其行。双六に勝と占むべき手段と云ふなり○勝たんとうつべからず。双六に勝と取らんと、うつべからず、勝たんとすれば、我とたのみて敵をあなどる心、おこればなり○道と云れるとしへ。道理と知れる教にて、即ち大學に身治而後家齊。家齊而後國治。とあるが如く愼獨勤行の道と云ふなり。

〔文格〕 此の一章も又、遊戯上の双六の事より、治國平天下の訓誡に及したる、いと〳〵詞つゞ

まやに旨廣しと云ふべし。

圍棊、双六てのみて、あかしくらす人は、四重五逆にも、まされる惡事とぞおもふと、あるひじりの申ありし事、耳にとゞまりて、いみしく覺え侍る。

〔語解〕 あかしくらす人。空しく日と費やす人なり○四重。五戒の内に於て飲酒と除き、他の殺、盗、婬、妄と云ふ○五逆。五逆罪なり。父を殺し、母を殺し、阿羅漢を殺し、和合僧を殺し、佛身血と出す等と云ふあり。

明日は、遠國へおもむくべしと、きかん人に、心をづかになすべからんわざを、人いひかけてんや。俄の大事をもいとゝおゝみ、切になげくこともある人は、他の事をきゝ入れず、人の愁喜をもとはず。とはずとて、おどやとうらむる人もなし。されば、年もやう〳〵たけ、病にもまつはれ、況んや、世をものがれたらん人、又これにおなじかるべし。

〔語解〕 いひかけてんや。言ひかけやうこゝい云ひけらるまじの義なり○俄の大事ともいとなみ切になげく事もある人は。これもたとへなり○人の愁喜ともとはず。他人に愁喜ありとも、就て問ひ見舞ぬとなり○年もやう〳〵たけ。年も漸く長じの義なり。

人の儀式、いづれの事か、さりがたからぬ。世俗のもたしがたきに隨ひて、これ

を必とせば、ねがひもおほく、身もくるしく、心のいとまもなく、一生は雜事の小節にさへられて、むなしくくれぬん。日暮れ、途遠し、吾生既に蹉跎たり。諸緣を放下すべき時なり。信をも守らじ。禮義をも思はじ。此の心をも得ざらん人は、物ぐるひともいへ。うつゝなし、情なしとも思へ。そしるともくるしまじ。譽むともきゝ入れじ。

〔語解〕 人の儀式。人の此世にありての百事なり○いづれの事かさりがたからぬ。世間の事、苟も其心にかけなば、去りすつべきものあるまじきとあり○もたしがたき。默止し難きなり○小節。些小なる。節義なり○さへられて。支障せられて也○蹉跎たり。たゞらひなゞして、時と失ふの意義を含む詞なり○諸緣を放下すべき時なり。妻子の緣は固より、其他一切の諸緣と投げ捨つへき時ぞとなり○物ぐるひ。狂人の義なり○うつゝなし。本心ゐき義なり。

〔文格〕 信とも守らじ。禮義とも思はじ」ろしるもくるしまじ。譽むとも聞入れじ」等、いづれも對句法の精格なり。

四十にもあまりぬる人の、色めきたる方、れのづから忍ひてあらんは、いかゞはせん。ことに打出て、男女の事、人のうへをも、いひたはるゝこそ、にげなく見ぐるしけれ。れはかた、聞きにくゝ、みぐるしき事、老人のわかき人にまじはりて、

興あらんと、物いひゐたる、數ならぬ身にて、世の覺えある人を、へだてなきさまにいひたる、まづしき所に酒宴てのみ、客人に饗應せんときらめきたる。

〔語解〕 色めきたる方。好色の事との義なり○ふのづゝら忍びてわらんはいとゞはせん。女色と好めども、自ら耐忍して居るは、しばらくもるしつべし。是れ人情の然らしむる所にして、如何ともしがたければとなり○たはるゝこそ。戯むるゝ事ころなり○にげなく見ぐるしけれ。老人の色欲の事を言ひ語るは、似合のらず見にくしとなり○ふはこのた。大躰の意義なり○世の覺えある人。高位高官の人なり○饗應。馳走なり。土佐日記などに「あるじす」とあるも同し。訓讀と字音との差あるのみ。

今出川のれはい殿、嵯峨へおはしけるに、ありす川のわたりに、水のながれたる所にて、さい王丸、御牛を追ひたりければ、あがきの水、前板までさゝとかかりけるを、爲則、御車のしりに候ひけるが、希有の童かな。かゝる所にて、御牛をば追ものかといひければ、おはい殿御氣色あしくなりて、おのれ車やらん事、さい王丸にまさりてえしらじ。希有の男なりとて、御車に頭をうちあてられにけり。この高名のさい王丸は、太秦どのゝ男、科の御牛飼ぞかし。

〔語解〕 今出川のれはい殿。西園寺太政大臣從一位實氣公の三男、從一位左大臣兼季公なり。菊亭と號す○ありす川。ありす川の字、有栖川又は有巣川ともかけり。共に山城國葛野郡にあり。前のは齋院のおはします本院の側にある小川にして、後のは、太秦より法輪へ至る道にある小河なり。この艸紙に嵯峨へおはしけるにとあれば、後のを稱すること、こゝには適へるに似たり○さい王丸。藤原信清公の牛飼人なり○あがきの水。牛の足搔の水なり。馬蹄三餘足一と文選の東都ノ賦にありて、蹄の字とあがくとよませたり○前板。車の前の板卽ち軾のことなり○爲則。今出川おはい殿の隨身の名なり○希有の童かな。希有は稀なる義なれど茲はけしからぬ意と見るべし。さて牛飼とつとむる者は、年老るまで丸額にて、髮を長くし童子の如くなる故、童とは云ふ事なり○太秦どのゝ男。こは內大臣信清公なり。坊門とも太秦殿とも稱せり。男は召仕の男の義なり○料の御牛飼。太秦殿の召料の牛飼となり。

此の太秦殿に待りける女房の名ども、一人はひざさち、一人はとつち、一人はうはら、一人はおとうしとつけられけり。

〔語解〕 太秦殿云々。昔は公家には、よき牛を養ひ置れつと見えたり。太秦殿は殊によき牛ともてあろび給ふ故にや。召仕はるゝ女房達までも、皆其名と牛になぞらへて付けられたり。さて、此に太秦殿の事を言出せしにより、以下其名のめづらしきとのきつらねたり○ひざさち。膝幸なり。幸はよき意なり。牛は膝の强きがよき故にのくぞいへる○とつち。特槌なり。特は

男牛なり。槌は太く丸く肥えたるといふゐり○はらはら。胞腹なり。牛は腹の大なるがよければ、はらはらとは名付けたりけん○ふとうし。乙牛なり。牛は後より生れたるがよけれは、乙牛とて貴ぶゐり。こは總て牛の强きと稱賛して付けたる名なるべし。

宿河原といふところにて、ぼろ〳〵れはくあつまりて、九品の念佛を申しけるに、外より入來るぼろ〳〵の、もし此の御中に、いろをし房と申すぼろやおはしますと尋ねければ、其の中より、いろをしてゝに候。かくのたまふは誰ぞと答へれば、しら梵字と申す者也。おのれが師、なにがしと申ふし人、東國にて、いろをしと申すぼろに、ころされけりと承りしかば、其人にあひ奉りて、恨申さばやと思ひて、尋申ゐりといふ。いろをし、ゆゝしくも尋ねおはしたり。さる事侍りき。てゝにて對面し奉らば、道場をけがし侍るべし。前の河原へまゐりあはん。あかして。わきざしたち、いづかたをも見つぎ給ふな。あまたのわづらひにおらば、佛事の妨に侍るべしといひ定て、二人河原に出あひて、心ゆくばかりにつらぬきあひて、共に死にゝけり。ぼろぼろといふ者、むかしはなかりけるにや。近世にぼろんじ梵字、漢字など云ひける者、其はじめゐりけるとかや。世をすて

たるに似て、我執ふかく、佛道をねがふに似て鬪諍をてとゝす。放逸無慙のありさまなれども、死を輕くして少しもなづまざるかたの、いさぎよくおぼえて、人のかたりしままにかきつけ侍るなり。

〔語解〕 宿河原、攝津の國に在り○ぼろ。暮露なり、梵論とも書く。虚無僧のこと也。○九品の念佛。彌陀念佛のこと也。九品とは彌陀の淨土の名也○恨申さばや。復讐せばやとの意也○道場。佛事を修むる場所といふ○あなゝしこ。おろれ多しといふやうの詞也○わきざしたち云々左右に侍り居るものといふ、諸請の字にして、卽ち弟子の義也。脇差太刀ゐを解するは誤也。いづかたをもは兩方を助勢したまふ勿れとなり○心ゆく。心のまゝ充分といふ義也○梵論字梵字漢字。是等がぼろ〳〵と云ふ者の、はじめゐりけると聞きたる事よとなり。また明惠上人のぼろ〳〵草紙といふ本には、暮ごとに油賣ありきて、暮といひける女の子ども、虚空坊阿彌陀坊などいひしもの、暮露のはじめゐりと見ゆ。○我執ふかく。執着の心ふかきと也。師匠の敵とわすれぬといふ○放逸無慙。ほしいまゝにして少しもはづる心なき也○なづまざる。拘泥せざる義也○いさぎよく。勇敢なる意也。

寺院の號、さらぬ萬の物にも名をつくる事、むかしの人はすてしも求ず、たゞありのまゝに、やすく付けゝるなり。此比はふかく案じ、才覺をあらはさんとし

たるやうに聞ゆる、いとむづかし。人の名もめあれぬ文字をつかんとする、益なき事あり。何事も、めづらしき事をもとめ、異説をこのむは、淺才の人のかならぬある事なりとぞ。

〔語解〕 さらぬ云々。さうあるぬ也。寺院の號ならぬ万物の名にもといへる意也○求ず。穿鑿して理窟ばりたる名を求ずと也○才覺。才識といはんが如し○異説あやしき説也○淺才。あさはかなる才智あり。

友とするに、わろき者七つなり。一つには、高くやんごとなき人。二つには、若き人。三つには、病おく身つよき人。四つには、酒を好む人。五つには、たけく勇める兵。六つには、虚言する人。七つには欲ふかき人。よき友三つあり。一つには、物くるゝ友。二つには、くすし。三つには、智慧ある友。

〔語解〕 此段に朋友に善悪あることといへるは、論語に益者三友、損者三友とあるに基づける也○高くやんごとなき人。高貴なる人といふ。高貴に交際とせむ者は、大方自ら諂ふことあるゆゑ也○わろき人。血氣さのんなるゆゑに、無分別のこともあるべければ也○病なく身つよき人。強壯無病の人は、多く寒暑飲食等につゝしむ心おく、放逸に流れ易きあり○酒と好む人。酒狂多し○たけく勇める兵。猛勇の兵士也。暴虎憑河の悔とのこす事あり○虚言。言語に信なき也○欲

ふかき人。利欲心のふかき人は、往々禍義を失ひて、その害朋友に及ぶことあり。論語に利に放して行へば、怨み多しといへり○物くるゝ友。友愛の心ふかければ、困窮の場合などに、財貨と通じて助けあふ友といふ○くすし。醫師也○智慧。智慧ある友はたがひに研磨のたすけあるべし。論語に多聞と友とするは益ありと見ゆ。その意といへるに似たり。

鯉のあつもの食ひたる日は、贅そゝけぞとなん。膠にもつくる物あれば、ねばりたる物にてそ。鯉ばかりてそ御前にてきらるゝものあれば、やんごとなき魚なり。鳥には雉さうおき物あり。雉、松茸おごは、御湯殿の上にかゝりたるも苦しからぬ。其外は心うき事なり。中宮の御方の御湯殿の上のくろみ棚に、雁の見えつるを、北山の入道殿の御覽じて、歸らせ賜ひて、やがて御文にて、かやうの物、さおがら其姿にて。御棚にゐて候ひし事、見おらはぬゆゑにてそ。おご申されたりけり。かゝしき人の、さぶらはぬゆゑにてそ。おご申されたりけり。

〔語解〕 鯉のあつもの。鯉魚の羹なり○そゝけず。みだれざる也○膠云々。魚と膠に作ると鰾と云○御前。天子の御前あり○やんごとなき魚あり。龍門にのぼるも此鯉あり。孔子伯魚と生みたまひしとき、魯公よりおくられしも此鯉なり。周詩にも鱉を炮にし鯉と膾にすといひ、また豈に其れ魚と食ふとならば、必らず河の鯉のみならんやといへり。こゝにやんごとなき魚なり

と書けるもことわりあり○鳥には雉さうなき。鳥のうちにては、雉の左右にならぶものなしとほめたる義なり。○松茸。松蕈なり○御湯殿。浴室のことにあらず、湯にて物をもで、或はゆぶきゐどする殿にして、料理の間といはんが如し○中宮。後深草院の中宮にて、東二條院と申せり。常盤ノ井相國實氏卿の御女なり○くろみ棚。膳棚なり。ぬりて色とつくるゆゑにくろいふあり。○北山入道殿。西園寺の實氏卿なり。卽ち中宮の父あり○さながら。ろのまゝなり○はのゝしき人、故實と知れる確としたる人といふ。

〔文格〕そゝけずとなむの下に云ふなる、ねばりたる物にころの下にあればならめ、さふらはぬゆゑにころの下にあれの含語あり。これすなはち省筆法なり。

鎌倉の海に、かつをと云ふ魚は、彼のさかひにはさうなき物にて、此比もてあすものなり。それもかまくらの年よりの申侍りしは、此魚、おのれら、わかゝりし世までは、はかゝしき人の前へ出る事侍らざりき。頭は下部もくはせ。きりてすて侍りしものなりと申き。かやうの物も、世の末になれば、上さまゝでも入たつわざにてそ侍れ。

〔語解〕鎌倉。相模の國に在り○かつを。鰹魚なり。また松魚とも書けり○彼さかひ。彼境地なり。鎌倉と指していふ○さうなき。無雙のものと賞美するなり○入たつ。貴人の前にもろなへら

るとなり。

〔文格〕鎌倉の海にのに字、下に文脈のゝる所なし。これはた例の省筆法にて、このにの下に、產ずるとの住めるとのいふ詞を含めて、聯續せしむべき格なるべし。

唐の物は、藥の外は、おくとも事かくまじ。書どもは、此國におほくひろまりぬれば、かきもうつしてん。もろてしぶねのたやすからぬ道に、無用のものどものみどりつみて、所せくわたしもてくる、いとおろかなり。遠き物を寶とせぞとも、又得がたき貨をたふとまぞとも、文にも侍るとかや。

〔語解〕唐。唐宋などいふ時代の唐にあらず、支那の昔と指していふ○藥。當時支那より輸入せし藥品は、龍腦麝香牛黃等の類にして、我國土に產せぬものなり○所せく。塲所も狹しとする程の義にして、仰山または澤山といはんが如し○遠き物と寶とせず。書經旅獒篇に、不レ寶二遠物一則遠人格と見もるより來れるにや○得がたき貨。老子に不レ貴二難レ得之貨一、使二民不レ爲レ盜とあるによれるあらむ。

〔文格〕所せくわたしもてくるの下には。辭含めたり。

やしおひかうものには馬牛、つおぎくるしむるこそいたましけれど、なくてかなはぬものあれば、いかゝはせん。犬はまもりふせぐつとめ、人にもまさりたれ

は、必あるべしされど家でとにあるものおれば、ことさらにもとめかはぞともありおん」。

〔語解〕 やしなひのうものには馬牛。周禮六畜の注に、獸可レ畜者牛馬羊犬豕雞と見ゆ○犬は守りふせぐ。續高僧傳に、犬爲二防畜一。蘇東坡云畜レ犬以防レ盜○家ごとにある。孟子に雞鳴狗吠相聞而達二乎四境一とあり。

その外の鳥獸、すべて用おきものなり。走る獸は、檻にとめ、くさりをさゝれ。飛鳥は翅をきり、籠に入られて、雲をこひ、野山をおもふ、愁止時おし。其おもひ、身にあたりて、忍ひがたくば、心あらん人、是をたのしまんや。生をくるしめて、目をよろこばしむるは桀紂が心なり」。

〔語解〕 檻。或は圈に作る。字彙に圈養畜之閑と見ゆ。論語に虎兕出二於柙一とある所の註に、柙檻也、貯二虎兕一之器也とあり○其おもひ我身にあたり。籠鳥繫獸のくるしみを、我が身上にあてゝおもひくらべなば、之れと忍びてたのしむまじきとの意也○桀紂。夏桀殷紂ともに、殘忍無道の王者なり。

王子猷が鳥を愛せしは、林にたのしぶを見て、逍遙の友としき。とらへくるしめたるにあらぞ。凡めづらしき禽、あやしき獸、國に育はぞとそ文にも侍るなれ。

〔語解〕 王子猷。名は徽之、子猷はうの字、王羲之の子也。晉に仕へて黃門侍郎たり○逍遙。游息の義也。莊子逍遙游の注に逍遙、優游自在ノ貌と見ゆ○めづらしき禽やしき獸。書經旅獒ノ篇に珍禽奇獸不レ育二于國一とあり。

人の才能は、文あきらかにして、聖の教をしれるを第一とす。次には、手かく事、むねとする事はなくとも、是をならふべし。學問にたよりあらんためなり。次に、醫術を習ふべし。身を養ひ、人をたすけ、忠孝のつとめも、醫にあらぞは有るべからぞ。次に、弓射、馬に乘ること、六藝に出せり。必是をうかゞふべし。文武醫の道、まことにかけてはあるべからぞ。これを學ばんをば、いたづらなる人といふべからぞ。次に、食は人の天なり。よく味を調しれる人、大なる德とすべし。次に、細工、萬の要おほし。此の外の事ども、多能は君子のはづる所なり。詩歌にたくみに、絲竹に妙なるは、幽玄の道、君臣これをおもくすといへども、今の世には、これをもちて世を治る事、漸くおろかなるに似たり。金はすぐれたれども鐵の鉢おほきにしかざるが如し。

第百廿三段

〔語解〕 人の才能。才は才智也。能は藝能也○墨の敎。四書六經の道といふ○手のく事。文字を書くこと也○むねとする事なくとも。筆道を專要とするほどになくとも也○醫術。醫者の技術也○忠孝のつとめ。君に忠義に、親に孝行となすこと也。伊川先生曰病臥ニ於牀一委ニ之庸醫一比ニ之不慈不孝ニ事レ親者不レ可レ不レ知レ醫と小學に見也○六藝。禮樂射御書數といふ○食は人の天なり。書經に夫食爲ニ人天一農爲ニ政本一とあり。また史記酈食其の傳にも、王者以ニ民人一爲レ天而民人以レ食爲レ天と見ゆ。食は生命と保維するものもろかくいへり○細工。種々の細工とよくする也。○多能は君子のはづるところ。論語子罕ノ篇に、孔子の吾少也賤。故多ニ能鄙事一君子多乎、哉、不レ多也とある語より來れるならむ○絲竹。管絃也○幽玄の道。幽微玄妙の道也○君臣これとかもくすれたれど。この詞は、詩歌管絃にたとへたり○鐵の益おほき。彼の文武醫食細工などにたとへていへり。

無益のことをなして、時をうつすを、おろかなる人とも、僻事する人ともいふべし。國のため、君のために、止ことを得ぎして、なすべき事おほし。其のあまりのいとま、幾ならぎ、おもふべし。人の身に止むことを得ぎして、いとなむ所、第一に食物。第二に、さる者。第三に居る所なり。人間の大事、此の三にすぎぎ。飢ぎ。

第百廿四段

寒からぎ。風雨にをかされぎして、閑に過すを樂とす。たゞし、人皆病あり。病にをかされぬれば、其の愁しのびがたし。醫療をわするべからぎ。藥をくはへて、四の事求得ざるをまづしとす。此の四かけざるをとめりとす。此の四の外をもとめいとなむを驕とす。四の事儉約ならば、いづれの人かたらぎとせん。

〔語解〕 無益のこと。衣食居醫などの外の事といふ○四の事、儉約ならば。儉約はつゞまやかなり。衣食居醫の四つに事ゝかけぬほどならばと也。

第百廿五段

是法法師は、淨土宗にはぢぎといへとも、學匠をたてぎ。たゞ明暮念佛してやすらかに、世を過すありさま、いとあらまほし。

〔語解〕 是法法師。この法師の傳は詳ならず。作者部類に念阿の直弟也とあり。新千載の雜部と、新後拾遺の秋部とに、この法師の歌とのせたり○淨土宗にはぢず。淨土一宗の學問にはづる所なしと也。○學匠。たてず。人の師匠たる門戸をたてぬ也○あらまほし。是法法師のやうに誰もありたしと也。

人におくれて、四十九日の佛事に、或聖を請じ侍りしに、說法いみじくして、みな人涙をながしけり。導師歸りて後、聽聞の人ども、いつよりもとに、けふは

たふとく覺え侍りつると感じあへりし返事に、或者の云ふ。何とも候へ、あれはど唐の狗に似候ひなんうへはといひたりしに、あはれもさめて、をかしかりけり。さる導師のはめやうやはあるべき。

〔語解〕 説法いみじく。聖僧の説教は甚尊のうりしさま也○導師、法事の上首となりて、人を導く僧也。要覽曰十住斷結經曰號二導師一者令二衆生類一示其正道一故華首經云能爲レ人説二無生死道一故名二導師一○唐の狗。狆也、つねに涙と流してあるゆゑ、この僧のみづから涙と流して、説教しけるさまと、のく諧謔にいひし也○あはれもさめて。説教のありがたのうりし心もさめてと也○はめやうやはあるべき。左樣なるはめやうは、ありはすまじきとあり。やはゝ反語の格なり。

又人に酒すゝむるとて、おのれまづたべて、人にしひ奉らんとするは、劔にて人をきらんとするに似たる事なり。二方に刄つきたる物なれば、もたぐる時、先我頭をきる故に、人をばえきらぬなり。おのれまづ酔ひてふしなば、人はよもめさじと申しき。劔にてきりこゝろみたりけるにや。いとをかしかりき。

〔語解〕 もたぐる、持擧くるの略語にて擡の字也○人はよもめさじ。人はよもや酒と飲むまじといふ意也○劔にてきり云々。劔にて我頭をきり、試みたることもあるにや。はなはだとのしくありきといたく貶したる語也。

〔文格〕 こゝろみたりけるにや」は、にやあらむといふ格なるを略して云へるなり。此の格もいと多し。應用して辨ふべし。

ばくちの負きはまりて、のこりなく、うちいれんとせんにあひては、うつべからぬ。たちかへり、つゞけて勝つべき時のいたれるとしるべし。其の時をしるを、よきばくちといふなりとある者申しき。

〔語解〕 ばくち。博奕なり○のこりなく。負けきはまりて、一錢ものこりなくと也○あひて。打いれて仕舞はむの場合に會してはといふ義なり○其時とする。ろの勝と負との時機を豫知するといふ。

あらためて益なき事は、あらためぬをよしとするあり。

〔語解〕 あらためて云々。この詞源は、魯人長府を作りしとき、閔子騫の依二舊貫一如二之何一何必改作といへるによるなるべし。無理に新規にせぬが反りて宜しとなり。

雅房ノ大納言は、才かしてく、よき人にて、大將にもなさばやとおぼしける比、院の近習なるひと、たゞいまあさましきことを見侍りつと申されければ、何事ぞととはせ給ひけるに、雅房鷹にかはんとて、いきたる犬のあしをきり侍りつるを、中垣の穴より見侍りつと申されけるに、うとましく、にくゝおぼしめして、日

來の御氣色もたがひ、昇進もし給はざりけり。さばかりの人、鷹をもたれたりけるは、思はぬおれど、犬の足は、跡おき事なり。虚言は不便おれども、かゝることをきかせ給ひて、にくませ給ひける、君の御心は、いとたふとき事なり。大かたいける物をころし、いためたゝかはしめて、あそびたのしまん人は、畜生殘害の類なり。萬の鳥獸、ちひさき虫までも、心をとめて、ありさまを見るに、子を思ひ、親をなつかしくし、夫婦をともおひ、ねたみ、いかり、欲おほく、身を愛し、命をゝしめること、ひとへに愚痴なる故に、人よりもまさりて甚し。彼にくるしみをあたへ、命をうばはんこと、いかでか、いたましからざらん。すべて一切の有情を見て、慈悲の心おかからんは人倫にあらぬ。

〔語解〕 雅房大納言　村上天皇第六の皇子、具平親王十代の孫、從一位太政大臣定實公の長子、正二位大納言雅房也○よき人。行跡の善き人と也○大將。職原抄云非二譜第之華族一者、更不レ任レ之、多是大納言中譜第上臈任レ之。又云任二大將一人、其職掌大略同二大臣一。只守二位次一着座許也。其外內外法不レ混二餘人一者也○おぼしける。思し召しけると也○院。この院は後宇多ノ院なるべし。此時院の御所、後深草、龜山、後宇多の三院おはします。たゞ雅房大納言の頃は、後深草、龜山は法皇ありし事なればなり○たゞ今おさましき事。御前に親しく仕へまつる近習のものが、雅房

大納言とねたみて讒奏する詞也○鷹にのはんとて云々。鷹に飼はんとて、犬を捕へて生おがら、ろの足の肉をきりろぐとなり○うとましく。後宇多院は、彼の讒言を事實と信じ給ひて、疎しく、にくゝ思召なされたるなり○昇進。官位官職をのぼせすゝむることなり○さばかりの人。さはぬに才賢なる人といふ意にて、雅房を指すなり○犬の足は跡なき事なり。犬の足を斬りしといふことは、跡方もおき僞なり○虚言は不便なれども。この讒言にあひ給へる雅房のためには、氣の毒なることなれども、とあり○君の御心云々。後宇多院、御仁心より無悲慈とにくませ給へるは、卽ち恩、禽獸にまで及ぶといふべきものにして、最もたふとくありがたきことゝはいへるなり○畜生殘害。鳥獸蟲魚のたがひにくひあひて、ろこるふといふ○子と思ひ。莊子に虎狼仁也とあり。さて猛惡なる虎狼さへ、父子相くらはず、況や他の禽獸蟲魚に於てをや○親をなつかしくし。羊の跪て乳し、烏の哺と反へす類あり○夫婦をともなひ。鴛鴦の比翼の類あり○ねたみ。詩經の周南に螽斯不二妬忌一とあり。されば他の蟲類にはねたみごゝろありと知るべし○いかり。蟹いかりて戈とわげ、螳螂の斧とたのむの類なり○一切の有情。すべて生物たる禽獸蟲魚と指すなり○人倫。君臣父子夫婦兄弟朋友の五倫といふ。

顏回は、志、人に勞をほどこさじとなり。すべて人を苦め、物をしひたぐる事、嗚呼き民の志をもうばふべからぬ。又いときなき子を、すかし、おどし、いひはづかしめて興ぜる事あり。おとおしき人は、まことならねば事にもあらぬ思へど、を

さなき心には、身にしみて、おそろしく、はづかしく、あさましき思ひ、誠に切なるべし。是をなやまして興ぜる事、慈悲の心にあらず。おとなしき人の、よろこび、いかり、かなしび、たのしむも、皆虚妄なれども、誰か實有の相に着せざる。身をやぶるよりも、心をいたましむるは、人をそこなふ事なほ甚し。病をうくるとも、おほくは心よりうく。外より來るやまひはすくなし。藥をのみて、あせをもとむるには、しるしなき事あれども、一旦はぢおそるゝ事あれば、必ず汗を流すは、心のしわざなりといふ事をしるべし。凌雲の額を書て、白頭の人となりしためしなきにあらず。

〔語解〕 顔回。字は子淵、孔子の高弟にして、亞聖と稱へられたる人なり○勞とはどこさじ。人に苦勞なることとさせまじきとなり。論語に子曰盡三各言二爾志一顔淵曰願無レ伐レ善無レ施レ勞と見ゆ○しひたぐる。虐の字にて、慘刻非道にあつこふ義なり○賤き民の志ともうばふべからず。論語曰匹夫不レ可レ奪レ志○すこしふどし。すこしは、賤の字義にて欺き誘ふ義なり。ふどしは威の字にて驚かし恐れしむる義あり○まことならねば云々。大人は事實にあらぬと知れば、ふどろこのざる意なり○これとなやまして興ずる事云々。この幼稚のものゝ心とあやまして、面白きことゝするは、慈悲の心にあらぬとなり○虚妄。むなしき妄念といふ○實有の相云々。喜怒哀樂、

すべて虚妄なるべけれど、實有の物と思へること、人心みな同じければ、幼稚のものゝ僞とまことゝ思へると、わらひはづかしむまじきとの意なり○身とやぶるよりも云々。嵇康養生論曰精神之於二形骸一猶二國之有レ君也神躁二於中一而形喪二於外一猶下君昏二於上一國亂上於下也故君子修レ性以保レ神安レ心以全レ身愛憎不レ接二於情一憂喜不レ留二於意一泊然無レ感而體氣和平。この意と引合せて知るべし○藥とのみて汗ともとむ。養生論曰夫服レ藥求レ汗或有レ弗レ獲而愧。情一集渙然流離○凌雲の額云々。三國志曰魏明帝立二凌雲觀一。誤先針レ榜。乃以レ籠盛二韋誕一轆轤引上書レ之去レ地二十五丈。既下。鬚髮皓然。還語二弟子一直絶二此法一。心をくるしむることと深きゆゑに、身とろこなふためしにこゝに引けるなり。

〔文格〕 ふうろしく、はづかしく、あさましき」よろこび、いかり、かなしび、たのしむ」等は、疊語法の一格なり。

物にあらそはず、己を枉て人にしたがひ、我が身を後にして、人を先にするにはしかず。萬の遊びにも、勝負を好む人は、勝ちて興あらん爲なり。おのれが藝の、まさりたることをよろこぶ。されば、まけて興なくおぼゆべき事、又しられたり。我が負けて人をよろこばしめんと思はゞ、さらにあそびの興あるべし。人にはいなく思はせて、我が心をなぐさまん事、德にそむけり。」むつましき中

にたはふるゝも、人をはかりあざむきて、おのれが智のまさりたる事を興とす。是又禮にあらず。されば、はじめ興宴よりおこりて、ながきうらみをむすぶ類おほし。是みなあらそひをこのむ失なり。人に勝らん事を思はゞ、たゞ學問して、其の智を人にまさらんと思ふべし。道を學ぶとならば、善にほこらぬ、ともからにあらそふべからぬと、いふことをしるべき故なり。大なる職をも辭し、利をもすつるは、只學問の力なり。

〔語解〕 物にあらそはず。論語曰君子無レ所レ爭、また曲禮曰在レ醜不レ爭〇おのれとまげて。我と枉げて人にしたがふの義あり〇我身を後にして人を先にす。坊記曰君子貴レ人而賤レ己先レ人而後レ己〇勝負を好む。奕棋の類なり〇されば。よろこぶの下にはの字ありて、さればの三字なき本あり〇はいなく。本意なくとなり〇德にそむけり。勝負事に勝ち、人に面目なく思はせて、我心をあぐさむは、仁の德に負くなり。されば勝負事はこのむべからず〇人とはのりあざむき。人の智慧を淺薄なりとおしはかりて、愚弄しての意なり〇是又禮にあらず。朋友の間の戲にても、智のまさりたると興とするは、禮義にあらぬとあり〇興宴より云々。酒宴の上のうりうめの戲なぞより、はじめて永く交際中絶し、遺恨を結ぶ事あるなり〇失。あやまちの義なり〇道を學ぶ。道は聖人の道といふなり〇善にほこらず。顏回曰願無レ代レ善と論語に見も〇大なる職

云々。職は官職なり。たとへば大臣大將の職位なぞは、みな人の希望する所なれども、この職位を辭して、賢を推し能に讓り利得をとらざるは、聖人の道を學びて、義理を知れる功による。即ち孟子の齊卿の位を辭し、萬鍾の祿をうけず。一百の兼金をとらざるの類なり。

貧しきものは財をもて禮とし、老たる者は力をもて禮とす。おのが分をしりて、およばざる時は、速にやむを智といふべし。ゆるさゞらんは、人のあやまりなり。分をしらずして、しひてはげむは、おのれがあやまりなり。まづしくて、分をしらざれば、やまひをうく。

〔語解〕 貧しきものは財をもて禮とし云々。曲禮に貧者不下以二貨財一爲レ禮老者不下以二筋力一爲レ禮とある語を轉用したるあり。句解曰く、此禮とすの下に、大抵世間の人みなかくのごとしといへる詞を加へて見れば、語脈分明なりと、此說はなはだよろし〇おのが分を知りて云々。貧者老人の已が財力筋力の分限を知りて、人に及ばざるときは、すみやかにやむると、智あるものとすなり〇ゆるさゞらん云々。貧者老人の自ら分限を知りて、やむる事をゆるさゞらん人は、我のあやまりにあらず、人のあやまりありとなり〇しひてはげむは云々。身分に應せぬ事を、しひてはげむは、その人の誤なり〇盜み。財力足らざるがゆゑなり。

〔文格〕 貧しきものは云々、老たる者は云々」まづしくして分を知らざれば云々、力おとろへて

分と知らざれば云々」は、疊句法の精格なり。

鳥羽の作道は、鳥羽殿たてられて後の名にはあらぬ。むかしよりの名なり。元良親王、元日の奏賀の聲、甚列勝にして、大極殿より鳥羽の作道まで聞えけるよし、李部王の記に侍るとかや。

〔語解〕鳥羽。山城國紀伊郡に在り○鳥羽殿。白河院應德三年に建てられたり。仙洞の御所なり○元良親王。陽成院第一の皇子○元日の奏賀の聲。奏賀奏瑞とて、朝拜の時あることにして、こは去年の芽出度嘉瑞どものありしと、國々より上言せば、ろれとしるしふきて、今日これと奏するなり。公事根源に見ゆ○大極殿。大極殿朝堂院正殿と八省院と名く。また八省院は、天子の臨朝卽位諸司吉覔所、これと中臺と曰ふと拾芥抄に云へり○李部王。醍醐天皇の皇子、式部卿重明親王なり。ろの親王のしるしたまふ記錄と、李部王記と申すなり。句解に曰く、式部を吏部といふ事は、法式とつゐさどるものと吏といふ故なり。行吏行理行李の字、皆通用すること音同じきゆゑなりて左傳正義に見えたり。

夜のおとゞは、東御枕なり。おはかた東を枕として、陽氣をうくべき故に、孔子も東首し給へり。寢殿のしつらひ、或は南枕常の事あり。白河院は、北首に御寢なりけり。北はいむ事なり。又伊勢は南あり。太神宮の御方を御跡にせさ

せ給ふこと、いかゞと人申しけり。たゞし太神宮の遙拜は、巽にむかはせ給ふ。南にはあらぬ。

〔語解〕夜のおとゞ。天子の御寢所あり○東御枕。禮記曰寢時東首○孔子も東首せし由あり。論語曰疾君視レ之東首加二朝服一施レ紳。朱注云東首以レ受二生氣一也。生氣とは卽ち陽氣あり。大成に云く、東南は陽なり。西北は陰なり。陽は萬物を發生して育ひ、陰は萬物を殺伐するなり。されば夜は陰なるがゆゑに陽の方に首として陽をうけて、陰を防ぐあるべし。此故に寢殿のしつらひ、或は南枕にもし給ふ常の事ありと、次の詞にかけり○白河院。後三條院第一の皇子、七十二代の帝なり。嘉保三年八月十四日御落飾、法諱融觀○北はいむ事。釋迦入滅のとき、頭北面西せりしゆゑに、いめるにあらざるべけど、北方は陰にして肅殺の氣なればにや○太神宮の御方云々。北首あれば、太神宮の方と御足にせさせたまふこともゐ、如何あらんと、世の人いひけりとなり○太神宮の遙拜、天子京都にまし〳〵て、遙かに太神宮を拜し給ふときは、東南の間に向はせらるゝゆゑに、太神宮は南にあたらずと也。

高倉院の法華堂の三味僧なにがしの律師とかやいふもの、ある時鏡を取りて顏をつく〳〵と見て、我かたちの見よく〳〵、淺ましき事を、餘りよ心うく覺えて鏡さへうとましきてゝちしければ、そのゝち、ながく鏡をおそれて、手よたよと

らぬ。さらに人はまじはる事なし。御堂のつとめばかりにあひて、籠居たりと聞傳してそありがたくおぼえしか。かしてげなる人も、ひとのうへをのみはかりて、おのれをばしらざるなり。我を去らぬして、外を知るといふことわりあるべからぬ。さればおのれをしるを、物おもれる人といふべし。かたちみにくけれども去らぬ、心おろかなるをもしらぬ、藝のつたなきをもしらぬ、身の數ならぬをもしらぬ、年の老ぬるをもしらぬ、病のをかすをもしらぬ、死のちかきをもしらぬ、おこなふ道のいたらざるをもしらぬ、身の上の非をもしらねば、まして外のそしりをしらぬ。

〔解語〕 高倉院の法華堂。高倉院諱は憲仁後白河院第三の皇子にして、八十代の帝也。養和元年正月十四日崩御、山城國愛宕郡清閑寺の法華堂に葬り奉れり。法華堂とは法華三昧を行ふ堂也○三昧僧。法華三昧と修する僧也。三昧とは專思寂想の謂也。また三摩地と名く。妙樂云論曰一切禪定心皆名三三摩地一云々○律師。要覽曰律鈔解題云佛言善解二一字一名二律師一一字者律字也○銭とおそれて手にだにとらず。昔し魏の夏侯惇といふもの、從て呂布を征する折柄、流矢に中てられ、左目を傷れるとき、將軍と爲りしに、軍中これを盲夏侯と號しければ、惇は大に怒りて銭を見る毎に、やゝもすれば、取りて地に擲てりと、この事委しく三國志に見も。また許渾が高

歌一曲掩二明鏡一昨日少年今白頭といふ詩あり。この類甚多し○ありがたくおぼえし。顏容の醜あるを、自らよく知りて、人と交際せぬ事とはめたる詞也○おしこげなる人。發明らしく自ら氣味とおせる人の事也○我をしらで云々。我身の善惡をよく知りてこそ、外の善惡をもよく知るべけれ。我をしらで、外を知る道理はあらじと也。論語曰不レ患二人之不一二己知一患レ不レ知レ人也。これを引合せて見るべし○おこなふ道云々。道は佛道と指せり。修行する佛道の行屆このさるをもしらぬと也○身の上の非としらねば云々。我身の上の非あることを知らぬもあ、人の我をしるを知る理なしと也。

〔文格〕 うたちのみにくけれども云々、心おろかなるとも云々、藝のつたなきをも云々、身數ならぬとも云々、年の老ぬるとも云々、病のをかすをも云々、死のちかきをも云々、行ふ道のいたらざるとも云々、身の上の非とも云々」は、疊句法の一格にて、かく重疊すると連疊法とも云ふ。

但かたちは鏡に見ゆ。年はかぞへてしる。我身の事しらぬにはあらねど、すべきかたのなければ、しらぬに似たりとぞいはまし。かたちをあらため、よはひをわかくせよとにはあらぬ。つたなきをしらば、なんぞやがてしりぞかざる。老ぬとしらば、なんぞしつかに身をやすくせざる。行おろかなりとしらば、なんぞ茲をれもふ事、此にあらざる。

〔語解〕すべきのたのみければ。醜を美にする仕方もなく、老を若にする仕方もなくて、世人と交際するときは、已が身と知らぬに似たりと也○のたちとあらため云々。これより兼好教訓の詞也○つたなきをしらば。藝事の拙劣と知らば何ぞ官職を辭せざると也○茲とふもふ事此にあらざる。已の行跡いたらずして、愚なりとふもはゞ、いこで行跡とよく勉めざるぞと也。こは尙書大禹謨の思レ茲在レ茲といふ文よりきたれる也。

〔文格〕つたなきと知らば云々、老ぬと知らば云々、行ひふるこのなりと知らば云々」は、對句法の一格なり。これらの類と三對法の組格とも云へり。對句と疊句との差異は、其の語尾のさまを比較して辨ふべし。

すべて人に愛樂せられぎして、衆にまじはるは恥あり。かたちみにくく、心おくれにして出仕へ、無智にして大才にまじはり、不堪の藝をもちて、堪能の座につらなり、雪のかしらをいたゞきて、さかりある人にならび、況やおよばざる事を望み、かなはぬことをうれへ、來らざることをまち、人に恐、人に媚るは人のあたふる恥にあらぎ。むさぼる心にひかれて、みづから身をはづかしむるかり。貪る事のやまざるは、命ををふる大事、今てゝに來れりと、たしかにしらざれば也。

〔語解〕愛樂。樂は人に敬愛はるゝ意なれば、げうの音によむべし。たのしむ意のらくの音に讀むべ。或る本には愛敬と書きたるもあり○衆にまじはる。此方より求めて衆人の間に交る也○不堪。不器量の藝と云ふ○堪能。何事にても、ろの道に能く堪へたる義也○雪のかしら。白髮の體をいへり。高蟠の詩に、人生莫レ遣二頭如レ雪縱得二春風一所不レ消、また文屋の康秀が歌に「春の日の光にあたるわれぎを、かしらの雪となるぞわびしき」などあり。みな同じ意也○さかりある人。壯の字義にと、曲禮に三十曰レ壯とあり○いはんやおよばざる事云々。衆人に交と求むるさへ恥なるに、まして身に及びなき事と望み、或は又こびへつらひるぞするに至りては也。こびは媚の字とあつべし○貪る心に。望み、うれへ、まち、恐れ、媚る等、みなむさぼる心のあす事也。

〔文格〕此の章も。對句疊句なぞとふきて、さまゞ〳〵あやあし、くさ〳〵におりたてゝ、文勢また殊にめでたし。此の段の始終と照しあはせて、筆力の妙とも知るべし。

資季大納言入道とかや聞えける人、具氏宰相中將にあひて、わぬしのとはれんほどのこと、何事ありとも答申さゞらんやといはれければ、具氏いかゞ侍らんと申されけるを、さらばあらがひ賜へといはれて、はかばかしき事は、かたはしもまねびしり侍らねば、尋申すまでもなし。何となき、そゞろごとの中に、おほ

つかなき事をこそ、問奉らめと申されけり。ましてこゝもとのあさき事は、何事なりともあきらめ申さんといはれければ、近習の人々、女房なども、興あるあらかひなり。おなじくは、御前にてあらそはるべし。負けたらん人は、供御をまうけらるべしとさだめて、御前にてめしあはせられたりけるに、具氏をさなくより聞ならひ侍れど、其の心しらぬ事侍り。むまのきつりやう、きつにのをかゝなかくぼれ、いりくれんどうと申す事は、いかなる心にか侍らん。承らんと申されけるに、大納言入道、はたとつまりて、これはそゞろごとなれば、いふにもたらずといはれけるを、もとよりふかき道はしり侍らず。そゞろことをたづね奉らんとさだめ申しつと申されければ、大納言入道負になりて、所課いかめしくせられたりけるとぞ。

〔語解〕 資季。正二位大納言藤原資季卿也。楊梅と號し、入道して法諱を了心といへり。法興院攝政兼家卿七代の後胤、從三位左中將資家卿の子也○具氏。從三位參議中將中院と號す。宰相は兼官也。具平親王九代の孫、從三位中將通氏卿の子也○わぬし。吾主にて、即ち汝の義也。人を指して吾子といふも此意也。俗にオヌシといふに同じ○答申さゞらんや。答まうさであらんや。乾度答申すと也。やは反語也○いかゞ侍らん。いかゞであらうかといふが如し○さらばあらがひ云々。爭也、されば難問をせよとの意にて、こは資季の詞也○はかばかしき事云々。具氏の詞にて、たしかなる事は片端も學知らねば也○何となきそゞろごとの中に云々。譫言也。わけもなき事柄の中にて、知らぬ事を伺はんとなり○ましてといふよりあきらめ申さんまで資季の詞にて、そなたの能く知らぬ事は、何事にても說明すべしと也○御前。院の御前也○供御をまうけらるべし。供御は馳走、すなはちふるまひにて、其を賭ものにて爭也。まうくるは、とゝのへこしらへる事也○をさなくより。幼時より也○むまのきつりやう、きつにのをか、なかくぼれ、いりくれんとう云々。これ等の事は、諸說くさ〳〵あれど、いかなるゆゑといふことしれず。或る人の曰く、むまのきつりやうは馬の吉良なり。唐太宗の廐の名にして、この廐に置く馬を稱して吉良ともいへり。きつにのをかは狐の岡也。狐死するときは丘を枕にすといふ故事也。なかくぼれは中のくぼまれることにて、凹の字也。いりくれんどうは入回筵道なり。これことさらむつかしくいひなしたる隱語なるべしと、また或は、遠國などに馬のわづらひたるときの、まじなひにする語なりといふ說もあれど、如何あらん○もとよりふかき道は。具氏の詞なり○所課。課は誠なり、計也、又こゝにてはその所作をおほする義にして、かけにまけたるゆゑ、馳走物を供へしめらるゝことなり○いかめしく。威儀の嚴重なるをいふ。

くすしあつしげ、故法皇の御前にさぶらひて、供御のまゐりけるに、今まゐり侍

る供御の色々を、文字も功能もたづね下されて、そらに申侍らば、本草に御覽じあはせられ侍れかし。ひとつも申しあやまり侍らじと申ける時しも、六條故内府參りたまひて、有房ついでに物習ひ侍らんとて、まづあはといふ文字は、いづれの偏にか侍らんととはれたりけるに、土偏に候ふと申したりければ、才のほど既にあらはれにたり。いまはさばかりにて候へ、床しき所なしと申されけるに、どよみになりてまかり出でにけり。

〔語解〕 くすし。醫師なり○あつしげ。醫師の名なれど、姓氏しれず○故法皇。花園院なり、萩原の法皇と號す。貞和四年十月十一日崩、或は十一日は十四日なりともいへり。今は崩じ給へるゆゑに故の字と副へしなり○さぶらひて。伺候してなり○供御。法皇への御膳といふ○色々と。種々の食物とあり○文字も功能も云々。食性によりて功能異る故なり○本草。本草經は神農はじめて之と作る。ろの後、呉氏本草、藥性本草、食性本草、あゞ種々あれど、いと能く行あはれたるは本草綱目あり○ひとつも申しあやまり侍らじ。御膳にあがるものと、一々に本草に御見合せてくださればろの氣味能毒寒熱溫涼など、みな諳じて申す所に相違あるまじとなり○六條故内府從一位内大臣有房卿なり法號と賢忠といへり。村上天皇の後裔六條左少將通有卿の子にして、和漢の學に渉り、且能書あり○土偏に候ふ、鹽と土偏に書くは俗字なり。鹽が正字な

り○才のほど云々。有房の詞あり○さばかりにて候云々。ろれほどにて候へばの意にて、奥深きこともなしとなり。こはあつしげが土偏に候と一筋にいへるによりて、ろの人物の大才にあらざること、推知せしゆゑ、こゝ嘲けりていへるなり○どよみになりて。響の字とよどむとよめり。どッと笑になりたりとあり○まかり出にけり。御前を退出せしなり。

花はさかりに、月はくまなきをのみ見る物かは。雨にむかひて月をこひ、たれこめて春の行くへしらぬも、猶あはれに情ふかし。さきぬべきほどの梢ちりしをれたる庭などこそ見所おほけれ。」歌の言葉がきにも、花見にまかれりけるに、はやく散過ぎにければとも、さはる事ありて、まからでなどもかけるは、花をみてといへるにおとれる事かは。花のちり、月のかたぶくをしたふあらひは、さる事おれど、てとにかたくなゝる人ぞ、此の枝かの枝ちりにけり。今はみどころなしおぼえはいふめる。」

〔語解〕 くまなき。くもりなきなり○見る物のは。見るものの、否見るものにあらぬとあり。○雨にむかひて月をこひ。朗詠集に、源順、對雨戀月といふ題にて、楊貴妃歸唐帝思、李夫人去漢皇情云々とあり。此題のことばなり○たれこめて。簾帷を垂れこもりての義なり、古今集藤原因香朝臣の歌に、「たれこめて春のゆくへもしらぬまに待しさくらもうつろひにけり」とよめ

るこゝろ言葉と取れるあり○猶あはれに。目の前にみたちんよりはとあり○さきぬべきほどの梢。句解に曰く、やう〳〵花のひらけんとするよろほひある木末と云ふ○歌の言葉がき。和歌の前書にて卽ち序なり○花見にまこのれりける。花見に行きけるとなり○さはる事ありて。障碍のことありてなり○おとれる事のは。おとれることの否おとらぬと也○さる事あれど。さはあるべきことあれどもあり○のたくなゝる人。頑愚の人と云ふ○此枝かの枝ちりにけり云々。頑愚の人は不風流なるゆゑ、花のちりしほれたると見て、今は、はや見所なしなどいひくたす樣なり。

〔文格〕 雨に向ひて月とこひ、たれこめて春のゆくへしらぬ」は、疊句法の粗格なり。ことにのたくあゝるひとぞは、いふめるへ係りて、係結格となす文脈なり。

よろづの事も・始終てそをかしけれ。男女の情も、ひとへに逢ひみるをばいふ物かは。あはでやみにしうさを思ひ、あだなる契をかたち、長夜をひとりあかし、遠き雲井を思ひやり、淺茅がやどにむかしを忍ぶてそ、色このむとはいはめ。」

〔語解〕 よろづの事も。決前生後の詞なり。句解に曰く、上に花月の事と論じて、下に男女の上といはんとて、中間に此一句と書きたる言葉つゞき尤味ふべし○逢ひみるとばいふ物のは。偏に逢見るのみと情とはいふべからずとの意なり○あはでやみにし。相逢はずして止みたりしなり○あだなる契とのこち。相逢ふこと能はずして、あだに結びし約束など變じたると、のこち恨みあり○遠き雲井。國境と隔つる中といふ。伊勢物語に「わするなよ程は雲井にゐりぬとも空も〻月のめぐりあふまで。」とあり○淺茅が宿。茅の短く生ひたるを云ふにて、荒れたる宿のさまなり。

〔文格〕 あはでやみにしうさと思ひ」已下、淺茅の宿にむかしと忍ぶ」までは、例の疊句法の一格なり。

望月のくまなきを、千里の外までながめたるよりも、曉ちかくなりて、待出たるが、いと心ふかう、青みたるやうにて、ふかき山の杉の梢にみえたる、木の間の影うちなぐれたる、村雲がくれの程、またなく哀なり。椎柴、しらがしなどの、ぬれたるやうなる葉のうへに、きらめきたるとそ、身にしみて、心あらん友もがなと、都てひしう覺ゆれ。」

〔語解〕 望月。十五夜の月なり。釋名曰望月滿之名也○千里の。外謝希逸月賦美人邁兮音塵闊。・隔千里兮共明月。唐李嶠詩三五二八夜。千里與君同○うちしぐれたる村雲がくれ。行家卿の歌に「村雲のゐゝれとてしもうば玉の夜わたる月のなぞしぐるらん」とあり○またなく。二ッ

となくすぐれての義なり○椎柴。椎の木なり○ぬれたるやう。つやあるさまなり○心あらん友もがな。風雅の心あらん友ありなば、共に此景色とみまほしきものとなり。かなは希求の助辭なり。

すべて、月花をば、さのみ目にて見る物かは。春は家を立さらでも、月の夜は閨のうちながらも、思へるこそ、いとたのもしうをかしけれ。」よき人は、ひとへにすけるさまにも見えぬ。興ぜるさまも等閑なり。かた田舎の人こそ、色こく、萬は、もて興ぜれ。花のもとには、ねぢよりたちより、あからめもせぬ、まもりて、酒のみ、連歌して、はては、大なる枝、心なく折とりぬ。泉には手足さしひたして、雪にはおり立ちて、あとつけなど、よろづの物、よそながら見る事なし。」

〔語解〕目にて見る物かは。莊子曰。吾所レ謂聰者。非レ謂二其聞一彼也。自聞而已矣。吾所レ謂明者。非レ謂二其見一彼也。自見而已矣。遊生八牋五云。水樂洞雨後聽レ泉。我躍豈無レ耳哉。更當下不二以レ耳聽一以レ心聽上。○閨のうちながらも思へるこそ。月や出でぬらんなど思ひやるあり。杜甫詩今夜鄜州月。閨中只獨看とあり○とのしけれ。面白けれといふ意義なり○すけるさま。興ずるさま。上品ある都人士は、すき興ずるも左程好むやうにも見えず、ろの樣体ゆるやかに大やうありとなり○色こく。俗にシツコク、タイツウなどいふ義なり○もて興ずれ。もてはやし興ずるなり○あからめもせず。あからめは漢語の游目の意なり。他所目もふらず見詰るといふ○泉には手足。泉は泉水といふ。李商隱雜纂雜風景の部に花上曝レ裩。清泉濯レ足とあり。

さやうの人の、祭みしさま、いとめづらかなりき。見でといとおそし。其ほどは桟敷不用なりとて、おくなる屋にて、酒のみ、物くひ、圍碁、双六など、あそびて、桟敷には、人をおきたれば、わたりさぶらふといふ時に、各きもつぶるゝやうに、あらそひ走りのぼりて、落ちぬべきまで、簾はり出て、おしあひつゝ、一事も見もらさじとまもりて、とあり、かゝりと、物でとにいひて、わたり過ぬれば、又わたらんまでといひておりぬ。たゞ、物をのみ見んとするなるべし。」

〔語解〕祭みしさま。賀茂の祭と見し有樣、最も珍しのりきとなり○見でといとおろし。見る事でも遲きあり。これより田舍人のいふ詞あり○桟敷不用。祭のわたらぬほど、桟敷に居ると無用なりとなり○人と置きたれば。祭のわたるときしらせよと言付て人と置きたるなり○とあちぬべきまで。先と爭ひ桟敷へはしりのぼりて、桟敷のふつるやうに見ゆるまでとなり○とありのゝり。兎や角と物ごとに評判するなり○又わたらんまで。他の見物わたらんまでといひて桟敷を下るゝあり○たゞ物と云々。兼好の評語あり。

都の人のゆゝしげなるは、ねぶりていとも見ぬ。わかくすぶゝなるは、宮づ

かへにたちる、人のうしろにさぶらふは、さまあしくもおよびかゝらぞ。わりなく、見んとする人もなし。何となく、葵かけわたして、おまめかしきに、明はおれぬほど、忍びてよする車どものゆかしきを、それか、かれかなど思ひよすれば、牛飼下部などのみしれるもあり。をかしくも、きら〳〵おくも、さま〴〵に行かふ、見るもつれ〴〵からぞ。暮るほどには、たてならべつる車ども、所なくなみるつる人も、いづかたへか行きつらん。程おくれにおりて、くるまどもの、らうがはしきもすみぬれば、簾たゝみもとりはらひ、目の前にさびしげにおりゆくてこそ、世のためしも思ひしられて、あはれおれ。大路みたるこそ、祭見たるにてはあれ。」

〔語解〕もゝしげゐる。ゆゝしはいまゝ〳〵敷といへる意の所に用ふれど、こゝはうしろき人と云ふに同じく、ほめたる詞なるべし○ねぶりて云々。眠ぶる体に見えて、強ち見やうともせぬなり○わうく。若輩にて、立居下人ども也○人のうしろにさぶらふは云々。人の供して後に居るものは、外見の様子わろくも、人の肩などに及び越しになりて、無理に見んとする人もなしとの意也○葵のけわたして。賀茂の祭には、御簾、柱、諸道具などに葵桂の蔓とかくるなり○明はなれぬほど。未明より、しづかに忍びて、物見の 棧敷によする体也○それのかれの。其人歟、彼人歟など思ひよすれば、車の牛飼や、供する下部などの中に、誰の召仕るゝ者と見知れるもあり

とあり○さら〳〵ぞく。美麗の義也○行のふ。往還の字に當る也○ちらうがはしさも。亂りがはしさも也○簾たゝみ。棧敷の道具をいふ○世のためし云々。句解に曰く、祭の始終と見て、世の治亂盛衰、人の生死榮枯と思ひ合すと也○大路みたるころ云々。祭の日の大路の賑のなると見たるが、卽ち祭と見たる本意ぞよとて、物を觀ずるたよりにいへるなり。

彼棧敷の前を、てゝらゆきかふ人の見しれるが、あまた有るにてをりぬ。世の人數も、さのみは多からぬにてそ。此の人みなうせおん後、我身死ぬべきに定りたりとも、程なく待ちつけぬべし。大きなる器に、水を入れて、ほそきあなをあけたらんに、をたゝる事すくおしといふも、おとたるまおくもりゆかば、やがてつきぬべし。都の中におほき人、死おざる日はあるべかちぞ。一日に、一人二人のみならんや。鳥部野、舟岡、さらぬ野山にも、おくる數おほかる日はあれど、おくらぬ日はなし。されは棺をひさくもの、作りてうちおく程なし。わかきにもよらぞ、つよきにもよらぞ、思ひがけぬは死期おり。けふまでのがれきにけるは、有りがたき不思議なり。をばしも、世をのぞかにはおもひおんや。まゝ子だてといふものを、賽六の石にて作りてたておらべたるほどは、とられん事、いづ

れのいしとも志らねども、かぞへあてゝ、ひとつをとりぬれば、その外はのがれぬとみれども、又々かぞふれば、彼是まぬきゆくほどに、いづれものがれざるに似たり。」

〔語解〕 こゝら。巨々等とも幾許ともかけり。多き義也○さのみは多のちぬ。さまで多くはあらざるにころと覺もとなり○大なる器に云々。比喩なり。人の漸々衰へて死ぬるは、恰も漏刻の水の滴りつくるが如し○鳥部野、舟岡。京都の近くに在る送葬の場所也 ○さらぬ野山。さやうの送葬場にあらぬ野山にて、鳥部野、舟岡の外なる野山なり○棺をひさぐ ひさぐは鬻の字也 淮南子に鬻レ棺者欲二民之疾病一、和名集に棺所二以盛屍也、棺、或は比土岐と訓す、音相通ずる也 ○思ひがけぬは死期也。意外に來るは死期ぞかりと也○志ばしも世とのどのには思はぬ身ぞあはれなりける」とあり○まゝ子だて。野槌に曰く二一三五二二四一一三一二二一 如此黒白の石と十五づゝ三十ならべのぞへて、十にあたると除くなり○のがれぬと見れども。免れ、のがれたと見えれども也○まぬき。脱の字とまぬくとよむ。こゝにては間抜の意にて抜き取るといふ○のがれざるに似たり。人のおくれ先きだちはあれ、いつの死とのがれぬありさま是に似たりと也。

兵の軍に出づるは、死にちかき事を知りて、家をもわすれ、身をもわする。世をそむける草の庵には、閑に水石をもてあそびて、是をよそに聞くと思へるは、いとはかなし。志づかなる山のおく、無常のかたきゝはひ來らざらんや。其の死にのぞめる事、いくさの陣にすゝめるにおなじ。」

〔語解〕 兵の軍に云々。兵士と出家とは、ろの身分はかはれど、死にちのつく事としりて、家とも身ともわするべきは一ありと、兵士とたとへにひきて、出家のいましめと云へるあるべし○世とろむける。世捨人といふ。これ兼好の身上といふあるべし○閑に水石を。山林の間に居て、泉石を把玩するさまなり○是とよろにきく 是とは彼の兵士のいくさに臨みて、死にちのづき危きさまとさす。句解に生死無常は、出世の身も遯世のうへも、のはる事なき道理を志らしむる也とあり○のたき。敵也、上にいくさ人の事をかけるによりて、こゝにのたきとは云へる也○きはひ。競の字にてあらろふ意也○軍の陣。陣は行列也、軍隊の備といふ。

〔文格〕 家をもわすれ、身をもわする」は、疊句法の精格なり。

祭すぎぬれば、後の葵ふようありとて、或人の御簾なるを、皆、とらせられ侍りしが、色もなく覺え侍しを、よき人の志給ふ事あれば、さるべきにやとおもひしかど、周防内侍が、「かくれどもかひあき物はもろ共にみすの葵のかれはなりけ

り」とよめるも、母屋の御簾に、葵のかゝりたるかれ葉をよめるよし、家の集にかけり。ふるき歌の詞書に、かれたるあふひにさしてつかはしけるとも侍り。枕ノ草紙にも、こしかたてひしき物、かれたる葵とかけるてそ、いみじくおつかしう思ひよりたれ。鴨ノ長明が、四季物語にも、玉だれに、後のあふひはとまりけりとぞかける。おのれとかるゝだにてそあるを、名殘おく、いかゞとりすつべき。

〔語解〕 祭。加茂祭あり○後の葵云々。祭すぎたる後は葵とのけふくこと無用ありと也○色もなく。俗語のアイソウモナキといはんが如し○さるべきにや。さやうにあるべきことにやとの意也○周防内侍、周防守從四位上繼仲の女、後冷泉院の女房也。或は曰ふ棟仲の女、白河院の女房なりと○のくれぞも云々。このみすにのけし葵の枯葉も、われ思ふ人と、もろ共に見てころ甲斐あらめ。今はもろ共に見ねば甲斐なしとの意あり。葵に逢日とのね、のればは離ばと枯葉と兼用ひたるさま也○母屋。本屋ともこのけり。ふも屋といふ事にて、家のまん中といふ。母屋の御簾とは、廂と奥との隔てにのけたるなり○家の集。歌人のみづからの歌を集めたるといふ○枕ノ草紙。清少納言が作なり○こしのたこひしき物云々。こしのたは來し方にて既往なり。枕ノ草紙に、のれたる葵とのけるを、あつかしく思ひつきたるゆゑ、よき趣向とほめたる意也。○鴨長明。鴨禰宜長繼の男、季繼の孫也。文段抄に、歌は俊惠法師の弟子なりしと、後鳥羽院和歌所の寄人とあさせ給へり。出家して法名蓮胤とて、外山といふ所にすみける云々、著書數種あり。と見も○四季物語。四卷あり○玉だれ。玉すだれ也○おのれとのるゝだに、葵の自然と枯るだにあはれなるに、まして跡のたもなく、いのゞ捨てらるべきとの意也。

御帳にかゝれるくす玉も、九月九日、菊にとりかへらるゝといへば、さうぶは、菊のをりまでも、あるべきにこそ。枇杷皇太后宮かくれ給ひて後、古き御帳の内に、さうぶ、くす玉などのかれたるが侍りけるを見て、をりおらぬねをおはぞかけつると、辨のめのとのいへる返事に、あやめの草はありながらとも、江侍從がよみしぞかし。」

〔語解〕 御帳。御とばりなり○くす玉。種々の香料と玉にして、種々の造花と結び付け、五彩の絲の八尺許なると垂れたるもの、簾或は柱などに掛けて、不淨を拂ひ邪氣と避くといふ。端午には菖蒲を添へ、重陽には菊と添へて新と舊とと換ふるなり。又玉に五彩の絲のみ添へて身に繫くると掛香といふとぞ○枇杷皇太后宮。御名は妍子、御堂ノ關白道長公の女、萬壽四年九月に隱れさせ給へり。三條院の后にて、世に枇杷殿の皇太后宮といへるは是れなり○とりならぬねと云々。文段抄云、枇杷どのゝ皇太后宮煩ひ給ひける時、所とのへて心みんとて、外にわたり給

へりけると、かくれ給ひて後、陽明門院一品内親王と申ける、びわどのにゐへり給へりけるに、ふるき御帳のうちに、あやめ、くす玉などの枯たるが、侍けると見てよみ侍ける、辨の乳母「あやめ草なみだの玉にぬきゐへて折ゐらぬねとなほぞのけつる。」返し、江の侍從「玉ぬきしあやめのくさは有りながらよどのはあれん物とやは見し」はじめの「あやめ草涙の玉にぬきゐへて」は、藥玉とろへてなり。折ならぬとは、あやめのねに、なくねとろへて、九月なればとゐらぬねといふふり。返しのよどの。淀野は、あやめある所ゐるに、夜殿と后宮の御寢所にゐけてよめり○辨のめのと。前加賀守顯時の女、陽明門院の御乳母也○江の侍從。式部大輔大江匡衡の女、母は赤染衛門。

家にありたき木は、松、さくら、松は五葉もよし。花はひとへゐるよし。八重櫻は、奈良の都にのみ有けるを、此のごろぞ、世におほくなり侍るゐる。吉野の花、左近のさくら、みなひとへにてこそあれ。八重櫻は、ことやうの物なり。いとこちたく、ねぢけたり。うゐぞとも有りなん。おそざくら、又、すさまじ。むしのつきたるもむつかし。梅は白き、うす紅梅、ひとへなるが、とくさきたるも、かさなりたる紅梅のにほひめでたきも、みゐをかし。おそき梅はさくらにさきあひて、覺えたり、けおされて、枝にゐぼみつきたるこゝろうし。ひとへなるが、まづ、さきて散りたるは、心とくをかしとて、京極ノ入道中納言は、なほひとへ梅をなん、軒ちかくうゑられたりける。京極の屋の南むきに、今も二本侍るめり。柳、又をかし。卯月ばかりのわかゝへで、すべて萬の花紅葉にも、まさりてめでたきものなり。たちばな、桂、いづれも木は物ふり、大きなるよし。草は山吹、藤、杜若なでして、池には蓮、秋の草は荻、すゝき、きちかう、萩、女郎花、ふぢばかま、ゐをに、われもかう、かるかや、りんだう、菊、黃菊も、つたくゞ、朝顏、いづれもいとたかゝらゞ、さゞやかゐる垣に、ゐけからぬよし。此の外、世にまれなる物、からめきたる名の聞きにくく、花も見ゐれぬなど いとなつかしからゞ。おほかた、なにもめづらしく、有りがたきものは、よからぬ人のもて興ゞるものゐり。さやうの物ゐくてありなん。」

〔語解〕 五葉。五葉の松ゐり○花は 櫻とさす○八重櫻はゐらの云々。八重櫻は聖武ノ帝のとき、ゐらの都にうゑられしといふ。このならの都は、大和國添上郡に在りて、元明帝以下七代の舊都なり。詞花集に、一條院の御時、ならのやへざくらを人のたてまつり侍けるを、おまへに侍りければ、其花と給りて、歌よめとおほせられければよめる、伊勢ノ大輔「いにしへのならの都の

やへざくらけふ九重に匂ひぬるかな」とあり○吉野の花。大和國の吉野山の産にて、花おほくむらがりて蕚より蘂にかけて青し。山櫻の一種也○左近のさくら、紫宸殿の南庭の左右に左近の櫻、右近の橘の兩樹あり。こは仁明帝の御宇よりうゑられきといふ○ことやう　異樣なり○こちたく。心痛にて俗語のクド〳〵シイといはんが如し○ねぢけたり。枝などのまがりくねりて、すなはならぬといふ○むしのつきたる。毛蟲などのつくといふ○むつかし。むさくるしき意也○とくさきたる。初春に疾く開くといふ○かうき梅はさくらにさきあひて云々。暮春のころ、さく梅は、丁度、櫻のさく時分なれば、人みな櫻のめづらしきと賞するゆゑに、梅は見劣るとも○けれされ　氣押さる也○京極入道中納言。正二位權中納言定家卿なり。貞永元年十一月に出家し、法名明靜といへり。仁治二年八月廿日薨ず。年八十三。京極と號す○ひとへ梅をゐん軒ちかく云々。風雅集に曰〃定家卿はやうすみける家に、えばし立入て程へ侍けるとり、このみづのちうゑて侍りける梅の樹の枝に、むすびつけゝる、永福門院の內侍「わすれじな宿はむかしに跡ふりてのはちぬ軒に匂ふ梅がえ」返し前〃大納言爲世「くちのこるふるきのきばの梅がえも又とはるべき春と待つらし。」○今も。兼好時代也○めでたき。愛すべき也○きちかう。桔梗なり○ふぢばかま。藤袴也。蘭の字ともかけり。二色あり○えとに。紫菀也○われもかう。木香なり。葉刈萱に似て穗あり○りんだう。龍膽也○さゝやかなる垣。小き垣なり○さやうの物なくてありぬん。唐めきたる名の、聞きにくゝして珍奇なる物は、よき上品の人にはゐくしてありたきと

の意なり。

身死して、財殘る事は、智者のせざる處なり。よからぬ物、たくはへ置きたるもつたなく、よき物は、心をとめけんと、はかなし。こちたくおほかる、まして口をし。我こそ得めなどいふ者どもありて、跡にあらそひたるさまあし。後はたれにと、心ざすものあらば、いけらんうちにぞゆづるべき。朝夕なくてかなはざらん物こそあらめ。其外は、何も持たでぞあらまほしき。」

〔語解〕　身死して云々。前漢書曰韋賢及子玄成、俱以明經至相。諺曰遺子黃金滿籯不如教子一經。後漢書曰廳德公居峴山之南、平生不入城府。劉表問曰先生不肯受官祿、何以遺子孫。曰世人遺之以危。我遺之以安。これ等の故事を引合せて思ふべし○よからぬ物云々。諺解に曰く、是等の物秘藏せしかと、持てる人の拙く思はるゝなり○我こそ得めなど云々。跡にのこる者どもの、ふかれ取らんかぞゝいひて、互にあらそふありさま惡しきなり○後はたれにと云々。死後には、誰々に讓らんと思ふ人あらば、生きゐる間にゆづり置くべしとなり。

悲田院堯蓮上人は、俗姓は三浦のかにがしとかや、さうなき武者なり。故郷の人の來りて、物がたりすとて、吾妻人てそ、いひつる事はたのまるれ。都の人は、てとうけのみよくて、實なしといひしを、聖、それはさこそおぼすらめども、おのれ